

## 地域密着型社会的企業の 挑戦と課題

ビッグイシュー名古屋ネットの歩みから見た  
日本のホームレス支援モデルの研究

The Tasks and Challenges Faced  
by Community-based Social Enterprises

A Study of the Homeless Support Model Based  
on the Experiences of "Big Issue Nagoya Net"

全泓奎・ビッグイシュー名古屋ネット編

Edited by Hong Gyu Jeon, Big Issue Nagoya Net

## 巻頭言：レポート発行に寄せて

全泓奎、大阪市立大学都市研究プラザ准教授

本レポートは、ビッグイシュー名古屋ネットとの共同編集によって発行に至った。編者の一人である全泓奎は、2005年より日本福祉大学にCOE主任研究員として赴任したのを契機に、名古屋でホームレス支援活動や関連調査に関わることになった。直接的なきっかけは、名古屋に赴任する前、東京にいた頃にかかわっていた支援団体とのつながりであった。ホームレスや困窮層に対する新たな支援モデルに関心を持ち、関連する活動や研究を行っていた時に出会ったのがビッグイシューだった。早速、名古屋でもビッグイシュー販売が展開できないかとあちこちをあたり、準備を始めた。それは支援活動でもあったが、一方で研究者という視点から振り返ると、アクションリサーチの一環としての取り組みでもあった。研究者という肩書がついている限り、いくら自分が否定しても、全くの一般人として活動に関わっていくことは不可能に近い。しかし、とはいえ最初から研究だけを目当てにした関わりとも違う。そのあたりの掛け合いの難しさがいつも宿命のようについてきた。しかし、支援活動と研究活動を並行し、その駆け引きの中で当事者であるホームレス販売者の利益や選択肢が最大限に広がるようなプロセスの構築を目指した。また、個人的にみると私はビッグイシュー名古屋ネットの一員であり、それ以前に現在は大阪市立大学の教員でもある。そのような形で社会人としても二重のかかわりをビッグイシュー名古屋ネットに関しては持っている。それが結果的には、「大阪市立大学都市研究プラザ」と「ビッグイシュー名古屋ネット」とがつながるきっかけにもなり得る。私は、都市研究プラザの中で社会的包摂ユニットに所属しているが、本ユニットは、社会をよりインクルーシブな形に、つまり誰もが自分の持つケアパリティが発揮できるための機会に満ちた社会にしていくことを研究や活動の対象として考えている。そういう点においてもビッグイシュー名古屋ネットと都市研究プラザの社会包摂ユニットは切り離し難い関係であり、今後もさらに相互(被)介入の中で発展を続ける関係となっていくことが望まれる。本書は、いわば、都市研究プラザ社会包摂ユニットとビッグイシュー名古屋ネットとの共同作業の成果とも言えよう。そして、今後の更なる共同研究や活動などに向けた第一歩としても位置付けたい。

本レポートが、ホームレス支援モデルを考える際に、一つの実践例として取り上げられることを期待する。

全泓奎・ビッグイシュー名古屋ネット編

# 地域密着型社会的企業の 挑戦と課題

ビッグイシュー名古屋ネットの歩みから見た  
日本のホームレス支援モデルの研究





名古屋で「ビッグイシュー」の販売でホームレスの自立支援をしている団体が「ビッグイシュー名古屋ネット」です。継続的な雑誌の販売で生活の糧をつくり自立を応援し、ビッグイシューを通じてホームレス状態の人やホームレス予備軍、周辺問題への理解を深めていくことを目的に活動しています。雑誌を売る人、買う人、応援する人、みんなをつなげるネットワークとして今日まで続いています。

## 目次

刊行の辞 全 泓奎	2
応援メッセージ	3
(有)ビッグイシュー日本代表 佐野章二	
笹島診療所 定森 光	
NPO ささしま共生会 竹谷 基	
ビッグイシュー코리아販売者の皆さん	
今井 くるみ	
福田 実佐枝	
ビッグイシュー名古屋ネット 5年の歩み	11
社会的排除に抗しうる 「自立型の福祉社会システム」の可能性 全 泓奎	24
Homeless Report in the World	32
つながる和、はずれた色眼鏡 山本一穂	
田舎町のシェルター@米国 阿部太郎	
反貧困ネットワーク運動と ビッグイシュー名古屋ネット 阿部太郎	36
販売者からのメッセージ	39
ビッグイシュー名古屋ネット ボランティアからのメッセージ	51
新聞記事紹介	83

# 刊行の辞

ビッグイシュー名古屋ネット ジョン ホンギョ 全 泓奎

「ビッグイシューです!」。2006年4月15日、名古屋で初めてビッグイシューの販売を開始してから、はや6年目を迎えようとしている。最初はたった一人の販売員から始まり、今は6名の販売員が『ビッグイシュー』を高く掲げ、声高く道行く市民に呼びかけている。ビッグイシューは、1991年にイギリスで生まれた、ホームレスの人々だけに販売が限定されている雑誌である。一人ひとりが販売の主体であり、どこにも誰にも属さない。ビッグイシュー本社とは受け渡しと仕入を行うだけの関係であって、販売員個人は立派な自営業者である。販売員は雑誌販売を通して、収益の獲得のみならず、社会とのコミュニケーション通路も得られることとなる。お客さんからの「1冊ください」の声は、販売員にとって、道路を挟んで遠く広がるだけであった社会との新たな接点を取り戻す機会にもなる。これまで長年販売を続けてこられたほとんどの販売員には、「お得意さん」がついていることがそれを表している。無論、収益を得る、それ自体もビッグイシューがもたらした最も大きな役割と言えよう。つまり、これまで路上にいるホームレス当事者が収益を得るための手段となると、空き缶拾いや並び屋、または運よく手配師に連れられて現金収入の仕事に就くか、飯場に入るぐらいしか選択肢がなかった。その雇用関係の不安定さや雇用環境の劣悪さについてはこれまでに数多く取り上げられている。しかし、ビッグイシューの販売では、自分が決めた時間に、自分が決めた場所で販売して収益を得、資産を増やしていくことが可能である。実際に販売員の中には、販売の収入だけで生活の糧を得、暮らしを立て直している方が多い。もちろん、近年の社会経済情勢の悪化の中、販売だけでは無理があり、生活保護と抱合せた、いわゆる「半福祉半就労」という自立の有り様も現れている。中には、ビッグイシュー販売を踏み台として他の仕事に就く人もいる。ビッグイシューの販売は、販売を通じた収入とコミュニケーションの創出という意味で、既存の福祉が切り拓けなかった新たな「福祉実践」、つまり「生産的福祉=社会開発アプローチ」とも言える。

この度『ビッグイシュー名古屋ネット5周年記念誌：ビッグイシュー名古屋ネットの歩み』の刊行を企画した理由は、より多くの方に私たちの活動を理解していただき、名古屋での販売がより促進されることを願ったためである。東海三県で販売を展開しているのはまだ名古屋だけである。これからは岐阜県や三重県など広範囲にわたる地域展開の中で、ビッグイシュー販売を必要とする方、ビッグイシューの記事や出版の趣旨に共感していただける方のネットワークをさらに広げていけたらと切に願っている。

この小さな冊子は、多くの方のご協力のおかげで刊行に至った。販売開始当初からかかわってくれた支援スタッフ、販売員の方々、通常業務の傍ら、本誌の編集に時間を割いて細かな対応をいただいた石原明さん、そして何より、購読者のみなさんに厚く感謝申し上げたい。また、本誌の刊行にあたっては、文部科学省科学研究費補助金「東アジアにおけるホームレス支援モデルの構築(研究代表：全泓奎)」(課題番号21730455)による研究費の助成を受けた。

# 名古屋ネットワークへのメッセージ

(有)ビッグイシュー日本代表 佐野章二

ビッグイシュー名古屋ネットワークは、初めての、個人参加の市民による販売&販売者支援ネットワークとして生まれました。2006年6月、ビッグイシュー創刊から2年9ヶ月後のことでした。この年4月、東京から名古屋へ研究者として赴任されたジョン・ホンギョ(全泓奎)さんの働きかけで「野宿労働者の人権を守る会」の協力を得て誕生したのです。首都圏と京阪神圏にはビッグイシューの販売者はいて、なぜ中京都市圏にはいないのか? そんなホンギョさんの素朴な疑問を起点にして生まれたのです。

この前年の2005年6月仙台で販売が始っていました。ここでは2000年からホームレス支援の活動をしていた「仙台夜回りグループ」の組織活動の一部として開始されました。その上で、販売のための市民組織として「仙台ビッグイシューソサエティ」がつけられました。また、直前の2006年4月に始まった広島は「広島ホームレス支援機構」の活動として始まりました。いずれも、従来型のホームレス支援活動の一環として始められました。これらのホームレス支援活動には、夜回り、炊き出し、福祉の制度につなぐ、またつなぐための住居の提供、就労支援、の5つぐらいの活動のタイプがあるように思えます。

ビッグイシューはホームレスの人しか出来ない「仕事を提供」という6番目のタイプの支援活動かも知れません。仕事を失ってホームレス状態になる人が多いなか、直接仕事を提供するというのはわかりやすい活動でした。販売という仕事上、多くの人々の共感と賛同がないと成り立たないものでもありました。だから、市民のみなさんがボランティアとして参加してくださることになるのかもしれない。

しかし、現実には日々の卸や販売者サポートは時間的にも場所的にも、かなりハードルの高い支援活動です。にもかかわらず、なぜ、ボランティアに参加していただけるのか? また、なぜ、ボランティアとして簡単ではない活動を続けていってもらえるのか? ありがたいという感謝のひとつです。

いま、私は、仕事を提供することで、自立支援、機会(チャンス)を提供し、ホームレスの人をビジネスパートナーにでき、問題の被害的当事者になった人を問題解決の担い手にできる社会的企業として成功させたい、と願っています。そして、ボランティアの人も参加したくなる、また、参加できる魅力的でハイブリッドな会社経営組織を、この日本でつくりたいと思っています。

名古屋ネットがトップを切った個人による販売&販売者支援ネットワークは、2007年5月の「ビッグイシューふくおかサポーターズ」、2007年9月の「ビッグイシューさっぽろ」、2008年10月の「ビッグイシューかごしまサポーターズ」、と続きました。いまでは、金沢市、立川市、三鷹市、横浜市、川崎市、大宮市、千葉市、船橋市、などにもボランティアグループや、地元の市民団体と連携する市民の活動があります。

ビッグイシューはボランティアに支えられる社会的企業であり、これからの市民社会はボランティアがつくる社会だとも言えます。これらのボランティアのあり方や可能性の有力な実験場が名古屋ネットワークなのかもしれません。

# 5周年にあたって

笹島診療所 定森 光

笹島診療所の定森と申します。ホームレス支援の活動をしている仲間として、また一人の読者として、ビッグイシュー名古屋ネットの5周年を心よりお祝い申し上げます。

私が所属している笹島診療所（以下、診療所）では、ホームレス状態にある方の医療相談・生活相談を主に行っておりますが、日々の相談の中で、働きたいけれど働く場所が見つからないという方に多く出会います。「仕事なんてどこかにあるだろう」と診療所でボランティアをする前には思っていましたが、実際にはホームレス状態になっている方々が働けるような場所は少ないのが現状だと気づかされました。そのような現状に対して、ビッグイシューは、ホームレスの方の就労の場を創出しているという点で、画期的な試みだと思いますし、診療所として見習う必要があると思います。

ところで、ホームレス問題に普段馴染みがない方でも、ホームレス問題という言葉を知り、何かしらイメージは思い浮かぶと思います。「自己責任だろ」「好きでやっているのでしょ」という個人の責任に帰するイメージを持つ方もいれば、「派遣切りや福祉行政からはじかれた結果だ」という方もあるかと思います。しかし、ホームレスになられた方と対面した際に思うことは、様々な要因が絡み合ったうえで、ホームレスになっているのだということです。そこで、診療所としてもホームレスになった方の実情について、広く地域社会の方々に知ってもらい、一緒にホームレス問題について考える機会をつくりたいと思い市民フォーラム（講演会など）を実施しております。しかしながら、ホームレス問題に普段馴染みのない方の参加になかなか繋がらないなど課題があります。

その点、ビッグイシューというのは、ホームレス問題に関心のある方だけでなく、関心のない方も含めた地域の幅広い層の人達とホームレスをつなげる接点となっているように思います。雑誌の購入を通じて、思いがけずホームレス問題に向き合うことになった人も多くいるかと思います。地域の人達に身近な問題として感じてもらうためにも、ビッグイシューの果たす役割というのはとても大きいように思います。

そして、一人の購読者として、名古屋でビッグイシューの販売が続いていることは、本当に嬉しく思っております。有名人のインタビュー記事のように気楽な気分で読めるものもあれば、社会問題について書かれた記事のように考えさせられる内容のものもあり、読んでいて飽きることがありません。そして、読みごたえはあるのに、読んだ後にどっと疲れるということもなく、読みやすい雑誌だと思います。

ちなみに特に私が好きな記事は、ホームレス人生相談です。自らの経験をもとに語る販売員の方の言葉に、いつも励まされます。自らの経験・人生をしっかりと見つめられた上での言葉は、すっと心に届く言葉になるのかなと感じています。

それと、ビッグイシューの魅力は雑誌の記事だけでなく、購入方法、つまりは販売者の存在にもあると思います。私事になりますが、名古屋駅付近を訪れた際、せわしなく歩く人ごみにまみれ、ふと気づけば自分もせわしなく歩いてしまうことがあります。そのようなときに、ビッグイシューの販売の方を見かけるとほっとします。販売員の方との何気ない会話が、忙しかった気持ちにゆとりを生んでくれます。インターネットであらゆる物が購入できる時代だからこそ、ビッグイシューのような人と人が触れ合いながら物を買えることの意義があるように思います。

ビッグイシュー名古屋ネットを5年間支えてきた、販売員・ボランティアの方々、これからも名古屋でのご活躍、宜しくお願い致します。



# 5周年おめでとう。

NPO ささしま共生会・理事長 竹谷 基

私は長い間、ホームレスの方への炊き出し、その他の支援活動をやらせていただいています。炊き出しでは「出会いと交流」を目的にしています。提供できるものは、週二回、丼一杯飯でしかありません。それでも、私たちの炊き出しに、開始の夜8時まえ、なんと午後1時から待っておられる人がいると聞くと何とも申し訳なく思いますが、同時に、そこまで、食に不自由されている人がいる日本社会の実情を知らされて愕然とします。

さて、そんな炊き出しですが、余裕のあるときには、利用される方からお話を聴く機会をもちます。その中で、風袋はおせじにも綺麗とは見えないGさんと何回か話を聴きました。あるときは、私がクリスチャンだと知っているせいか、不思議なこともあるんだなど次のような話をしてくれました。ある公園で休んでいたところ、お腹が空いて何ともならなかったので「イエス様、助けてください」と祈ったところ、あれま、不思議、あるおばさんが「これ食べて」と袋を一つ置いて行ったとのこと。思わず、感謝して頂いた、と話されました。これを、きっかけに、炊き出しで会うたび、話を聴きました。そのうち、ビッグイシューの販売をされると言われ、売れないときには買いますからと約束しました。

炊き出しには、なかなか売れないとか、買い取りだから大変だとか言いながら、ビッグイシューのバックナンバーを持ってきたので、ルール違反と言いながら、買いました。また、私たちと縁のある自立支援センターに一年入居していただき、色々ありましたが、幸い、その後、新たなアパートへ転居して行かれました。

私たちの炊き出しはホームレスの方の「自立」支援が目的ですが、世界的に就労先のない現在、非常に困難となっています。生活保護受給により「住と食」はやっと確保できますが、その後の暮らしをどうするかまでは見通しがないとしか言えません。ビッグイシューのように起業する以外にはないのではないのでしょうか。新たな起業もまた困難ですし。

私たちのNPO法人には『共生会』と名がついています。しかし、余った時間とお金を支援に回すだけでしかありません。自分の生活、仕事は確保した上でしか関わっていないのです。「共生」の名ばかりなのです。真に「共生」するために、何をしなければならぬか、ビッグイシューの方たちと考えながら、前に進みたいと思います。

# ビッグイシュー名古屋ネ

韓国の販売者も応援しています。寒い冬で心も寒くなりますが、いつも希望を持ち温かい心でいられることを願います。ビッグイシューを通じて多くの勇気を読者と分かち合えますように。

ソウル大学前 **李ミンス**

5周年おめでとうございます。

Sookmyung 女子大入口 **金ホンテ**

私は韓国でビッグイシューを販売する金ヒジョンです。韓国でも昨年の夏から大田市で販売される方が現れました。初めての販売者は、多くの困難と厳しさを乗り越えないとなりません。名古屋も同じ状況ではないかと思います。しかし、いつかは必ず報われる時が来ると信じています。地域で広がることをお祈りしています。

鐘路区役所 4ゴリ **金ヒジョン**

ビッグイシュー名古屋ネットの創立5周年、おめでとうございます。

Soongsil 大学入口 **崔チョンボク**

ビッグイシュー名古屋ネット5周年、誠にありがとうございます。日本のビッグイシューもとても面白く内容も充実しており、楽しく読んでいます。いつも健康で幸せでいられますようお祈りします。

鐘閣駅 **具ボンチュン**

はじめまして、ビッグイシュー名古屋ネット関係者のみなさま。販売活動の5周年おめでとうございます。これからも周りの人々と分かち合う活動を実践し、さらに発展していられることをお祈りします。名古屋ネットの販売者のみなさんも頑張ってください。ファイティング！

水原駅 **ジョンボムハク**

ビッグイシュー名古屋ネット5周年、誠にありがとうございます。これからも頑張ってください。ファイティング！

江南駅 11番出口 **林ジョンフン**

5周年おめでとうございます。ビッグイシューはホームレスを支援する特別な雑誌だと思います。イギリスのビッグイシューのように、他の雑誌に負けずにずっと成長できるよう願っています。

サダン駅 5番出口 **ユン・ビョンイル**

名古屋ネット5周年おめでとうございます。これからもより発展した姿で、一層頑張ってください。

Hongik 大学正門前 **ユ・ヨンゲン**

# ットへの応援メッセージ

## ビッグイシュー코리아販売者の皆さん

5周年をおめでとうございます。名古屋ネット販売者のみなさん、寒い中おつかれさまです。

西江大学前 朴ヨンギル

ビッグイシュー名古屋ネット5周年おめでとうございます。引き続き発展することをお祈りします。

Hongik 大学駅9番出口 ソン・ギヨン

ビッグイシュー名古屋ネット5周年、おめでとうございます。忍耐の末に幸せが訪れてきます。

サタン駅3番出口 林グァンジン

ビッグイシュー名古屋ネット販売者のみなさん、頑張ってください。いつも健康で、自立できるように一生懸命に販売してください。ファイティングです！

ビッグイシュー名古屋ネットの販売者のみなさん！

おつかれさまです。2012年も頑張ってください。全ての願いが叶いますように。ビッグイシュー코리아！ビッグイシュー名古屋ネットファイティング！

高速ターミナル前 オ・ヒョンソク

こんにちは。韓国の販売者、朴ジョンファンです。書面にてですがご挨拶申し上げることができ、嬉しいです。日本は大変な災害により大きな被害を受けながらも、販売者のみなさんが頑張って販売活動に励んでいるという話を聞きました。厳しい時期かと思いますが、必ず乗り越えて、良い実りが得られることを切に願っています。

ヨクサム駅 朴ジョンファン

ビッグイシュー名古屋ネットの5周年おめでとうございます。日本でも私たちと同じ状況にいる多くの仲間に、自立の手助けができたことを嬉しく思います。最初の一歩は簡単ではありませんが、ビッグイシュー販売を通じて、多くの方の暮らしがよりよくなることを願っています。ビッグイシュー名古屋ネットの一層のご発展をお祈りします。

コンドク駅前 グォン・ヨンジン

ビッグイシュー名古屋ネットの5周年をおめでとうございます。希望をなくさずに、希望を抱きしめて頑張って生きてください。

汝矣島 チョン・グォンモ

こんにちは。みなさん、お元気でしょうか。私たちは、国は違いますが、(ビッグイシューを販売していることで)一つの家族です。5周年誠におめでとうございます。これからも一層頑張ってください。

アナム駅前 林ジンヒ

# ビッグイシューとわたしの

ビッグイシューとわたしのあいだには浅くて近い川がある  
名古屋のなかまに会いたくてエンヤコラ明日も船をこぐ  
ローエンドロー (row and row)  
ローエンドロー (row and row)  
おぼれるな ロー (row)

――戯れうた 2012

ビッグイシュー（以下 B.I）を知ったのは創刊時で、ああいう全国区の雑誌は東京でしか売っていないと念願の現物を手にできたのは現在 25 才の娘が成人式ごろだったか。

どうしても登場するのがワケありの私の事情だ。ゆえあって、子連れ狼の私は故郷を捨てた。まだアラフォー前期、見た目も崩れ切っていなかったしパワーもあった。そう、新規まき直しである。

みなさんにとって、ドン底とは飢えや寒さや病気や家のないことかも知れない。私は、牛乳ビンの底をつき破り、辛くも大脱出をとげ一か八かに賭けた、ど貧困世帯をしょった鉄砲玉で、娘は私の右腕のようにガマン強く育った。というか、のちにガマンが過ぎて虫歯が進行した激痛で眠れず、そのまま神経を殺した（神経が消滅した結果、歯痛も消滅）武勇伝の持ち主である。

話を元に戻す。地をほうよな、前へ前へウォークと起死回々生々の時をすっとなで今の清貧ぐらしがある。先は見えないが、今日は生きている。明日も生きるだろう。その程度の身の丈の毎日だ。

東京で B.I を手に、初めて発見した新大陸のように 1 冊を自慢げに私に渡した娘は、その 2 年前の創刊のことを話した私の意見は無視し、「イギリスってすごいな」と悦に入り私が喜ぶのを知っていたと思う。

あれから数年、私は姿かたちはすっかり崩れたものの、出身地の貧困弱者を自ら励ます詩や人の苦しみ悲しみ、鎮魂歌のようなものばかり毎日書くようになった。

私が私であることは、自分の中のもろさや弱さ生きづらさを表明し過去を現在にプラスに生かすことでもある。貧困や病気や暴力、放浪や救援という、人生のテーマはゆずれないし何ともならないことを何とかしようとして、今もさらに大きな SOS のフラッグをふり、豚のように愛らしく残飯をあさる、ジャンヌダルクやカラミティ・ジェーンが理想なのだ。

私の妄想はともかく、B.I のなかまに直接会えるキッカケとなった 2009CBTF アート展初出品（詩人デビュー）in 桑名での、最初で最後と私自身の命と叫びをぶちまけたあの時の勢いは鮮烈だ。作品会場では、90 才ぐらいの杖をついた老人が表題作「野垂れ死ぬな」の前で長いこと立ち尽くした挙句（スタッフは、寝てるのか！？と感じたそう）、「わしゃあ、生きる！」と言って急にスタコラ帰っていったとか……。そのセリフこそ、

# あいだには浅くて近い川がある

今井くるみ

私が待っていたフレーズだ。もう何も言うことはないともセビ泣くおもいだったが同時に、私の心の支えである B.I を会場で紹介したことで名古屋ネットのラブ・寛さんと知り合えた。まさやんを心配して詩をたくさん書き、眠れなかった夜。ビッグ佐藤さんに会って、昔の私に思わず戻りそうになった去年は、トヨトミ藤吉郎にも会い癒された日。ぬくもる思い出、とくにこの2年間は B.I のことを考えぬ日はないくらい私の近くにあって、離れがたく思う。

あ、それと佐野代表とは来世で結婚しましょうとプロポーズをしたが返事は頂いていない。なにせ、今生は私がいないと倒れる相方セバスチャン・なめ郎という共白髪のスディがおり人生は1回ポッキリなので、私もつらいところだ。

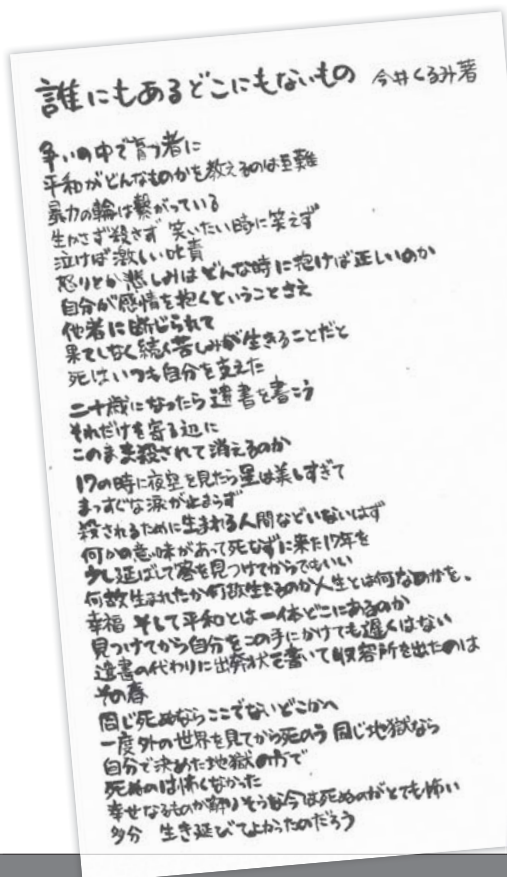
そうだ、悔いなくいこう。死ぬ前に、まずちょっとそこまで生きてみよう。そういう私に直球のメッセージがビシバシ入ってくる、B.I & ナゴヤピープルは、第2の故郷になっている。

生きてる限り、死ぬことはあるけれど何かの意味があるとしたら？さあ、どうする私！という気合いで日々、くらししている。

出会いのキッカケとなったデビュー作？を披露して共に闘う決意。誰と？って、自分との闘いに決まっている。あとはなかまと世界を覆い尽くす巨大な暴力に向かって闘いつづけるだけ、我が友 B.I よ！！

## 野垂れ死・ぬな (今井くるみ著)

とことん  
野垂れ  
野垂打ち回れ  
でも  
死ぬな



# 「好きだよ、THE BIG ISSUE JAPAN」

福田 実佐枝

私が THE BIG ISSUE JAPAN の佐野さんに初めてお会いしたとき、彼は「勝なくてもいい。だけど、決して負けない」と、力強く話してくれた。私はその言葉がとても印象に残った。

彼らは路上でこの雑誌を販売している。今は1冊300円で販売し、内160円が販売者の収入になる。160円を稼ぐためには一冊を、1600円を稼ぐためには10冊を販売しなければならない。これは簡単なことのようにとても難しい。なにしろ路上販売は天気の影響も、季節の温度にも左右されるのだから。

路上という店は、暖を取るために入るコンビニのような気軽さは望めない。寒さで足早に通り過ぎていく人を眺めながら、寒さと戦い、夏にはうだるような蒸し暑さとも戦わなければならない。そして彼らはビッグイシューを販売することで、路上生活者だとカミングアウトしていることになる。好奇心視線を向ける人もいる。世の中は善人ばかりではないから。

実際に本誌の読者投稿記事で、「ホームレスが売っていることで、買うのに勇気が必要でした」とか、「気になっていたけど、いままで買えませんでした」という内容の記事を読んだりする。でも不思議なのは、異口同音に「読んでみたら面白かった」「ほかの方に勧めます」「ホームレスのイメージが変わった」などのことが書かれていたりする。そのあたりがとても興味深い。私は、「もしこの雑誌が書店やコンビニで販売されたら、これほどの魅力を発揮できただろうか？」とも思うのだ。「この雑誌の魅力の半分は、販売者とのやり取りではないだろうか？」と。

彼らの仕事は雑誌の販売だけではない。路上生活者に対する偏見を、まじめに働くことで返上するという行為だ。そして大手のマスコミが取り上げないような、世界から選りすぐられた情報を、1冊の本を通して世界の片隅で伝えていく。後押しをする編集部への責任は重い。毎号組まれる特集を検討し取材し、少しでも読みやすい紙面を作るために、日夜努力をしているのだろう。その努力はこの本のそこかしこから伝わってくる。

「勝たなくてもいい。でも、決して負けない」・・・日本での販売に向けて、採算が合わないからとの大反対を押し切って出版されたこのストリートペーパーが、いまでも販売されているのは、負けてない証拠だろう。ねえ、佐野さん？



ビッグイシュー  
名古屋ネット  
5年の歩み

2006年2月→2012年3月

2003年

大阪で「ビッグイシュー日本版」は、2003年9月に創刊されました。イギリスで始まったホームレスの自立支援のための雑誌「ビッグイシュー」に感銘を受けた水越洋子さん（現：ビッグイシュー日本版編集長）、佐野未来さん、佐野章二さん（現：ビッグイシュー日本代表）の3名が中心となり、日本版独自の編集記事とINSP（国際ストリートペーパーネットワーク）の記事を翻訳した記事を編集して発行されています。

創刊当時は「社会的企業」という言葉もなじみが薄く、何よりも『ホームレスが路上で雑誌を販売する』という今までの日本では考えられなかったスタイルの雑誌とその販売方法に理解を得づらかったこともありましたが、釜ヶ崎支援機構など、ホームレス支援団体などの協力も得ながらスタート。12月には東京でも販売を開始。

2004年

秋にこれまで毎月1回の発行であったビッグイシュー日本版の発行は月2回となる。

2006年

2005年の末、地元名古屋で夜回り等のホームレス支援をしていた数名の有志が中心となり、ビッグイシュー販売開始の賛同者と販売希望者を募ったのが活動のはじまりでした。

2月

大阪事務所へ立ち上げ打診

2月3日

名古屋のビッグイシュー販売説明会



NPOセンターの一室での説明会。のちに販売者が当時のことを心細い気持ちで向かったが、入り口でのぼりを持って立っていた支援者が笑顔で迎えてくれたと話していました。

2月

ブログ開設

2月15日

バンブ・オブ・チキン

コンサートでの試験販売

試験販売は大成功をおさめ、販売に向け自信と手応えを感じました。



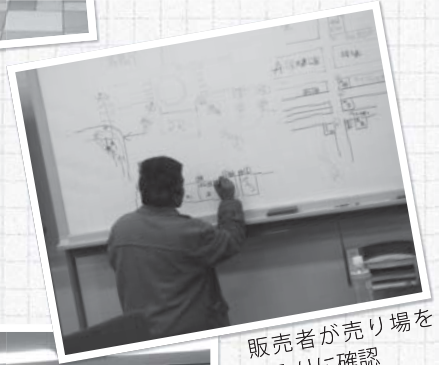


3月13日  
販売準備会議

市場調査（売り場）の報告等を中心とした具体的な販売開始に向けた打ち合わせを開催（日本福祉大学）



佐野代表自らが名古屋駅前に立ち、感触を確認



販売者が売り場を念入りに確認



3月26日  
大阪にて視察と交流



ビッグイシュー日本の事務所にて入念な打ち合わせ



現役の販売者さんの売るスタイルやPOP等を取材

4月3日  
販売準備会議

いよいよ本番に向けて販売者および販売開始日の確定

名古屋市役所にてプレリリース

名古屋市役所担当新聞放送各社の記者が駆けつけてくれました



4月15日  
名駅にて販売開始

5月  
ワンコインサポーター  
募集開始

5月  
念願の事務所開設



7月15日  
サマーセミナー【講演参加】

7月  
栄販売開始

発行当初は1冊200円（うち110円が販売者の収入）であった雑誌を2007年には1冊300円（うち160円が販売者の収入）とし、販売者の収入アップにつなげています。現在では札幌、仙台、千葉、神奈川、さいたま、名古屋、金沢、京都、兵庫、広島、福岡、鹿児島等の各都市でも販売開始。

2007年

2月  
第10回サタデープログラム  
【出張販売】



3月  
伏見販売開始

4月  
名駅前販売開始

4月14日

# 1周年記念集会

自立型福祉の可能性を探ると  
いうテーマで  
日本福祉大学  
北館8階にて開催



4月

## 現在のシンボル ロゴマーク完成

NPO法人「ビッグイシュー基金」が設立され、販売者の生活や文化・スポーツ活動、再就職のサポートも本格的に開始されました。健康相談や就職活動の支援を実施するほか、『ホームレス・ワールドカップ』への出場を目指すサッカーチーム「野武士ジャパン」や、コンテンポラリー・ダンスのプロジェクト「ソケリッサ!」、バンド「大阪ホームレスビッグバンド」など、販売者の自主的なサークルやクラブ活動のサポートもしています。

6月

第11回

## サタデープログラム

【出張販売】



6月  
本紙「今月の人」に  
河合さん掲載



9月  
本紙「今月の人」に  
木下さん掲載

2008年

4月13日

## 2周年記念大交流会

名古屋ネット立ち上げ2年目の記念集会。野宿者問題や名古屋ネットの現状報告、販売者によるトークショー、ビデオ上映、ビッグイシューの販売。

《ゲスト》コミュニティ・ユース・バンク momo 代表理事 / 木村真樹氏、ビッグイシュー日本代表 / 佐野章二氏



5月27日

## Love& ビンボー春祭り

【出張販売】

5月

## レジャック前販売開始

7月12,13,20,21日

## DAYS JAPAN 写真展

【出張販売】

7月20日

## 日本福祉大学夏期大学院

### 公開ゼミナール

学生、市民向けの公開ゼミナール

講師：全泓奎 ゲストスピーカーとして

販売者2名が参加

9月23日

## 反貧困キャンペーン愛知

### フェスタ【出張販売】

11月

## ボランティア募集月間

2009年

2月21日

## 第14回サタデープログラム

【出張販売と講演参加 / 講師：全泓奎】

1月19～28日

## ビッグイシュー日本フェア

ミッドランドスクエア内アイデアフレームス（雑貨店）の展示スペースにて全国のビッグイシュー販売者のポートレート写真（高松英昭氏撮影）を展示。名古屋ネットの活動紹介、来場者へのアンケート、ビッグイシュー海外版の展示



4月25日

## 3周年記念大交流会

3年目の記念集会。2008年度の報告。  
雑誌の販売《ゲスト》OHBBライブ



## 6月27日 第15回サタデープログラム

【出張販売】

7月26日

## 蟹江町イベント

“ビッグイシューの紹介とホームレス問題について”

講師：森喜代美

7月20日

## サマーセミナー

【ビッグイシュー名古屋ネットの紹介】

講師：古澤礼太、元販売員橋本

## 7月25・26日 大阪研修

大阪事務所ミーティング参加  
販売場所と釜ヶ崎見学

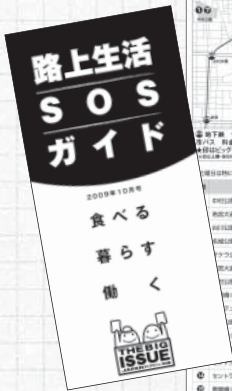


8月22日  
**藤井克彦氏講演**  
 “偏見から共生へ”

2009年には「路上脱出ガイド」という冊子を作成し、大阪市内で配布する活動も開始しました。これはリーマン・ショックなどの影響で路上生活をせざるを得なくなった人などのために、どこに行けば助けを得られるかという情報を簡単にまとめた冊子で、市内の炊き出しの場所や相談機関の連絡先等をまとめたものです。その後「路上脱出ガイド」は東京をはじめ、札幌、京都、福岡、名古屋でも各地域版が各地のビッグイシューのサポートをするボランティア団体などによって作られ配布されています。



9月30日  
**奥田知志氏講演**  
 “絆が人を生かすからー  
 ホームレス支援から  
 見た二つの貧困”



名古屋市内炊き出し場所

場所	住所	備考	営業時間	主催団体
1 徳川堂	名古屋市中区	朝7時～	朝7時～12時	徳川堂
2 徳川堂	名古屋市中区	朝7時～	朝7時～12時	徳川堂
3 徳川堂	名古屋市中区	朝7時～	朝7時～12時	徳川堂
4 徳川堂	名古屋市中区	朝7時～	朝7時～12時	徳川堂
5 徳川堂	名古屋市中区	朝7時～	朝7時～12時	徳川堂
6 徳川堂	名古屋市中区	朝7時～	朝7時～12時	徳川堂
7 徳川堂	名古屋市中区	朝7時～	朝7時～12時	徳川堂
8 徳川堂	名古屋市中区	朝7時～	朝7時～12時	徳川堂
9 徳川堂	名古屋市中区	朝7時～	朝7時～12時	徳川堂
10 徳川堂	名古屋市中区	朝7時～	朝7時～12時	徳川堂
11 徳川堂	名古屋市中区	朝7時～	朝7時～12時	徳川堂
12 徳川堂	名古屋市中区	朝7時～	朝7時～12時	徳川堂
13 徳川堂	名古屋市中区	朝7時～	朝7時～12時	徳川堂
14 徳川堂	名古屋市中区	朝7時～	朝7時～12時	徳川堂
15 徳川堂	名古屋市中区	朝7時～	朝7時～12時	徳川堂
16 徳川堂	名古屋市中区	朝7時～	朝7時～12時	徳川堂
17 徳川堂	名古屋市中区	朝7時～	朝7時～12時	徳川堂
18 徳川堂	名古屋市中区	朝7時～	朝7時～12時	徳川堂
19 徳川堂	名古屋市中区	朝7時～	朝7時～12時	徳川堂
20 徳川堂	名古屋市中区	朝7時～	朝7時～12時	徳川堂

9月  
**路上生活 SOS ガイド**  
 (名古屋版) 作成

10月15日  
**販売者募集ゲートボール場  
 炊き出しにてビラ配り**

販売者募集ビラ、SOSガイドを配布。  
 結果：問合せ2件/面談1件/  
 販売者登録なし

11月14日  
消費生活コンサルタント協会勉強会

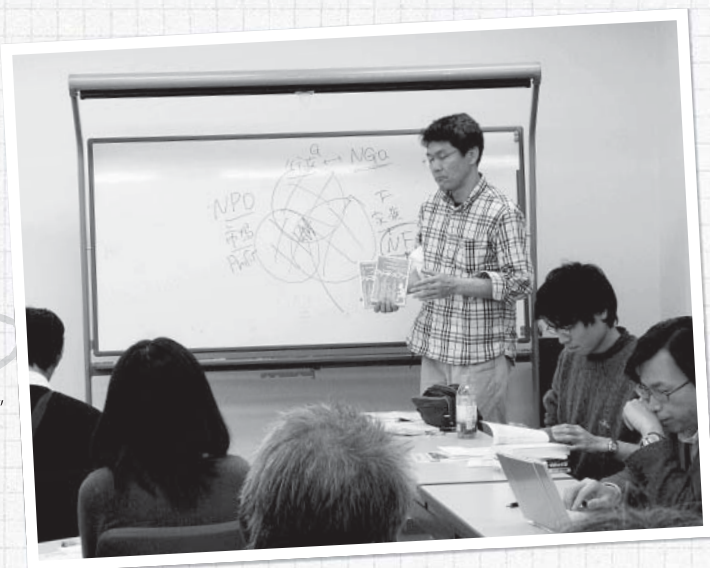
ビッグイシューとビッグイシュー名古屋ネットの紹介/  
講師：石黒好美 販売員2名

11月21日  
全国ビッグイシュー  
サポーターズ会議

11月20日  
大阪ホームレス会議

12月12日  
生田武志氏講演

“ホームレスとhomelessを考える”



2010年

2月11日  
LOHASLoveLOBAS

参加型アトラクション「起業転結ゲーム」  
に出展



2月13日  
ありむら潜氏講演

“漫画『カマヤん』の作品を通して作者が語る、  
日雇い仕事の今昔”

2月11日～14日  
三重合同アート展

三重県を中心とした古典、現代、美術、芸術、  
音楽、建築・・・の合同展でサンプルやピラ  
を展示

2月  
金山販売開始

2月20日  
第16回サタデープログラム

【出張販売】



5月1・2日  
アースデイ愛知 2010【出張販売】

5月  
三菱重工 CSR 活動で定期購読開始

5月  
販売者 1 名アパート入居



6月20日  
現事務所に移転

6月6日  
ビッグイシューの挑戦販売開始

5月26日  
第17回サタデープログラム

湯浅誠氏講座へ参加と出張販売



7月  
販売者 2 名アパート入居



7月19日  
サマーセミナー

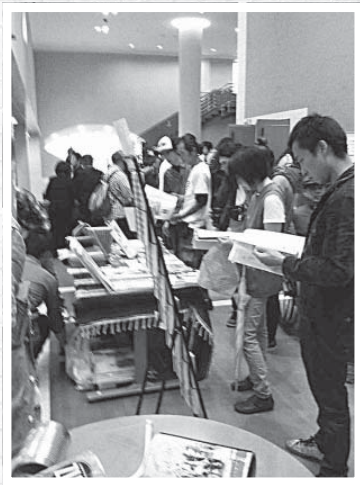
“ビッグイシュー名古屋ネットの紹介”  
講師：森喜代美、販売員木下

10月3日  
障害のある人もない人も風に吹かれて  
交流ひろば【出張販売】

10月11日  
ツイッター開始

10月  
販売者 1 名アパート入居





10月9日  
スタッフベンダビリリ  
ライブ【出張販売】

11月9日  
トータス松本 ライブ【街頭販売】

11月21日  
kip—きっぷ for all children(in 南山大学)  
【出張販売】

11月  
新規販売者販売開始



12月10日  
路上のうた  
ホームレス川柳発売

12月12日  
人権パレード参加

2011年



1月  
販売者主催の月に一度の交流会  
「誠の会」スタート

2月6日  
講演

“アジアのスラム住民と日本のホームレス生活者  
名古屋でのビッグイシュー活動の背景”  
講師：穂坂光彦

2月11日  
ソウルフラワーモノノケサミット  
ライブ【街頭販売】

2月19日  
第18回サタデープログラム  
【出張販売】

2月20日  
DAYS JAPAN 読者会  
【活動紹介】



3月13日  
反貧困フェスタ in あいち  
【分科会発表と出張販売】

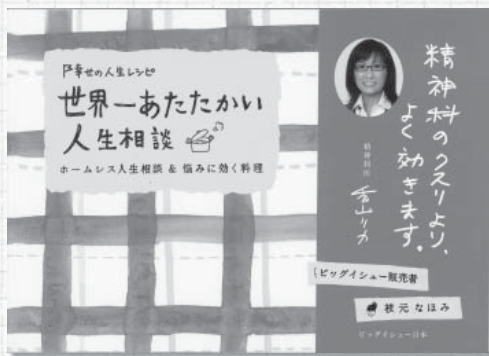
3月11日  
反貧困社会連帯（韓国）来名  
【ビッグイシュー名古屋ネット事務所見学】

5月7日  
第42回全国臨時教職員問題学習交流会 in あいち  
プレ集会 雨宮処凛講演会【出張販売】

5月7日  
茂木健一郎 講演【街頭販売】

5月7日  
細野晴臣 ライブ【出張販売】

6月4日  
ホームレス支援全国ネットワーク  
総会出席



6月20日  
世界一あたたかい人生相談—  
幸せの人生レシピ 発売開始

7月8日  
映画「ミツバチの羽音と地球の回転」  
自主上映会  
(武豊町ゆめたろうプラザ)【出張販売】

7月15日~18日  
DAYS JAPAN 写真展【出張販売】

7月  
販売者1名アパート入居

8月10日  
全国臨時教職員問題臨時集会【出張販売】

8月28日  
田中優講演「原発のない世界はつくれる」  
【出張販売】

6月25日  
第19回サタデープログラム  
【出張販売】



10月7日  
名古屋YWCA 秋のバザー【出張販売】

10月9日  
トヨタロックフェスティバル【出張販売】

10月27日  
マラライ・ジョヤ氏  
【アフガニスタン人権活動家 講演出張販売】

10月29日  
雨宮処凛講演会 in 豊橋【出張販売】

10月22日

# 5周年記念イベント



11月26日  
**田中優講演会**【出張販売】

11月27日  
**徳林寺秋祭り**【出張販売】

12月8日  
**エアロスミスライブ**【街頭販売】

## 2012年

1月12日  
**反貧困学習会**  
【活動紹介／紹介者：川上愛葉】

2月18日  
**第20回サタデープログラム**  
【出張販売】

2月18日  
**勝川大弘法通商店街弘法市**  
【出張販売】

2月  
**facebook 開始**

3月10日  
**いのちの集会**  
【脱原発イベント出張販売】

3月11日  
**明日につなげる集会**  
【脱原発イベント出張販売】

3月11日  
**tunagari フェスティバル in 岐阜金公園**【出張販売】

3月17日  
**勝川大弘法通商店街 弘法市**【出張販売】



# 社会的排除に抗しうる「自立型

## ビッグイシュー名古屋ネットを中心として

### 1

#### はじめに

産業再編や、資本のグローバルな展開に伴う労働市場のフレキシビリティとは裏腹に逼迫した財政の下、行政サービスの縮減が進められ、従来の社会ではうまく統合されていた人々の主流社会への参加が遮られてきている。それに伴い、貧困化に結びつき易い脆弱な社会環境が増え、それを最も象徴的に物語る表現として「格差」と「社会的排除」が世間の注目を集めている。その中でも極限的な排除の表象としてホームレス問題が注目される。日本では、1990年代以降長引く経済不況の中、ホームレスの人々が増え続け、それがいまや大都市のある特定地域に限られた問題ではなく、全国的な問題となっている。

社会的排除アプローチに立脚してホームレス問題を考えると、既存の貧困パラダイムや、それに関する政策、戦略の有効性に対する再評価が求められる。これまで国家による伝統的な福祉サービスの割当では、施設での収容や自立の強調、そして臨時的で緊急保護的なサービスの供給が強調されてきたが、いまやその機能と有効性は疑問視されることとなった。それだけではなく、本来社会的統合を促すはずの社会的制度そのものの機能不全による社会的排除の問題が、ますます社会的な緊張感を高める大きな原因となっている。

このような限界により、欧米ではホームレス問題に対する直接的なサービスの供給から国家は撤退し、それに代わり国家の政策方針として後方支援的（enabling policy）かつコーディネータ的な役割にシフトしてきたのである（Edgar, et. al, 2000）。一方で国家の役割変化と並行する福祉サービスのオルタナティブなプロバイダーとして、「社会的企業」が様々な領域で活動を広げており、社会問題に対しては既存のプロバイド・アプローチにとって代わる、より包括的で多次的なアプローチを試みている。なかんずく極限的な社会的排除状態と言われるホームレス問題に対応し、その当事者が自立に向けて「ビジネス」の手法<sup>1</sup>を用いて販売を行う雑誌「ビッグイシュー」（以下、BI）は、市民やマスコミからも熱い関心を集めている。1991年にイギリスで創刊された同雑誌は、いまや世界24ヶ国の50の都市・地域に広がっている。日本では2003年9月に「ビッグイシュー日本版」が刊行され、現在全国的に展開されつつある。

本稿では、行政サービスだけに頼らず、「ビジネス」という新しいツールを取り入れながら排除問題に抗していく新たなシステムとしてこの活動に注目する。とりわけ名古屋でその活動を行っている団体（「ビッグイシュー名古屋ネット」）を取り上げ「自立型の福祉社会システム」としてのその可能性を検討してみたい。筆者は、ビッグイシュー名古屋ネットの創立当初より同団体の支援ボランティアとしてかかわりながら参与観察による研究・調査を続けている。本稿は、ビッグイシュー名古屋ネットの活動に関連してこれまでの参与観察から得たデータ<sup>2</sup>等に基づき、既存のプロバイド型のホームレス支援とは異なる、自立型の福祉社会システムとしての同団体の活動内容を検討し、さらに今後の課題と展望を模索することを目的とする。

### 2

#### 社会的排除アプローチからみたホームレス問題

##### 1) ホームレス状態と社会的排除

先述のとおり日本では90年代に入りホームレス問題が社会的な注目を集めることとなった。つまり、これまでの特定地域に限られた問題としてではなく、大都市や地方都市でさえも散見される「社会的」現象として、ホームレス問題が新たに「社会化」されたのである。ところで、ホームレス問題の社会化に当

# の福祉社会システム」の可能性

ジョンホンギョ  
全泓奎  
『ホームレスと社会』(vol.2)、明石書店、2010、p.64-71. 所収

たつては、われわれの認識の狭さを指摘せざるを得ない。国や地域によって文脈の違いはあるものの、ホームレス問題の根底には、社会的ニーズに対応する「はず」の社会的な制度の機能不全によって貧困や剥奪状態に陥り、正常の社会参加が困難になったことによってもたらされた問題が潜んでいる。言い換えるとホームレス問題とは、単なる路上で生活する人々による問題でもなく、かつ所得の欠乏や個人の甲斐性による問題でもない、不健康、不教育、長期失業、居住の不安定性、市場への不参加、政治や市民的権利に関する諸々の「機能」と「自由」の欠乏が複雑に絡み合う中でもたらされる問題なのである。したがってホームレス状態を日本で定義<sup>注3</sup>されているように路上にいる人々だけに固定しようとする視点はあまりにも狭すぎる。

欧米の例を参考にすると、ヨーロッパ規模の NGO である「ホームレスと共に活動する各国組織のヨーロッパ連合体 (FEANTSA)」は、「ホームレス状態」に対する下記のような定義を提案しており、それは EU 加盟諸国において支援 NGO と行政による問題把握に大きな影響を与えているものと考えられる (中村他、2004)。FEANTSA の定義によると、「ホームレス状態」とは、①野宿状態 (rooflessness)、②家のない状態 (houselessness)、③不適切で不安定な居住状態 (insecure and inadequate housing)、④不安定な居住状態 (insecure housing)、⑤不適切な居住状態 (inadequate housing) など五つの状態を含んだ広義の概念 (Edgar et al., 2003 : 4 - 7) となっており、日本のそれとは雲泥の差があることが見て取れる。

言い換えると、ヨーロッパの場合は、単なる路上生活を言うのみならず、「住まいの貧困 (poor housing)」と「居住の不安定 (insecure and/or inadequate housing)」という両方の側面からの状態を言うものと考えられる。

ここで言う「住まいの貧困」、あるいは「居住の不安定」を社会的排除の文脈に即して理解すると、「関係的な概念」としての「ホームレス状態」を言うこととなる。つまり、これは、ホームレス状態をその「結果」だけではなく、それをもたらす様々なプロセスやメカニズムから理解すべく提案された概念と考えられる。

## 2) 格差 (貧困) から貧困化のプロセスへ

以上のようにホームレス問題は、直接的な差別の他にも制度 (社会システム) の機能不全によってもたらされ、それが貧困を強化し、かつ持続させる貧困化のプロセスに結びついている。したがって、ホームレスの人々の多くが経験しているように、長期にわたる日雇いや住み込み等による不安定性の持続や、それを支えるべき制度の機能不全が生活の「脆弱性」(vulnerability) の悪化をもたらし、ひいてはその人々の社会統合の崩壊を生み出しているのが現状である。

注1: ビジネスが現在世界の中心舞台で優位を占めることに異議を申し立てる人はいないと思う。それは多くの政府よりもより早く最も創造的で融通が利き、効果的で、そしてより豊かである。・・・(中略)・・・社会においてビジネスよりも最も強い制度は存在しないのである。多くの政府の経済政策は、社会の周辺に追いやられている社会的弱者へのケアなど興味がない。政府が興味を持っていないなら、(より豊かで、強力で、そして独創的な) ビジネスが責任を取るべきであると信じている (Swihinbank, 2001)。

注2: 販売者および支援ボランティアへのインタビュー、同団体発行の各種資料・刊行物等 (講演資料・通信・事務関係資料等) を参考にした。

注3: 「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法 (平成 14 年法律第 105 号)」第 1 章第 2 条 (定義) では、「この法律において「ホームレス」とは、都市公園、河川、道路、駅舎その他の施設を故なく起居の場所とし、日常生活を営んでいる者をいう」と規定している。

名古屋でBIの販売に当たっているT氏は、若い頃長い間警備の仕事につきながらマンション暮らしの生活を送ってきた。しかし、次第に仕事が減少していくにつれ、足の障がいもあって心理的にも落ち込み、家賃を払う余裕もなくなってしまった。その後マンションを退去し、職安での仕事探しに臨んだがそれもうまく行かず、笹島で日雇いの職探しを始めた。そのような生活が続いた結果、野宿せざるを得なくなった。それからは目と足の障がいを抱えながら公園で過ごし、生活の糧としてカン拾いを始めた。

上記の名古屋市内で野宿しながら現役BI販売員を勤めているT氏の例からも分かるように、働きながらその賃金で家賃を払い、マンション暮らしの生活をしてきた人が野宿を余儀なくされるまでのどこかで、その負のプロセスを断ち切るような社会のシステムはありえなかったのであろうか。彼は今BI販売を続けながら社会との関係性を取り戻し、社会復帰を目指している。

以上のように、新しい貧困問題とは、結果としての貧困、即ち「格差」の存在だけでは語り切れない部分がありにも多い。したがって、「プロセスとしての貧困(poverty as process)」をもとに「社会的排除」の過程を同定し、結果だけではなく、それを持続し・強化させるメカニズムを是正し得る対策や社会的実践モデルを模索していくことが肝要である。そこにこそ包摂的な社会(inclusive society)の構築に繋がる鍵がある。

### 3 社会的排除に抗しうる「自立型の福祉社会システム」の可能性

#### 1) 貧困と排除問題に向けた「自立型の福祉社会システム」のモデル

既存の貧困関連対策では対応しきれない新しい貧困問題、即ち社会的排除に対する戦略としてはどのようなものが考えられるだろうか。本稿では試論として下記のような二つの戦略を考えてみることにしたい。

まず、第一に「制度を充実化・拡大させるアクション戦略」である。それは人間らしく生きるための基本的な生存権を守っていく活動であり、なかんずく当事者による問題の認知と解決に向かう行動を要する。幸いに近年「格差社会」による不平等の拡大に警鐘を鳴らす、貧困者(持たざる者)の連帯行動および社会的発信が増えてきている(去年暮れから各地で始まった「派遣村」など)。当事者の生存権や權益を守っていくための活動が広がることは、社会全体のセーフティーネットの再構築に対する認識が広まっていくことを意味し、それぞれ制度の充実化に向けた第一歩となるであろう。

第二に「新たな社会システムの創出戦略」である。これは問題の解決をただ待ち続けるのではなく、自らが開発のエージェントとなって社会の変化に向かって新たな社会システムを創り出していくことをいう。例えば行政や市場が対応し難い社会問題に対し、一方では行政の機能を先取りし、他方では「ビジネス」のように、今まで注目されなかった新しいツールを活動に取り入れながら新たな公共性を創出するような活動領域である。とりわけ社会問題に取り組む社会的企業として注目されている活動領域がそれに当たる。

一般的にそれには二つの動きがあるのが知られており、「ビジネスの社会化(=企業の社会還元、CSR)」という領域と、ビジネス戦略を用いて社会問題の解決にチャレンジする「NPOのビジネス化(=自立型の福祉社会システム)」という部門が代表的である(斎藤、2004)。

#### 2) ホームレスの人々の社会的企業「ビッグイシュー日本」

ここでは上記の「新たな社会システムの創出戦略」の例として「ビッグイシュー日本」の活動を取り上げる。冒頭で述べたようにBIは、イギリス発のホームレスの人々を対象とした社会的企業として始められた雑誌である。これは、チャリティ的な活動や救護ではなく、もはや「大きな社会の問題」になっているホー

ムレス問題に対応する手段として「雑誌を出版する」ことを通じ、ビジネスという新たな戦略を打ち出したことに意味がある<sup>注4</sup>。BIを始め、ストリートペーパーといわれるソーシャル・ビジネスは現在全世界で展開中であり、その国際的なネットワークも設立され、情報の交換など様々な活動が行われている<sup>注5</sup>。

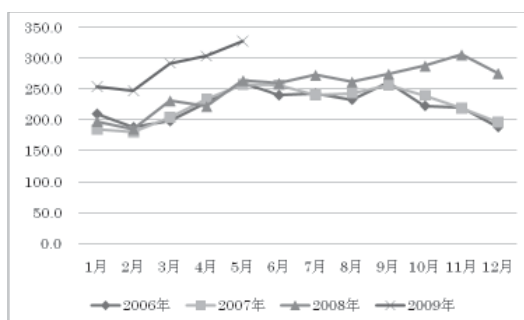
日本では2003年9月に『ビッグイシュー日本版』として刊行され、現在全国的に展開中である。「ビッグイシュー日本」は、2009年8月15日現在125号を発行しており、全国的に販売員数だけで145名に達している（登録者数は962名、2009年6月末現在）。そして『ビッグイシュー』の述べ販売冊数は335万冊（2009年7月末現在）で、これまでの販売員の収入は4億1,968万円（2009年7月末現在）にも上った。なおBIを足がかりにして就職先を見つけ、脱野宿と社会復帰を果たした人も89名に上っている<sup>注6</sup>。

現在全国での販売は、各地域でBIの販売を支援している団体（販売委託団体）によって行われている。各地の販売委託団体の性格もまちまちで、個人で販売支援の事務所を運営している場合（「京都・ビッグイシュー販売応援団」）や、特定非営利活動法人でBI支援を既存の活動に加えて行っている場合（横浜「特定非営利活動法人・さなぎ達」、川崎「川崎水曜パトロールの会」、大阪「釜ヶ崎支援機構」、広島「広島路上生活者支援機構」等）、その他これまで夜回り活動などホームレスの人権を守る活動を行ってきた支援団体と一般のボランティア、そしてホームレス当事者（販売員）の合同によって運営されている場合（名古屋「ビッグイシュー名古屋ネット」）などがある。

販売支援活動の意義については、多くの団体が社会的な関係の（再）構築を第一として挙げている。それはBIの持つもう一つの意味として、販売を通じた収入獲得だけではなく、長く野宿生活の中で社会から孤立し疎外されてきた人々が、社会との接点を築く上で大きな役割を果たしている様子がうかがえる。特に高齢などで生活保護を受けながら販売に当たる「半福祉・半就労」のような形での販売対応は、生活保護により畳の上の上った人々の再脱落を防ぐ上でも大きな意義があるのではと思われる。その他、積極的な販売及び収入獲得活動を行い、かつ団体としても運営資金を獲得していくための様々な工夫がされており、販売委託団体が独自のバッジやステッカーを製作し、雑誌と共に販売に当たっている場合もある（広島・名古屋）<sup>注7</sup>。

## 4 名古屋市におけるホームレスの現状

本節では、簡単に名古屋市におけるホームレスの現状と関連支援策について取り上げる。下図は、名古屋市内（若宮大通り高速下、「ランの館」北東ゲートボール場）で炊き出し活動を行っているある団体による1回平均炊き出し数の経年的な変化を示している（【図2参照】）。これをみると、多少穏やかに減ってきたのが昨年暮れ頃より微増し始めていることが見て取れる。さらに今年は格段と増えている様相を見せている。



【図2】1回平均炊き出し数<sup>注8</sup>

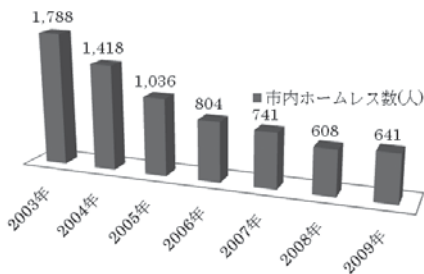
注4：Big Issueとは、多義的な意味を込めて命名された。つまり、事典的な意味としてIssueは、名詞で使う場合は社会の関心を集めている「問題」を意味し、また動詞としては「(出版物・雑誌等を)刊行する・出版する」という意味を持っている。そしてその両方を合わせた新たな形のビジネス戦略として社会問題へ挑戦すること自体が「ビッグイシュー」なのである。

注5：ホームレス問題・社会的排除及び貧困に対応する手段としてストリートペーパーを促進するための地球的なネットワークとして設立された「International Network of Street Papers」は、現在27ヶ国、80ストリートペーパーのネットワークとなっている。詳細は、そのホームページを参照。HYPERLINK "http://www.street-papers.org/" http://www.street-papers.org/

注6：「ビッグイシュー日本」代表の佐野章二氏による（2009年8月）。

注7：以上は、「ビッグイシュー名古屋ネット」の設立1周年を記念し07年4月に行われたイベントで報告された川島章平氏（同会のボランティア）の原稿からの内容をまとめたものである。

注8：笹島診療所・藤井克彦氏よりデータの提供を得た。



【図3】名古屋市内ホームレス数の推移

注：毎年1月時点での数値である（2004年～2006年は6月現在）。2004年の調査では、国、県等が管理する場所の調査は行っていない。

出所：名古屋市（2009）

一方、市の公式統計をみると、市内のホームレス数は2003年以降、毎年減少してきたが、昨今の景気悪化がきっかけとなり、本年1月は前年に比べ33人の微増となっていると報告されている。

このような現状に際し名古屋市では、ホームレス問題の解決に向け、市長を本部長とする「名古屋市ホームレス援護施策推進本部」を設置してその援護に取り組んできた。そして2002年「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」の制定並びに基本方針の策定を受け、2004年7月、2008年度末までを計画期間とする「名古屋市ホームレスの自立の支援等に関する実施計画」を策定し、それまで市独自で実施してきた各種施策を、基本方針が目的とする「自立支援等」に向けた施策として位置付けてきた。

名古屋市ホームレスの自立支援に向けた第1期計画にあたる期間中には、とりわけ「就労による自立」と「福祉等の援護による自立」の2つを計画目標として掲げると共に、その実現に向けた基本的な方針として「住まいの確保」や「雇用の確保」など「7つの主な取り組み」を定めた。そして野宿状態、緊急保護から社会生活への復帰まで、自立の各段階に応じて、緊急一時宿泊所（＝シェルター）や自立支援事業などの様々な事業を、国・県あるいは経済団体等とも連携を図りながら総合的に実施する計画を策定している。その結果、2007年度末までにシェルターおよび自立支援事業を通じて、延べ1,594人が自立を果たしており、市内のホームレス数も最大を記録した2003年1月の1,788人から2009年1月には641人（減少率）と大幅に減少するなど、大きな成果を上げていると報告している（名古屋市、2009年）。

以上と関連して、現在名古屋市における「住居のない人々への主な支援施設・支援事業」を示すと下記のとおりである<sup>注9</sup>。

まず、名古屋市内の生活保護施設としては更生施設として「植田寮」（定員150名、原則1年）、「笹島寮」（定員60名、原則6ヶ月）、そして救護施設としては、「植田寮」（定員170名）と「厚生院」（定員80名、実際は27世帯）がある。その他、宿所提供施設として「熱田荘」（1階～3階のみ、定員45世帯、原則6ヶ月）、医療保護施設の厚生院（定員204名）、聖霊病院（定員300名）がある。これ以外にも民間簡易宿泊所（通称、ドヤ）で生活保護を受けることもできる。

次に、上記の生活保護による施設以外の法外援護施設としては、以下のような施設がある。まず、一時保護所として、上記宿所提供施設と一体となっている「熱田荘」（4階～5階のみ、定員50名、利用期間は2週間以内で、1回限り更新可能）がある。一方、一時保護所が満室状態の時などに代用される施設として「第三松竹梅」もある。09年より相談者が多く他の松竹梅や福星旅館を使う場合もある。ここで言う、福星旅館とは、緊急宿泊施設として名古屋市が指定した民間宿泊施設である。その他自立支援事業を行う施設としては「あつた」（定員92名）と「なかむら」（定員72名、笹島寮の4階（男性）と1階（女性））がある。最後に緊急一時宿泊施設（＝シェルター）として「名城公園宿泊所」（定員200名、原則6ヶ月、最長1年間、04年7月より1回限りの再入所が認められる）がある<sup>注10</sup>。

以上、第1期にあたる過去5年間は、上記のホームレス支援と密接に関係する施設によって支援施策が行われてきた。しかし、最近新たな事態として、08年秋以降の急激な景気の悪化を受け、雇い止めと同時に住まいを失った派遣労働者などが、市の窓口に殺到している状況がある。なお、07年全国実態調査によると、前年に比べ「高齢化の進行」（平均年齢56.5歳→58.8歳）や「野宿期間の長期化」といった



傾向が進展していることが名古屋市の特徴として見てとれた（名古屋市、2009）。これらの問題は、今後第2期を迎える名古屋市のホームレス自立支援事業における新たな課題となっている。

## 5 「自立型の福祉社会システム」としての「ビッグイシュー名古屋ネット」の挑戦と課題

以下では、上記のような施設中心型による行政の対応とは異なり、ビジネスをツールとして支援を行っている名古屋市内の民間団体である「ビッグイシュー名古屋ネット」を中心に、これまでの活動の展開と特徴から「自立型の福祉社会システム」の可能性を探ってみることにしたい。

### 1) ビッグイシュー名古屋ネットの歩み

これまで名古屋市では、夜回りなど様々な団体によるホームレス支援活動が行われてきたが、BI販売を支えるような仕組みは育たなかった。そこで名古屋駅や栄等において夜回り活動等を展開してきた「野宿労働者の人権を守る会」<sup>注11</sup>を中心に、ホームレス自身によるBIの販売を、彼ら・彼女らにとっての選択肢の拡大の一つとして捉え、「ビッグイシュー名古屋ネット」の結成が推進されることとなった。

販売希望者向けの説明会に初まり、約2ヶ月に及び準備期間を経てようやく06年4月15日に販売は開始され、最初は3人で販売が行われることとなった。それから多くのマスコミの報道によって名古屋でのBIの認知度が広がり、現在はビッグイシュー名古屋ネットを支えている多くのボランティアと販売員が協力して運営を行っている。最初は事務所もなく、受渡しの際にはボランティアが毎日順番を決め、販売員の販売場所に雑誌を持って行って受渡しを行うなど、困難な点も多くあったが、今は販売支援に向けた事務所を名古屋駅の近くに確保し、そこを拠点として販売支援に当たっている。これまで多くの学校や団体からの講演要請などに支援スタッフと販売員が共に参加し、BI活動の意義を紹介しながら、より多くの社会からの理解が得られるよう専念してきた。現在「ビッグイシュー名古屋ネット」は、販売員はじめボランティアの受渡しスタッフ、そして同会の財政的な運営を支えている「ワンコインサポーター」によって活動が持続されている。

### 2) 「ビッグイシュー名古屋ネット」の特徴

まだ活動期間は短いもののこれまでの活動内容を分析して見ると以下のような特徴があることが指摘できよう。

第一に「新しい社会参加のモデル」という点である。つまり、ビジネスというアクションを通じ、社会との接点が拡大されているのである。それは販売当事者だけに限るものではなく、支援者や一般市民においても同じである。つまり、市民も販売員から雑誌を購入する行為のみによりホームレス問題に参加することができるという意味である。今までホームレス問題というと、日常生活からは遠い話で気軽に近寄れる問題ではなかったのが、一冊の雑誌の購入によって新たな出会いが生まれ、その人にとっての日常となり、ホームレス問題における関係の質の変容が起こるのである。そのような意味でBIはより多くの社会参加を拡大させる機能を果たしていると考えられる。

注9：名古屋生活保障支援実行委員会が作製・配布している「仕事と住居を失った人のための手引：生活保護申請を中心に」の中で藤井克彦氏（笹島診療所）が作成した内容である。

注10：02年10月開設された「白川公園前宿泊所」（定員150名）は2007年3月に閉鎖となった。

注11：「野宿労働者の人権を守る会」は、名古屋市内で野宿者（ホームレス）の生命・生活を守り、野宿者同士および野宿者・支援者間の交流を深め、ネットワークを作り出すために、主に夜回り活動を中心に炊き出し（協同炊事）・福祉行動などの支援活動を行っているグループである。

ホームレス当事者からも、BIの仕組は非常にわかりやすく、自分の都合に合わせて仕事ができるため「これなら自分でもできる！」という声が上がっており、参加しやすい体系と受け止められていることが見て取れる。あまり難しく考えなくても参加できるのが評判となっている。

最初、販売の決心をした時、本当にお客さんがやってきて買ってくれるか心配だったそうです。なぜならば自分は長く外での生活をしてきたので他の人への警戒心が強く、他人を見ても少し怖い気がするし、ましては自分の顔を見ても何気なく話しかけてみる気持ちにはならないからだと書いていました。しかし、その一方では自分のことについて打ち明けて話したい、人の話も聞きたいという切実な熱望も心の隅にはあったのではないかと語ってくれました。BIに対しては、販売ももちろんですが、この販売を通じてたくさんの人との出会いが生ずることへの期待感も強いように見えました。警備会社だけで30年間勤めてきて、そのフレキシブルな雇用構造の下で人の都合によってこき使われてきたこれまでの職歴についてはうんざりしていたので、この新しい仕事（「ビジネス」）に対する期待感はもちろん、抱負をも持っているように見えました。【元販売員M氏との対話より抜粋（07年3月）】

最初は不安な気持ちで販売していたのですが、お客様と会話などしたり、また時には冗談を言ったりしてなんとか楽しく一日を送ることができています。時々「頑張ってくださいネ」「体に気をつけてネ」など励ましの言葉を頂いて、私もこの言葉に力づけられて、少々困ったことがあってもがんばらなければという気がいたします。【ビッグイシュー名古屋ネット通信8号：現役販売員T氏】

障がいを持った方が介護者と一緒に来てくれて雑誌を買ってくれました。しかし、ご自分の手でお金を払いたいとわざわざ手を差し伸べてくれたのが最も印象に残ります。また親子連れの家族がいましたが小さなお子さんが走ってきて一冊下さいと笑いながら買いに来てくれてとても嬉しかったです【ビッグイシュー名古屋ネット現役販売員T氏による講演会での発言より】。

次に「機会の促進」をあげることができる。これは、BIでの活動が経済機会と収入の拡大（資産構築）に繋がることを指す。その他、BI販売をきっかけに他の仕事に就いた場合や、スタッフの支援により生活保護の受給に至り、「半福祉・半就労」のような形で量の上に上がるなど、様々な面においてホームレスの人々の機会の促進に資したことは特記すべきことである。ホームレスの人々は仕事が嫌で怠けているのでも、甲斐性がないからこのような生活を送っているのでもなく、包み入れる力を失ったこの社会の中心からいやおうなしに押し出されて来た人々である。彼らは、社会の主流の仕事から使い捨てられ、今はセーフティネットという制度からも排除されたまま、その辺境にしか生きる場を求められなくなっている。したがって、問われるべきは、実は彼・彼女らではなく、その人たちを社会の辺境へと追いやった我々の社会の方である。

とは言いながら、彼ら・彼女らは人目につかないところで立派に働いてきた。実際BIの販売員もこの仕事に携わる前までは、一夜をアルミ缶集めで過ごし、明け方にはそれを売るために出かけるような仕事をしてきた。彼ら・彼女らにとって、このBIを通してより正々堂々と白昼に人前での仕事ができるようになったことは、BIの持つもう一つの大きな機能である。販売員は、これを単なる自分への寄付行為ではなく、また適当に立って過ごしたらお金が入るという意識でもなく、自分の仕事として誇らしく思っている。なおかつこれをきっかけにお金を貯め、自分が選んだ自立の道を進めたいと思っている。

私、個人的な考えではありますが BI 販売は私の仕事だと思っています。自分で専業もしたし、また色々な会社にも勤めましたが、私には BI の販売が大好きです。【B I N通信 5 号：H さん】

何よりも自分が「仕事」をやっている、という気持ちがあるからです。・・・もう少し落ち着いてきたらお金を少しずつ貯めて行きたいです。【B I N通信 6 号：Y さん】

ホームレス生活ももう 5 年くらいですが、これでお金を貯めて安いアパートでも借りることを夢見ています。もし物件についての良い情報をお持ちの方は是非ご紹介ください。【B I N通信 13 号：K さん】

### 3) 今後の課題

以上 BI を中心に「自立型の福祉社会システム」としての活動の現状や特徴について考察してみた。これがホームレス状態という極限的な社会的排除問題に抗し得る「新しい社会参加の接点」や、「経済的・社会的な機会の拡大」に大きな機能を果たしていることは注目に値する。しかし、まだ様々な課題が残っているのも事実である。BI という新しいビジネス・ツールを用いた「自立型の福祉社会システム」の可能性をより実現させていくために、以下は必ずクリアしていくべき課題といえるであろう。

まず、安定的な財政と組織基盤の構築が必要である。つまり事務所の家賃を始め安定的な運営資金を確保することは非常に重要な課題である。次に人材確保と人材養成である。販売員の確保はもちろんであるが、受渡しを安定的に行うためのボランティアの確保が緊要である。それには何よりもこの活動を全体的にコーディネートできる常勤のスタッフが必要だ。その人材を中心に新たなボランティア人材の養成や、一般社会に向けた講座の企画などが行い、さらに多くの人々に活動を理解してもらい参加できるようにしていくことが必要なのだ。なおそのような理解を得る上で、より積極的な広報活動を充実化していくことも求められる。さらに BI 全体に対しては、全国的な販売委託団体のネットワークの構築と、情報の交換などを通じた経験交流の体制づくりも必要と考えられる。そのような活動により、ビジネスの枠をさらに広げ、多くの販売員やボランティアが自由に参加し易い環境を整備することができる。この地道な活動は、ホームレスの社会参加を支援するのみならず、一般社会からの働きかけを促すような仕組みの構築（包摂型社会）へと、相互関係の質の有様を変化させていくこととなるのであろう。

### 参考文献

斎藤慎（2004）、「社会起業家—社会責任ビジネスの新しい潮流」、岩波新書  
中村健吾・中山徹・岡本祥浩・都留民子・平川茂（2004）、「欧米のホームレス問題：支援の実例（下）」、法律文化社  
名古屋市、第 2 期名古屋市ホームレスの自立の支援等に関する実施計画、2009 年 3 月  
藤井克彦・田巻松雄（2003）、「偏見から共生へ：名古屋発・ホームレス問題を考える」、風媒社  
稗田和博（2007）、「ビッグイシュー 突破する人びと：社会的企業としての挑戦」、大月書店

Edgar, B., J. Doherty and A. Mina-Coull, 2000, Support and Housing in Europe: Tackling social exclusion in the European Union, Bristol: The Policy Press.  
Edgar, B., J. Doherty, H. Meert, 2003, Review of Statistics on Homelessness in Europe, FEANTSA.  
Switbank, T., 2001, Coming Up: from the Streets: the Story of the Big Issue, London: EARTHSCAN

# Homeless Report

山本一穂 (BINN 参加時期：2007年～2008年)

## つながる和、 はずれた色眼鏡

大学三年時の就職活動中に、東京で何気なく手に取ったフリーペーパーの中に『ビッグイシュー日本』についての記事があった。そこで読んだ「ホームレスの人々に就労機会を提供する」というアイデアに興味を持ち、ビッグイシュー名古屋ネット（以下 BINN）のドアを叩いた。

私の場合、野宿者問題や貧困問題への関心という前に、ユニークな販売手法や誌面といった運営側についてもっと知りたいという好奇心がきっかけで受け渡しやイベントのボランティアに参加するようになった。だが、ビッグイシューを読み始め、販売員・支援者との交流を通じて複雑であり、他人事ではないホームレス・貧困問題について学び、『ビッグイシュー』の普及によって当問題についての世間一般の認識が高まればと考えるようになった。



二周年記念イベント打ち上げにて（2008年）

毎日夕方に行われている受け渡しでは、販売員さん達は売上の勘定、報告、次の日のための仕入れを行う。そこでの話の内容はその日に出会ったお客さんの話であったり、誌面についてであったり、販売員さん達の思い出話であったりと、話題が尽きることはない。「販売員」と我々「支援者」は上下関係で結ばれてはおらず、対等なビジネスパートナーと言った方が正しい。お互い平等な関係で、両者が会議で熱い討論を飛ばすことは日常茶飯事。そんな隔たりのない関係が続いているからこそ、今日まで活動が続いているのであろう。



帰国時に販売員・支援者と再会（2009年）

2008年夏よりカナダ・バンクーバーに留学することになり、着いてすぐ、バンクーバーのストリートペーパー、『Megaphone』（メガホン）につたない英語で押しかけた。現在、『Megaphone』ではプロジェクト・コーディネーターとしてオフィスでの受け渡し、定期購読やイベントのボランティアを担当しており、早いもので3年が経つ。バンクーバー

# in the World

現在カナダとアメリカでホームレスの支援活動をしている二人の名古屋ネットの支援者から現地レポートをお伝えいたします。

## Homeless Report from Canada

バンクーバーのストリートペーパー『Megaphone』

でのストリートペーパーの歴史は1992年発行の『Spare Change』（スペア・チェンジ）にさかのぼり、その後数々の誌名を経て、2008年に『Megaphone』として刷新された。販売システムは日本と同様、仕入れ価格0.75セント、販売価格2ドルで、1.25ドルが販売員の収入となる。



バンクーバーのホームレス・貧困問題には多くの活動団体が存在し、加えてデモ行動等も定期的に行われるため、人々の関心は大きい。バンクーバー市としても2015年までにホームレス問題を解決するという大きな公約を掲げている。しかし、主要メディアによるネガティブな報道のされ方によって、現在もホームレス・低所得者層に対する偏見が強いのが現状である。特に、野宿者や低所得者層の人々がサービス等を求めて集まっているDowntown Eastside地区に対しての否定的なイメージの氾濫は非常に深刻である。『Megaphone』は『ビッグイシュー』と同じく、大手マスコミが取り上げない角度からホームレス・貧困問題、それに関連する副次的問題（薬物依存、住宅価格の高騰、低所得者層の住む地域の高級化問題）に焦点を置いた誌面の構成をしている。さらに、実際にホームレスを経験した人々や薬物依存と戦っている人々にも寄稿の機会を設け、雇用の提供ということだけではなく、Voiceless（発言する機会がなかった人々）にVoice（発言の場）を、読者には今まで知ることのできなかつた新しい視点から社会を見る道しるべとしての役割を果たしている。

オフィスは平日9時～5時まで開いており、1～2名のボランティアがディレクターと共に常にオフィスに滞在し、『Megaphone』販売に興味を持つ人々への対応、トレーニング、販売員への雑誌の受け渡し等を行う。私の担当は土曜日の10時～3時。週末ということもあり、平日に比べると静かではあるが、新号（隔週金曜日発行）発行日の翌日は多くの販売員が仕入れに訪れる。

『Megaphone』誌でボランティアを始めた際に非常に興味深く思ったのはコンピューターによる販売員と売上管理である。マイクロソフトアクセスで起動する「VendACE」というデータベースが利用され、販売員の記録管理、販売者証の作成、定期購読の管理、隔週売上の管理等、ストリートペーパー運営に関連するほぼ全てをまかなうことが出来る。日本やイギリスのビッグイシューと異なり、北米



Megaphone オフィス（2012年）

# Homeless Report in the World

## Homeless Report from Canada



VendACE スクリーンショット（左上から時計回りに：受け渡し管理画面、販売員記録画面、売上記録の詳細画面、販売者証印刷画面）

では大陸の大きさもあってか、全国規模のストリートペーパーというものは存在していない。市あるいは州単位でストリートペーパーが発行されているというのが特徴的である。そのため北米版 INSP<sup>※1</sup> である NASNA<sup>※2</sup> という団体が結成され、年に一度大きな会議が開かれている。

日本からも当地区の取り組みについては関心が集まっているようで、インディペンデントメディアとしてホームレス・貧困問題に立ち向かうドロップアウトTVの遠藤大輔さんや、横浜・寿地区の研究をされている首都大学東京の山本薫子准教授の訪問時には情報交換をさせて頂く機会を得た。この出会いは途切れることがなく、遠藤さんには帰国の際に東京渋谷区での越冬の取材、ニュース上映会に参加させて頂いた。また、山本准教授とも寿の越冬での炊き出しで再会を果たし、今でもその交流は続いている。

世間にはびこる固定観念によって作られた色眼鏡を外してくれたのは『ビッグイシュー』、そして BINN で出会った人々のおかげである。日本、海外、どこに行ってもホームレス・貧困層が存在しているというのが今日の辛い現状であり、それを無視してはならない。『ビッグイシュー』を初めとした世界中で発行されているストリートペーパー<sup>※3</sup> は当問題に対しての理解を広げるだけではなく、その解決策としての機能も備わっている。この国境を越えた集団的努力が国際的課題としてのホームレス・貧困問題への認識の拡大、その撲滅に向けての取り組みとして今後さらに発展していくことを切に祈っている。まだまだ勉強不足で恐縮ではあるが、これからもストリートペーパーの支援者、野宿者・貧困問題の一活動家として世界のどこにしようとも和を広げていきたいと思う。



北米発行のストリートペーパーの数々  
(2012年)

※1 International Network of Street Papers の略。

※2 North American Street Newspaper Association の略。

※3 INSP のウェブサイトによれば、現在世界6大陸、40カ国で118誌のストリートペーパーが発行・販売されている。  
(INSP ウェブサイトより抜粋: <http://www.street-papers.org/>, 2012年2月現在)

# 田舎町のシェルター @米国

米国北東部の田舎町にある野宿者用シェルターの様子をお伝えします。

2011年9月から、米国北東部の人口4万人ほどの小さな町に滞在しています。緯度が札幌より高いため冬は寒い日が多く、11月からの寒い時期に野宿者用シェルターが開かれます。

そこでボランティアをするようになったきっかけは、10月ごろ町の中心部で物乞いをしている野宿者と話をしたことです。その時話をしたのは、近くのテントで寝泊まりをしていて、11月からシェルターに移るということでした。町には大学が2つあり、キャンパス内のゴミ捨て場で空き缶を拾っている野宿者を見たこともあります。大都市から離れた田舎町に野宿者がいることは、正直驚きでした。

シェルターは町に2つあり、どちらもキリスト教の教会が運営しています。

野宿者の大半は、町から車で30分のところにあるもう少し大きな町で日中をすごし、夜になるとバスでこの町のシェルターに移動してきます。他には、昼間は町の図書館で過ごす人もいて、度々そこで顔を合わせたりします。

私がボランティアをしているシェルターは教会の地下ホールにあり、16人分の簡易ベッドをそこにその都度並べます。もし収容者が16人を超えた場合は、別のシェルターと連絡をとりそちらに移ってもらいます。

ボランティアの仕事は、簡易ベッドの準備、荷物運び、シャワーの準備、登録の準備、台所でスープやサンドイッチなどのその日の食事を作り給仕することなどです。

簡易ベッドは折り畳み式で、ホールに等間隔で並べていきます。2種類のものがありますが、特定の人の名前が書かれているものがあるため、注意しないとイケません。また、女性専用のベッドにはカーテンで仕切りがなされます。

倉庫には、個人の持ち物を保管するための大きなプラスチックケースが置いてあり、利用者の求めに応じてボランティアがそれを運び出すことになっています。

シャワーは2つあり、タオル、石鹸などを準備します。

シェルターは午後9時半に開き、利用者が順々に名前を用紙に記入していきます。その後、食堂で食べ物や飲み物を注文したり、荷物を運んでもらったりします。

米国では居住の権利が憲法に明記されているわけではないので、住む場所を失った場合に行政の責任は明確ではないというようなことをスタッフの方が説明してくれました。ただ、このシェルターにも州政府の補助金は入っているそうで、そのお金と寄付金などを使いながら、ボランティアに給与を支払うようにもしているようです。また、フードバンクなどから食べ物を調達しているようです。

ボランティアは、教会で日常活動をしている市民によって運営されていて、毎回7、8人が参加しています。毎日地元の警察官が見回りに来たりするなど、地域全体で運営していることが伺われます。

午後11時に消灯となりますが、それまで利用者は、おしゃべりをするなど思い思いの時間を過ごします。禁煙なので煙草を吸う人は外に行き、廊下でギターとハーモニカを演奏する人もいます。ボランティアも、仕事が終わればテーブルに座って一緒に話に加わります。

利用者の年齢は若者から年配の方まで幅が広く、少数ですが女性もいます。

言葉がそれほどできないので、スタッフや利用者との深い話はできませんが、みなさん和気あいあいといった感じです。短い時間ですが、その中で同じ時間を共有できることの幸せをかみしめています。

## 1 はじめに

この小論は、反貧困ネットワーク運動とビッグイシュー名古屋ネットのこれまでの活動や関係を振り返り、今後の連携について展望することを目的としている。筆者が両方の活動に参加してきたことからこの小論を任せられたわけだが、それらの活動について中心的な役割を担ってきたわけではないので、残念ながらこの課題を十全に論じるだけの能力がない。したがって、周辺部からこれらの活動を眺めていた者としての感想程度のことしか書くことができないことをあらかじめ了解いただきたい。

本稿の構成は以下の通りである。まず2節で、名古屋における貧困事情と反貧困ネットワークおよび名古屋ネットの活動について述べる。それらを踏まえて、3節で両者の連携についての簡単な提言を述べ、最後に4節でまとめを行う。

## 2 名古屋における貧困事情と反貧困ネットワークおよび名古屋ネットの活動

名古屋地域には昔から日雇い労働市場が存在し、それに付随する深刻な野宿問題が存在してきた。石油危機時には、名古屋市で日雇い労働者の餓死や凍死が相次いだという。これらの問題に対して様々な市民が支援活動などを展開してきたが、そういった人たちを中心にして1985年に結成された笹島診療所が有名である。これらの団体などは、日常的な支援活動だけではなく、生活保護行政の改善につながる林訴訟といった全国に先駆けた成果も収めてきた。

# 反貧困ネットワーク運動と

そうした問題とは別に、90年代以降の労働市場における規制緩和などに伴い、若者を中心とした不安定雇用層の増加などのこれまでとは質の異なる貧困問題が生じてきた。そのような貧困の広がりに対応して、2007年に全国的な組織である反貧困ネットワークが結成された。その後2008年9月に起こったいわゆるリーマンショックは、日本経済を急激に悪化させ、貧困問題の深刻さを目に見える形で示した。日本経済の悪化の原因は急激な輸出の減少であり、トヨタを始めとした輸出産業に大きく依存する名古屋地域への影響は全国的にも甚大で、この時期の非正規雇用者の解雇数は愛知県が最も多かった。2009年元旦には、反貧困ネットワークが中心となり準備を行った年越し派遣村が東京に出現し、家を失った人が大勢訪れたが、名古屋地域でも派遣切りからそのまま住む場所を失う人が続出した。2008年末から翌年にかけては、名古屋市の中村区役所に相談に訪れる人が殺到し、支援の側も対応に追われた。その後名古屋地域周辺では、これまでバラバラに支援活動を行ってきた諸団体・諸個人が協力して各地で相談会を開催し、多くの相談者の生活再建を手助けした。その中で、恒常的な団体の必要性が認識されるようになり、2010年5月に反貧困ネットワークあいちが結成され、生活相談会や学習会などの活動を展開している。

名古屋ネットの結成は2006年であり、前述の流れの中で言うと、90年代以降のいわゆるグローバルゼーションと規制緩和の時代にあたる。自立を目標とした雑誌の販売が基本的な活動であるが、この間の新たな貧困の広がりもあってか緊急の相談を受けることも多く、その度



に可能な限り生活保護申請の同行支援なども行ってきた。それは、当初から予定されていた活動というよりは、緊急に支援を求めてくる人に対するやむに已まれぬ対応としてなされてきたものである。メンバーの中には、私のように他の支援団体に関わっている者もいて、そのようなつながりを生かしてこれまで何とか対応を行ってきた。この間、そういった応急的な活動をしつつ、緊急時のマニュアル作りなどもしながら、組織的対応の整備に努めてきた。その中で、野宿状態に陥った人への情報提供を目的とした冊子「路上生活 SOS ガイド」を作成して広範に配布できたのは、大きな成果であった。しかし、人的な限界等もあり、十分な対応ができる体制が整っているとは言い難いのが現状である。

### 3 反貧困ネットワーク運動との連携

ビッグイシュー名古屋ネットは反貧困ネットワークあいちの構成団体であり、ネット内には、その個人会員になっていたり、そこで活動している人々と知り合いであったりする者もいる。その点からすると、両者の関係は薄からぬものがある。しかし、その連携が十分であるとは言い難い。

この両者は、今後どのような関係を結ぶべきであろうか。ネット側の課題という視点から述べてみたい。

ビッグイシューの活動は野宿問題の解決を目標としているが、販売者と支援者や購読者との

# ビッグイシュー名古屋ネット



阿部太郎

触れ合いや、販売者の生きがいの醸成といった積極面があり、他の活動にはない独自の貢献があることは疑いがない。しかし一方で、この活動が野宿問題の根本的解決への特効薬であるとは言えない。それは、千人を超えるとされる名古屋市内の野宿者数と現販売者の数を比べてみれば明らかである。また、ビッグイシューの活動のみに目を奪われることによる危険も存在する。それは、生存権を否定し、新自由主義に阿ることになりかねないからである。極端な話、「販売をして自立のために頑張っている野宿者は応援するが、そうではない怠け者は応援しない」というような思慮を欠いた言説に手を貸すことになりかねない。生存権が侵されている社会構造上の問題であるという捉え方をしなければ、この問題の解決への道は見えない。問題の深刻さからして、様々なアプローチが必要とされるのは間違いない。名古屋ネットが反貧困ネットワーク運動に参加する意義は、そのことによって生存権の侵害としてこの問題を捉え、この問題の全体の中で独自にどのような活動ができるのかを考えることができるようになることにあるのではないだろうか。幸いにして、ビッグイシューの誌面は野宿問題をそのような視点で捉えており、オピニオンリーダーとしての役割を確固として果たしている。記事の内容は、概ねここで述べた意義と合致していると言ってよい。

以上のように考えるに至った理由は、この間のネットによる緊急対応の活動にある。

緊急対応で野宿者の相談を受ける中で、生活保護の話必ずしていたのだが、それがうまくいく場合は少なかった。と言うのも、生活保護を受けることを恥ずかしいことだと考えていたり、

親族に連絡がいくことを嫌っていたり、これまでの役所の対応に不信感をもっていたりといった相談者が非常に多かったからである。そういった場合に、ビッグイシューの販売はもう一つの有力な選択肢となりうる。しかし、ビッグイシューの販売に踏み出すことには大きな勇気がある。自身の身を公道で晒すことの抵抗感は当然ながら大きい。そうなると、支援者にできることは限られてくる。こういった現実と直面してみて、生活保護が権利であるということも多くの人が認識している社会をつくる必要があるし、役所の対応がまずくなる背景にある財政や人的な制度上の問題の解決も図らないといけないことに思い至った。

それでは、具体的にどのような連携を図っていけばよいのであろうか。

まず初めに、担当者を明確化し、名古屋ネットから反貧困ネットワークあいちの会議等に派遣するということである。そこでなされている議論を名古屋ネットに持ち帰り活動に反映させると同時に、名古屋ネット内の意見を反貧困ネットワークに上げていくことができれば、両者にとっての利益が大きいと考えられる。そのような中で、反貧困ネットワークが行う学習会に積極的に協力したり、共催したりといったことが可能になってくるかもしれない。

また、緊急対応時に他団体の力を借りなければならないことが多いので、緊急時に具体的にどのような連携を図ればよいのかについて、反貧困ネットワークあいちに参加しながらより詰めた議論をしていく必要がある。



## 反貧困ネットワーク運動とビッグイシュー名古屋ネット



細かいこととしては、これまでもやってきたことではあるが、反貧困ネットワークあいち主催の催しの折込チラシ配布などは効果的な連携である。

### 4 まとめ

この小論では、反貧困ネットワーク運動と名古屋ネットの活動を簡単に振り返り、その連携について述べてきた。

本稿で挙げた他にいろいろとアイディアがあるかもしれないが、一番強調したい点は、反貧困ネットワークとつながることによって野宿問題全体の中で名古屋ネットの活動を位置づけるような視野を獲得できるのではないかということである。名古屋ネットが反貧困ネットワークに関わることによって、支援現場の声がより大きな社会的影響力をもつ反貧困ネットワークに反映されるという利点もある。人数不足という中で実際には難しい面もあるが、このような利点に鑑み、今後より一層の連携強化を真剣に考える必要がある。

[参考 web]

- [1] 「笹島診療所とは」 笹島診療所 HP  
HYPERLINK "<http://www4.ocn.ne.jp/~sasasima/sasashima.htm>"  
<http://www4.ocn.ne.jp/~sasasima/sasashima.htm> (2012年1月17日閲覧)
- [2] 「反貧困ネットワークあいちとは」 反貧困ネットワークあいち HP  
HYPERLINK "<http://hanhinkon-aichi.net/whatsus.html>"  
<http://hanhinkon-aichi.net/whatsus.html> (2012年1月17日閲覧)
- [3] 「反貧困ネットワークとは」 反貧困ネットワーク HP  
HYPERLINK "<http://www.k5.dion.ne.jp/~hinky/aboutus.html>"  
<http://www.k5.dion.ne.jp/~hinky/aboutus.html> (2012年1月17日閲覧)



ビッグイシュー名古屋ネットの主演、  
個性豊かな販売者の紹介です。



# 野宿から居室迄

平日/中区役所前  
土日祝/三越南側ポスト前

トミ

ある炊き出しの事、会場に着くとTVから流れる映像の前に案内され一度やってみないかの一言。映像を見ると何かを売っているかのように見えた。富の目は失明で視野が狭い（右目だけがみえる）為反応が遅い場合があるからこの仕事無理…と言うとトミちゃんだったら絶対できる!と太鼓判。アパート入居も可能だよと激励の言葉。後、大阪での販売所へ出向き販売見学。先輩販売者との意見交換、交流、自身としては不安はまだあったが、売ってみる事を決意。立ち上げ初日（06.04/15日 48号～）坂口さんの販売所（名鉄名古屋駅 北改札階段横）で支援者、販売者で雨の中販売開始。百冊近い販売を終え、今後の販売方法など話し合い近くで食事会。二日目～は各自設定した売場（栄・名鉄名古屋駅中央階段前・名鉄名古屋駅北階段横）売り場には前日同様支援者の応援を戴きながら三日目迄販売。各売り場とも売り上げバッチリ。問題は本の仕入れ。事務所がないため支援者さん宅、日本福祉大学などで一時預かり、必要な数を支援者さんが販売者から聞き取りオフィスビルの休憩所、駅、各売場、炊き出し会場、公園、路上などで仕入れ。支援者さんにとって車や自転車、バイクで運んでくれました。当時の支援者さん有難う。感謝一杯でした。



販売を積み重ね事務所を…当時は名駅に販売者が二人ともあり駅西のとあるマンションの一室に決定。各売り場共に当然の事屋外、雨や雪、強風などは販売不可能。販売可能な日は各売場共売上向上を目指し販売に励む。その最中に通行人や酒気帯びの人、警察、ヤクザ等から販売に対する嫌がらせ（占有許可証の提示・売場に嘔吐物・空き缶やゴミの投げ込み・警察や刑事マルポーに見立て脅しや暴言、退去命令・ヤクザによる暴言・苦情などによる警察から退去命令。占有許可証提示求める・酒気帯び状態での暴言、邪魔等々）が目立ち始めた。しかし今の支援体制では手が回らない状態で現在でも各売場で発生しています。でも、嫌な



事ばかりでもなく励ましの言葉・差し入れ等もあり中には重度障害者やご高齢の方、小さなお子さんも来て頑張  
てね!お身体気つけてね等。子供さんに至っては小さな手でお金を握り「おじさん本ください」すごく感動する事  
も。だからこそ現在でも売場に居れるのです。その苦労が転じたかの様にある支援者さんから保護を受けてア  
パート入居しませんかの一言。自身としては売上で住みたいのが希望でした。話しを持ちかけてくれた支援者さ  
んは元栄販売所での購読者でもありました。自身の事よく知っているの事でした。でも、保護だけは受けたくない  
と断り続けた。暫くして不動産屋の方とお話の場ができ、不動産屋の方からも保護のすすめはあったがこの時  
もお断りしました。その結果保護無で入れそうな東区の物件を内覧させていただきました。部屋に流し台、風呂、  
トイレ付きでした。困った事に段差が多くとてもじゃないが自身の遠近感無の目、足の不具合から見てここでは  
思い断念。そこで超格安家賃の物件をお見せましょとすぐ移動し、その物件を見せていただく事に、北区の二  
階建て木造。ここは流し台、トイレ共有で居室は和室一間のみ。自身お気に入り。て事で中を見ると段差はなく  
畳だけでした。難点は階段とトイレ。階段はなんとかいけるだろうと判断し入居決定。但し部屋には前居住者の  
家財道具があり撤収、内装一部改修のためほぼ一週間間借り宿泊。契約日当日、仕事を終えすぐ居室に移動  
すると不動産屋の方が待機中。不動産屋の方と支援者さんと三人で大家さん宅へ。畳に正座、手をついて挨拶。  
(現在も変わらず丁寧な表情で対応して下さいます)言葉も丁寧で親切な方でした。館内の設備状況、共有  
部や居室内での最低限のマナー等聞き入居手続き。終わると訪れた時と同じ畳に正座、挨拶。こんな身分でも  
丁寧で嫌な表情もなく、かえって自身まで頭が下がる思いでした。居室に戻り初めての夜、やっと野宿脱出。問  
題は階段とトイレ。階段は踏み外しや滑り落ちが多発、打撲した事も。ダメでもともとムリをおねがいで不動産  
屋の方に手すりを付けて戴き、階段昇降はなれましたが、もう一つの難点トイレ。これは設備の大きさや広さが狭  
く、自身にとっては使用不能状態。やむなく近くのコンビニまたはスーパー、駅等を借りる事に…。支援者さん、  
不動産屋さんに感謝でした。入居後暫くの間は祝福を兼ねた差し入れが相次ぎ、畳の上での生活、着々と整  
い今ではビッグイシューの利益で消耗品や生活費、食費等賄いそれなりに一般的な生活をしています。

(文は全て本人)

# ふり向かず 前進あるのみ

名古屋駅旧松坂屋前 木下

ビッグイシューの販売を始める前私は警備員の仕事をしていたのですが、仕事の依頼がなくなり、やむなく野宿生活となりました。

空き缶を集めながら野宿生活をする中で、河合さんと知り合いになりました。知り合ってから何ヶ月か経ったある時その河合さんに、「今ビッグイシューという雑誌を販売する仕事をしているが、木下さんもやってみないか」と誘われました。すでに家でビッグイシューの販売をしていた河合さんから詳しく話を聞いてみたところ、その独特の販売方法に興味を引かれ、自分も販売したいという気持ちになりました。早速ビッグイシュー名古屋ネットの事務所で説明を受け、2007年4月7日に名古屋駅（名鉄側）で販売を始める事になりました。

販売を始めた当初はいろいろな嫌がらせに苦労しました。「邪魔だ」と言って荷物や自転車を蹴飛ばす人や、「誰の許可をもらってここで販売しているのか」と強い口調で言われた事も度々で、そういう時はビッグイシュー販売者の行動規範通り言い争う事はせず、荷物を片付けてその場を離れる事にしています。そんな経験からか、販売中は売り方を注意されないようにと、行き交う人の目線に神経を使います。でもそんな嫌なことばかりではなく、お世話になった方々との楽しい思い出もたくさんあります。中でも忘れられないのは売場近くにあった和菓子屋さんのおばさんです。いつも雑誌を買いに来て下さった上に、釣り銭に困った時には快く両替をしてくださり本当に助かっていました。今はそのお店はどこか別の場所に移転してしまいましたが、あのおばさんには今も感謝しています。それからデパートの警備員さんにもいつもお世話になりました。ご自身の自転車を譲ってくださったり、手作りのおにぎりの差し入れをしたりして下さいました。





販売を始めて5ヶ月ほど経ったある日、同じ名古屋駅（JR側）で販売をしていたSさんの就職が決まったため、そのSさんの売場へ販売場所を移動する事になりました。売場を移してからは少しずつお客さんが増えて行き、一日平均25冊ほど売れるようになりました。

こうして約3年間順調に販売を続けて来たのですが、ある時ビッグイシューの仲間達から、“最近顔色が悪いよ”と言われたのをきっかけに病院を受診してみることにしました。その結果腰の骨に異常がある事がわかり、医師に立ち仕事を控えるよう告げられました。自身でもこのままの状態では販売を続けることは難しいと考え、2010年7月に生活保護を申請し、同時にアパートに入居しました。

体調を崩して毎日売場に立てなくなってからは、応援して下さる多くのお客さんにご心配やご迷惑をおかけして参りました。この先も毎日売場に立つ事は難しいと思いますが、その分ほかの売場の販売者の事も応援していただけると何よりです。私自身は、体調を崩さないようにこれからもビッグイシューの販売を続けていけたらと思っています。これまで本当にありがとうございました。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

（インタビュー、文 箕 朋子）

# 意外な不思議キャラ

伏見駅前担当 まささん

伏見地下鉄4番出口近くで販売しているのはひょうひょうとした格言王、通称まささん。

まささんが販売を始めたのは2007年の立ち上げからちょうど1年を迎えた頃でした。その頃、まだ一人のお客だったこの原稿を書いている私はどこがどう気に入ったのかまささんから雑誌を毎号買うようになっていました。ただし、夏は長時間立っていることが出来ず1日10冊程度売ればさっさと閉店。買いに行こうと向かう途中にまささんにばったり会い、「あれ?今日はもうおしまいですか?」と聞くと、「欲はあるけどよお、こう暑いと立っとなんていかんわ〜」。本人は今でも自分は欲深な人間だと言いますが、私はこのまささんに「欲」というものを感じたことが不思議なほどありません。

その後、名古屋駅に売り場を変えたものの隣臓の病気が発覚し入院治療のため、しばらく販売から遠のいていましたが、2010年に縁があり再び古巣の伏見での販売に至りました。販売を再開したものの過酷な路上生活のため、ひどい睡眠障害で健康状態は悪く、販売に力も入らず全てが悪循環でした。そんなまささんを心配した人々のサポートのお陰でアパート入居を果たし、健康を徐々に取り戻していきました。

しかし1年後、現在の住所に引っ越しをする段取りで、役所の担当者との行き違いで生活保護が打ち切られると思い込んでしまい、皆に迷惑をかけまいと何も告げず失踪するという事件がありました。その瞬間から販売者も支援者も大騒ぎになり、路上生活者でなければ分からないような場所はベテランの販売者が探し、支援者は普段まささんが行きそうなお店に聞き込みに行ったり、警察に問い合わせたり。中でもまささんと一番親しくしていた金山の佐藤さんが受けたショックはただ事ではなく、すっかり落ち込んで無口になってしまい見ただけで痛々しいほどでした。手を尽くしても見つからず諦めかけていた矢先、金山の佐藤さんから本人発見の一報が!何てことはないはじめから金山の売り場近くにいたようで、発見の瞬間の佐藤さんの一言「あんた、こんな所で何やとんの?」。数日前から佐藤さんはまささんを見かけていたにも関わらず夜だったため本人だとは気づかず、まささんはまささんで佐藤さんに無視されたと思ってしまったとかで、まるで漫画のような出来事でした。その日は佐藤さんは販売を休んでずっとまささんの側を離れず、夜は忙しい中みんなが集まってちょっとした食事をしながら大笑いしたとても思い出深い出来事でした。これ程の騒ぎを起こしても憎めないのはまささんの不思議な魅力の一つだと思います。





まささんはとてもおしゃべりの上手な人で、イベントの打ち上げやスタッフとの飲み会等ではお酒が一滴も飲めないまささんはひたすらおしゃべりでみんなを楽しませてくれます。

まささんのお父様は戦後、スクーターでバリバリ仕事をするとてもパワフルな人だったとか。まささんがまだ6歳の頃にそのスクーターの事故で急死してしまい、残されたお母様は息子が20歳になってもこのお父様ののろけ話をしていたほど愛情豊かな環境で育ったそうです。このお母様も伝説を残しています。4歳のまささんを背負って買い物に出かけた帰り、いつも利用している一時間に一本の電車しか通らない近道の鉄橋で、ちょうどその一時間に一本の電車が通過したので、安心して渡っていると後ろから電車！血相を変えて走る中、鉄橋の下の河では船頭さんが寝泊まりしている舟があり、船頭さん達が大慌てでその舟から布団を河原に敷いて「ここに飛び降りろ〜!」と、叫んでも耳に入るはずもなく、陸上競技の短距離選手さながらの猛ダッシュで親子共々命拾いしたそうです。この話は最愛のお父様にも2年間は打ち明けることができませんでした。

まささんの趣味は読書。時代物が好きで、好きな小説家は山本周五郎や吉川英治など、物語より歴史上の人物に興味があり、歴史の話をさせたら3・4日は話しが止まらなくなるそうです。何気ない会話の中に核心を突いた良い言葉が節々に入るのでまささんと会ったら少しおしゃべりを楽しまれることをぜひお勧めします。

(インタビュー、文 石原 明)

# ビッグイシューの 販売をはじめて

金山駅南口 佐藤秀一

私は2010年の2月16日からビッグイシューの販売をはじめました。ビッグイシュー名古屋ネットのボランティアスタッフの阿部さんに声をかけられ、雑誌ビッグイシューとその販売の仕事があることを紹介されたことがきっかけです。



最初は、金山総合駅の北口で販売をはじめました。元・販売者の高橋さんやボランティアの方などが駆けつけてくださり、一緒に販売をお手伝いいただいたことを覚えています。

一週間ほど金山駅の北口で販売をしていましたが、自分なりにいろいろ考えた末に、試しに駅の南口で販売を試みることにしました。北口がよいのか南口がよいのかは当時、迷いましたが、これ以来ずっと現在まで、金山総合駅の南口（ボストン美術館などがある側）で販売を続けています。商品の見せ方や、看板の作り方など、どうしたら道行く人にもっとアピールできるか、日々考え工夫しながら販売をしています。にもかかわらず、なかなか上手く売り上げが伸びず悩むこともあります。しかし、自分の狙い通りに仕入れた雑誌が売れたり、お客様に自分の意図が伝わった時にはやりがいを感じます。

ビッグイシューの販売を始めて、最初に一番うれしかったことは、道行く人やお客様、ボランティアの人たちが、自分を「普通の人」として接してくれたことです。ホームレスであるからと、憐れまれたり、何か違う世界に住む特別な人、という感じで扱われるのではないかと、という不安もあったのですが、そういった態度ではなく、普通に店員とお客様のよう、あるいは友人や知人のように、雑誌の話や世間話をしていただけることが自分にはとてもありがたく感じられました。

金山に来ていただけるお客様は、社会問題に関心が高い方も多く、お客様からの紹介で、障がい児教育のイベントや環境問題・原発の問題を考えるイベント等での出張販売の機会をいただけたことが何度もありました。ビッグイシューの販売を始める前は、障がいのある人のことなどを深く考えたことはありませんでしたが、お客様との会話や、ビッグイシューに掲載されている記事などを通して、さまざまな問題について考えられるようになったことも自分にとっては新しい発見でした。



また、金山総合駅の南口にはビッグイシュー以外にも、自分の描いた絵や書、写真を展示したり、アクセサリやフェアトレード商品を扱う人、ストリートミュージシャンなど、ユニークな人たちがたくさんおられます。彼ら彼女らの活動に大きな刺激を受けるとともに、日常的に温かい交流を持てることを嬉しく思っています。金山で会った書家の先生作品を見たことをきっかけに、自分でも筆で文字を書いて、看板を作ったり、雑誌を買っていただいたお客様に手紙をお渡ししたりするようになりました。

昨年の夏には無事アパートに入居することもできました。物件探しから引っ越し、家具の調達まで、ビッグイシュー名古屋ネットのボランティアの方やたくさんのお客様にご協力いただけたことには深く感謝しています。

「ビッグイシュー」は、他の雑誌ではあまり読めないような記事、他の雑誌にはない独自の視点から編集されていて、雑誌自体も面白いし、弱い立場にある人が堂々と社会の中で働き活躍できる場をつくる、というコンセプトもかっこいいと思います。この素晴らしい雑誌を、一人でも多くの人に知ってほしい、伝えたいと考えています。

まだまだ不安なこともあります。これからのいろいろな人との出会いとつながりを大切に、自分なりの目標に向かって毎日頑張っていきたいと考えています。

(インタビュー、文 石黒好美)

# ビッグイシューの 仲間が一番！

元明治屋前担当 河合淳次

河合さんがビッグイシューの販売を決意したのは千早交差点近くのゲートボール場での炊き出しで手にした一枚のチラシでした。伏見のNPOセンターでの説明会に参加。会場には同じようなホームレスの人が既に5・6人はいたそうです。ビッグイシュー日本の佐野代表の説明を聞き販売を決意。中区役所前のトミさんより1ヶ月遅れのスタートでした。栄三越の交差点付近で販売を始めたもののティッシュ配りやチラシの手配りに阻まれ、なかなか順風満帆とはいかず悪戦苦闘。その後、明治屋の前に立つようになってからも早朝からの販売のため、一晩中飲み明かした若者からの嫌がらせ、同じくティッシュ配り、チラシの手配りに悩まされる日々が続きましたが、粘り強く立ち続けると売り場近くの交番のおまわりさんや丸栄百貨店西側の宝くじ売り場の方が定期的に購読してくれるようになり、ようやく常連さんもついて売上が安定していきました。

しかし、販売を初めて2年目の春に脳梗塞の発作を起こし河合さんは救急搬送されました。朝から体調が優れず、売り場に立ったものの立ち続ける事も困難でトミさんの中区役所に行き、しばらくベンチで横になっている間に、心配したトミさんが救急車を呼んでくれた次第です。支援者がその事を知り、慌てて搬送先の病院に駆けつけるとベッドに横たわりぐったりしながら「わるいね。」と力ない声の返事がやっとの状態でした。

搬送された病院は特異な雰囲気、入院患者は皆ぱっと見て分かるホームレスの人やヤクザばかり。あまりの雰囲気の悪さに見舞いに行った木下さんが支援者が一人で行く事を心配したほどです。夕方遅くに行くと病室でビールを飲んでいる患者がいたり、夕方5時に病室で河合さんと話していると「何時だと思っとるんだ!」と怒鳴られる事もありました。患者の扱いは野戦病院さながらで非常にぞんざいで私は怒りを覚えましたが、当の河合さんは「こんなもんだぞ。」と不平不満を口にする事は一切なく、ペットボトルのお茶一本の差し入れでも「ありがたい。ありがたい。」「気を使わんでいい。」と言ってくれ、私が河合さんの立場だったらこんな風に言えただろうかと考えさせられたものです。

入院して容態が安定してくると麻痺した左半身のたまりハビリが始まり、自らも廊下を行ったり来たりしながら練習に励みあまり腱鞘炎になるほど。入院中は3周年記念イベントがあり、会場に車椅子で駆けつけたり、宝くじ売り場のお客さまがお見舞いに来てくださったたり、皆様に励まされ、嬉しいこともありました。3ヶ月間の入院はあっという間に過ぎ、次の転院先を河合さんも私たちも非常に気にして担当の人に問い合わせてものりくらの反応で、そうこうするうちに転院先が決まらないまま退院。病院側からの書類には病名・症状の欄に「高血圧」と一言書かれているだけ。左半身が動かせず素人が見ても脳梗塞だと分かるのに。と怒りで体が震えた事を今でも覚えています。

何をどうしたらいいのかすら分からず、もう一人の支援者の寛さんと3人で中村区役所で連日の支援活動をしてみえていた藤井さんに相談に行きました。その頃はまだ中村区役所の福祉課は凄まじい数の相談者でごった返している状況の中、突然押し掛けた私たちに的確な指示をくださり、そのおかげでリハビリ目的の次の病院を区役所の福祉課で手配してもらいました。

新しい病院に移っても前の病院での対応に怒り心頭に発しカッカしている私に河合さんは「そんな怒らんでいい。高血圧が原因で発作を起こしたし、わしはあの病院に感謝しとる。」となだめてくれたものです。改めて検査を行い、正式に脳梗塞と診断がつき、体調に合わせたリハビリを受け、完全看護で安定した入院生活を送っていました。リハビリに精を出し階段で3階まで上がれるようになったり、専用の靴や衣類の脱着等も軽くなし、その努力には目を見張るばかりでした。

街中から離れた病院にもかかわらず天気が悪い日にはトミさんがバスを乗り継いでわざわざ見舞いに来てくれたそうです。河合さんは天気が悪い日が続けば皆の売上を心配し、夏になればまだ路上生活をしていた仲間たちが夜になると嫌がらせがあるんじゃないかと心配していました。自分がこんな体になってしまったから守ってやる事ができないと言い、自分のように体が言う事をきかなくなってから生活保護を受けるのではなく、健康なうちに路上生活から脱出してほしいといつも仲間の事を心配していました。

転院してから1年半ほど経ってから現在の福祉アパートに入居。しかし、この入居の際、河合さんは私たち支援者にも販売者にも一言も告げず移っていました。たまたま運良く入居先を知る事ができたのですが、河合さんは我々に迷惑をかけまいと気遣ってこっそり移っていたそうです。

この福祉アパートはとても居心地が良いようでスタッフの方達も親切で、お友達もでき、とても落ち着いた生活を送っている様子です。しかし、やはりビッグイシューの仲間が一番楽しいようで、お盆や正月には木下さんの住まいに泊まって皆でつくる事なくおしゃべりしているのが一番の楽しみだとか。

自身の生活は落ち着いたものの今でも腰痛で通院している木下さんの健康や販売だけで入居を果たした仲間、目の不自由なトミさんの事を心配してゆくゆくは同じ福祉アパートで暮らせばいいと将来の夢もちゃんと描いているようです。

最後に、この記事を担当いたしました私はビッグイシュー名古屋ネットに参加してすぐに河合さんの救急搬送に直面しました。ホームレス問題の知識もなく、何の役にも立たない支援者でしたが、入院中の河合さんを通じて他の販売者さんたちとより深く関わる事ができ、世間のホームレスに対する心ない対応や当事者がおかれている厳しい現実等本当に勉強になりました。当時、大変お世話になりました笹島診療所の藤井さん、福祉課のケースワーカーの方々、そして何よりも河合さんに心より感謝いたします。

(文 石原 明)



まだリハビリ入院していた頃の河合さん  
机の上には木下さんがプレゼントした置き時計。



去年のお盆に皆で集まった時の様子  
(通信に掲載しました)

# イノシシお婆さんの 人生記

元販売員 SK 女性

今から9年ほど前、当時大阪で一緒に暮らしていた男性がいましたが、折り合いが悪くなり、1人アパートを出ました。一時は大阪でシェルターにも入りましたが、その後仕事を見つけるために愛知県に行き、岡崎の自動車部品工場で派遣社員として住み込みで働きました。しかし徐々に仕事がなくなり、とうとう住む場所も失いました。今で言う派遣切りですが、そのころは派遣切りという言葉はまだ一般的ではありませんでした。次の仕事はなかなか見つからず、やがて名古屋で生活保護を受給するようになりました。腎臓の持病もあったため、しばらくは授産施設で働いていました。でも、施設が民間委託されてから何となく行きにくい雰囲気になり、自主的に辞めてしまいました。新しい仕事を見つけなければ、と思っていた時、大阪で暮らしていた頃に目にしたビッグイシューの事をふと思い出しました。そして、ちょうど運良く名古屋駅で販売員さんに出会う事ができたのです。私は勇気を出してその販売員さんに声をかけてみる事にしました。「ビッグイシューの販売の仕事をしたいのですが、どうすればいいですか?」と尋ねると、その販売員さんは快く対応してくれました。後日、ビッグイシュー名古屋ネットの事務所に出席して説明を受け、そして、2007年12月に金山駅で販売を始める事になりました。

雑誌が売れない日はとても辛かったです。でも、冬の寒い日にお客さんから温かい差し入れをいただいた時は、とても嬉しかったです。ある時は若い男性に「握手してください」と声をかけられた事もありました。握手をすると、「ありがとうございます」と丁寧におじぎをされた事は今も忘れられません。

そんなある日、通院していた病院の主治医から、持病が悪化したため販売時間を減らすよう告げられました。椅子に座るなどしていろいろ工夫をしながら販売を続けましたが、体調は悪くなるばかり。そして2008年7月、とうとう販売を辞めざるを得なくなりました。今は足腰のリハビリのため通院しながら自宅療養をしています。

20代から腎臓病を患い病院通いを続けてきましたが、この先も一生この病気とつき合っていかなければなりません。でも悲しんだり後ろ向きに考えたりしても過ぎて行く時間は同じ。それならば、明るく前向きに生きていたいと思っています。最近では、人との繋がりの大切さという事も深く考えるようになりました。体の事を考えると、無理をしないように家に引きこもりがちになりますが、今後はもっと外に出ているんな人とかかわり合いながら、新しい事に挑戦していきたいと思います。そしてこれからも、あの時親切に対応してくれた名古屋駅の販売員さんからビッグイシューを買う事も、楽しみの一つにして行きたいと思っています。

(インタビュー、文 笥 朋子)



我々ボランティアは販売者に負けず劣らずの個性派ぞろい。

2006年の立ち上げ当初から

少しずつ人の入れ替わりはありますが、

ずっと販売者を中心に活動을続けております。



3周年記念大交流会にて

今からちょうど四半世紀前の1987年は、スリランカ首相の提案を受けて国連が定めた「(適切な)住まいのない人びとのための国際居住年」でした。私は当時タイに住んでいて、この居住年のためのさまざまな取り組みを仕掛けていました。名古屋市役所にも働きかけて、アジアの国々から自治体代表やNGOが集まって居住問題について協力し合うための大きな会議が名古屋で開かれました。そのときすでに当地で長くホームレス(名古屋の支援者は「野宿生活者」あるいは「野宿労働者」と呼んでいた)への支援に関わっていた笹島診療所の藤井克彦さんや共生会の松本晋さんに、お会いしました。市の予算で開いた会議の一部に、松本さんの講演が忍び込んだりしていたのですが、当時かれはホームレス問題に絡んで名古屋市と裁判闘争中の身であり、あとから会議プログラムを知った市長はすごく怒ったそうです。

翌年には、ホンギュさんの記事(p.54)にあるACHRがタイで設立され、私はそれに参加しました。そのころ、アジアのスラム住民を中心とする居住運動は大きく二つの方向に分かれつつありました。ひとつは、自分たちのおかれた貧困な状況を上からの抑圧ととらえ、居住者の組織の力を高めて強制追い立てに抵抗し、必要な土地や水道サービスを行政に要求し、公的な住宅を獲得する、という運動です。国際人権法も次第に「居住の権利」を定義づけて、こうした動きを支えるようになっていきました。一方、この流れから生まれながらも、これだけでは飽きたらないグループも登場していました。下水も住まいも生計手段も、まず自分たちでつくっていく、その中で居住者同士の新しい力が生まれ、行政との関係を変えていくことができる、と考える運動です。ACHRは後者の流れを代表していました。イギリスでBig Issueという雑誌が始まったというニュースにタイで接した時、うまい名前を付けたものだな(「大問題」と「ビッグな雑誌」という二つの意味がシャレて重なっていますね)という思いとともに、北側諸国での後者型の運動だ、と感じたのを覚えています。

1995年に転職して名古屋に住むようになりました。まったく偶然の成り行きだったので、藤井さんが「え、穂坂さんが名古屋に?」とびっくりしていました。かれのグループとともに、ホームレス調査をしたり、名古屋市内に政策提言したり、夜回りに参加したりしました。帰国直後から「居住の権利」について解説を求められることが多く、私は法律が専門ではないのですが、神戸の被災地や、京都のウトロ地区(追い立てに直面していたコリアン集落)に話をしに(というよりも、話を聞きに)いったりしました。96年1月には「ホームレスは特殊な哲学をお持ちの方々で・・・」と語っていた東京都の青島知事が、都庁舎に通じる地下道からダンボール村を強制排除する事件があり、抵抗の中で当事者が逮捕され、うち2名が起訴されました。その裁判で、国際人権の立場から二人が無罪であることを私は証言しました。名古屋でも2005年1月の白川公園からの強制排除の後、なおも公園内に居住していた「ほとけ」さん(彼



は2009年の名古屋ネット連続講演会に毎回顔を出していた)が、名古屋市職員による嫌がらせに抵抗したことから起訴されました。私は藤井さんと森弘典弁護士に要請され、名古屋市の行為が国際人権法に違反するとして意見書を提出しました。

しかし自分で、やはりどこか飽きたらないものを感じていました。東京でホンギョさんたちが活動していたM公園にスリランカやインドのスラム住民・活動家を連れていったりしましたが、やがてホンギョさん自身が名古屋の私の職場の仲間になりました。私は勤務先の学生たちと、海外のスラム女性たちのつくる生業貸付基金に投資する方法を調べつつ、市民のお金で仕事づくりを進めるビッグイシューに関心を持ち続けていました。だからホンギョさんが名古屋でビッグイシューを始めようとする思いはよくわかり、2006年2月の佐野さんによる説明会にも参加しました。間もなくビッグイシュー名古屋ネットが始まりましたが、まだ事務所がなかったので、私たちの職場にも雑誌が運び込まれました。ホンギョさんを手伝って雑誌をクルマに積んで中区役所の前に停車して、大急ぎでホンギョさんが降り立って富田さんの受け渡しをする、といった離れ業が数カ月続きました。

名古屋に来て学生を相手とする仕事に就いたので、あわてて本もいくらか読みました。アマルティア・センというインド出身の学者が、こういうことを言っているのを知りました。「スラムに住む人びとを前にして、この人たちが抱えてるニーズは何か、という問いから出発してはいけない。それは人間をモノやサービスを与えられる受益者としてのみ扱うことにつながる。そうではなく、人間は誰もがエージェント(変化の担い手)であること、ある人たちのエージェントとしての自由や力が押さえつけられているとしたらそれはなぜか、その抑圧を除くにはどうしたらいいかを、考えなさい」と。この場合のエージェントというのは、私たちが日常耳にするエージェント(代理店)という意味とは違います。「主体的な」というときの「主体」に近い言葉です。しかし考えてみると、ビッグイシューの販売者はひとりひとりが、雇われ社員でなく、自分の判断で販売する代理店です。その人たちが真のエージェントとして、つまり自分と社会の変化の主体として生きていけるかどうか。それは、周囲の支援者や購買者も、さらに行政もまた、それぞれ自分と社会の変化の担い手へと変わっていかれるかどうかにかかっているでしょう。むかし要求獲得路線に進みがちな居住運動にやや飽きたらなかったのは、そういうことだったのではないか、と思いました。いま東北を時折訪れながら模索しているのは、やはり被災者も支援者も誰もがエージェントであるような復興のプロセスです。

## ●ホームレス支援との関わり

私が初めてビッグイシューの存在を知ったのは、2004年の東京の井の頭線渋谷駅の近くであった。当時私は、東京都内のある公園で、ホームレスの仲間(当時我々の支援者は、ホームレスの人々に対し「仲間」、あるいは「先輩」と呼んでいた)と一緒に毎週土曜日に共同炊き出しを行っていた。みんなで片づけを終えた後はチーム分けし、渋谷区内のパトロール(=夜回り)を行った。このパトロールは支援者と仲間が必ず一つのチームとなって周った。パトロールのモットーは、「仲間の命は仲間が守る」。野宿状態の辛さやそれに至るまでのプロセス、路上での生き方等、生存にかかわるような大切な情報やノーハウは、誰よりも当事者が詳しい。パトロールは、いわば当事者としての自己防衛の実践であると同時に、同僚を守るための連帯行為であった。パトロールで周るときは、いつも小屋やテント、あるいは路上で寝泊まりしている人に「先輩、お変わりはありませんか」と声掛けし、答えた人とはさらに話をする。冬場はとりわけ体調の急変を訴える場合も多々あり、そんなときは救急車に同乗し、病院まで搬送することさえあった。パトロール中にあった出来事に関しては、参加者全員が最後に集まり情報を共有する。支援者は活動を主導するというよりは、ホームレスの仲間が主体として活動の中心を担えるよう、支えるような存在であった。

## ●フェイス・トゥ・フェイス (Face to Face)

パトロールにしても共同炊き出しにしても、主役はいつもホームレス当事者であった。支援者が当事者の声を代弁したり、当事者に代わって何かをやってあげる、あてがうというのはできるだけ避けるよう、いつも心がけていた。たとえば、私の提案で、2001年の夏頃公園居住者の生活ニーズ調査を行ったことがある。今までホームレス関連調査となると、当然のごとくホームレスの当事者は調査をされる側に回されることがほとんどであった。しかし、この調査は調査する側にもホームレス当事者が入った(写真2参照)。調査終了後、調査に参加したホームレス仲間からは、「今まで話もしたことのない隣のテントにいる仲間と話ができて良かった」、「自分よりもしんどい経験をされてきた人もいることがよくわかった」等、公園居住者間の横の繋がりが築かれたという意味で高い評価が得られた。そのような気づきあいのプロセスもあって、調査後、同公園居住者たちは自ら「自治会」を組織し、公園居住者の生活衛生や環境改善に向けた様々な活動を進めて行ったのであった(写真1・3参照)。

## ●名古屋の支援団体との出会い

当事者間の連携という面で画期的な試みが2001年に行われた。それは、タイのバンコクに本部を置く居住の権利のためのアジア連合(ACHR, Asian Coalition for



写真1：野宿当事者と支援者が共同で行った公園の環境改善のための1泊2日のワークショップ



写真2：公園居住者による生活ニーズ調査の様子(2001年)



写真3：東京都渋谷区M公園の公園自治会結成の様子(2001年)

Housing Rights HYPERLINK “<http://www.achr.net>” <http://www.achr.net>）からの資金援助による、「ホームレス東アジア交流会」である。ACHRは、専門家や技術官僚のようなエリートによる技術援助ではなく自らのニーズに最も詳しい当事者間の経験交流 (Face to Face) を支援し、関係交流を通じた学習プロセスから問題解決に辿りつくような開発アプローチを支援してきた。ACHRは、その一環として東アジアの先進都市が共通して抱えるホームレス問題への交流プログラムを支援したのだ。当時国内では、東京、名古屋、大阪の3大都市の当事者と支援者間に交流経験の蓄積があった。その上、さらに日本・韓国・香港との相互訪問プロセスを支援し、3か国の当事者の経験が共有された。交流プログラム終了後、香港や韓国から、ホームレス当事者団体がつくられ、当事者主導による自主的なパトロールが始まったという連絡を受けた。水平交流プロセスの結果、ホームレス当事者は支援を受ける「対象」から問題解決の主体として堂々と立ち上がったのである。

私が名古屋を訪れるきっかけとなったのも、このホームレス交流に支援者として参加したことであった。その後、国内では毎年のように東京、大阪、名古屋の当事者・支援者間の交流としてソフトボール大会が開かれ、毎春鶴舞公園に集まっていた(写真



写真4・5・6 千早の高架下に設置された韓国の仲間を迎えるための迎賓館と懸垂幕

7参照)。その後、2005年6月より名古屋に来ることになり、それを機に私の名古屋でのホームレス支援活動は、新たな出会いを通して展開することになったのである。



写真7 笹島団結ソフトボール大会の様子

#### ●ビッグイシュー名古屋ネットの設立を手伝う。

名古屋でのホームレス支援活動は、多くは毎週土曜日の夜に行われる夜回り活動への参加からなる。名古屋駅界隈の栄、若宮公園・白川公園、久屋大通等に分かれ、ホームレス仲間を中心に支援者が手伝いに加わり、夜の12時を回るまで夜回り活動が行われた。私は、支援活動に関わりながら東京で見た『ビッグイシュー』の事を思い出していた。当時私は、夜回りや炊き出しなど、生活防衛のために必要な活動も重要であるが、ビッグイシューのような、ホームレス当事者が仕事を通じて収入を得て資産を形成することや、社会再参加の機会をつくるという支援手法も、当事者の選択肢の拡大という面で大切であると考えていた。しかし、それを打ち明けても、当時の支援団体の反応は温かいものではなかった。名古屋は閉鎖的な土地柄で、新しいものはなかなか根付かないというのが持論であった。それにも関わらず名古屋でビッグイシューを販売するようになったのは、一人の仲間との出会いがあったからである。それはSさん。夜回りを一緒にしていたSさんに雑誌を見せ、販売の仕組みについて説明すると、「それならやってみても良い」と言ってくれた。その後の経緯については「名古屋ネットの歩み」に譲り、最後にSさんが述べた一言を紹介して終わりに代えたい。「今は自分ひとりしかないけど、自分の後に仲間の人々がついてきてくれることを期待する」。当時Sさんたった一人の販売員から始まったビッグイシュー名古屋ネットであるが、現在は6名の販売員が名古屋を中心に販売活動に励んでいる。私にはSさんのあの言葉が今でも耳に響いてくる。そして、今の6名の販売員の後に続いて名古屋、いや、東海3県でビッグイシューが広がることを夢想している。

ビッグイシュー名古屋ネットが発足から5周年を迎え、皆様が壁に当たりながらも問題を解決し、今も躍進を続けていらっしゃることにまずは敬意を表したいと思います。5年という歳月は並大抵の期間ではなく、団体としてひとつの大きなステップを乗り越えられたのではないのでしょうか。

それにしても発足当初のことを思い出すと、もうそんなに経ったのかと、月日の流れの早さには驚かされます。

私が2006年の春に名古屋ネット発足のお手伝いのため、初めて名古屋駅に降り立ったときのことをよく覚えています。新幹線から降りると名古屋駅の中は人波で溢れ、やっと外に出たと思えば、空にも届くようなビルが並び、人の流れは大阪の一等地でも負けず劣らない多さで活気に満ちていました。しかも、駅前にはあのトヨタが本社ビルを建てるとの噂。そんな稀に見る好立地に恵まれた駅周辺を見て、このような大都市でビッグイシューが始まることを本当に嬉しく思いました。

販売開始の日、確か表紙がユマ・サーマンだったと思います。早朝から既に名古屋ネットの皆さんは集まっておられ、3名の販売者さんは少し緊張と不安の表情で始まりの準備をされていました。私は今も販売を頑張っておられるTさんと一緒に班になり、榮で販売を開始しました。初めに立った場所が人の流れがなく、あれやこれやとみんなと相談しながら、流れの多い場所に落ち着きました。結局その日はメディアの効果もあり、そこそこの売上で、初めの3人の販売者さんの顔に、疲れとともにホッとした表情を浮かべてらしたのを覚えています。

当時、私も大阪の販売スタッフになってからまだ1年を過ぎたところで、右も左もまだわからず、ましてや新しい場所でビッグイシューが立ち上がる現場に立ち会うことなど経験がありませんでした。代表の佐野にずっと付いてまわりながら販売説明会、記者会見、TV・新聞対応などまるで非日常の世界を体験しているようでした。

そんな中で一番大きかったのはやはり、名古屋ネットの皆さんとの出会いでした。大阪でもボランティアさんとお会いすることは多かったのですが、一つの都市でビッグイシューの事業を担っていかうという強い思いを持ったボランティアさんと出会うのは初めてでした。

また当時、ビッグイシューを支えるサポーターさんは各地に増えてきていましたが、そのほとんどがホームレス支援団体の事業の一環としての関わりでした。そんな中で、名古屋はおそらく全国で初めて市民ネットワークの集まりでできた団体で、それは今振り返っても非常に画期的なことでした。

しかし、そんな強い思いを持った市民ネットワークである名古屋ネットの方々を「本社の社員」としてサポートする担当になった私はまだまだ未熟で、課題が山積みでした。

例えば、無給の頑張ってもらってる名古屋ネットのサポーターさんと利益の絡む事業を一緒にやっていくために自分はどんなスタンスを取ればいいのか。大阪と違いたくなく直接連絡が取りにくい名古屋の販売者さんに出来るだけ大阪との不平等がないようにするにはどうすればいいのか。ビッグイシューの窓口である自分が名古屋ネットの会議でどのような発言をすべきなのか。新しい販売物の販売方法やルールをどんな仕組みでどのように伝えればいいのか、などなど、全国規模の事柄については、まず名古屋ネットを思い浮かべ考えました。今の私が考えるサポーターさんとの関わり方の礎は名古屋ネットの皆さんとの関わりで生まれてきたものです。

そういう意味で名古屋ネットの5年間の歩みは、同時に私をビッグイシューのスタッフとして一緒に成長させてもらえたと思います。

そしていろいろ私の不手際でご迷惑もたくさんかけてしまったのに、いつ名古屋に行っても温かく迎えてくださることに、感謝感謝です。

3.11後、社会が大きく変わりました。特に「いつまでもお役人やお偉いさんに任せてはいけない」という意識を私も持たずにはいられませんでした。そんな中で、「ビッグイシューの意義」を再考する機会があり、はからずもビッグイシューが今の社会に必要であることを再認識しました。それは、貧困問題を国や役所に任せっきりにするのではなく、貧困問題の当事者であるビッグイシューの販売者さんが問題解決の担い手になり、それを購読者やサポーターである市民、つまり社会が応援しているということです。格差が激しく、「はぐれものは排除する」傾向が強くなってきた昨今、当事者が立ち上がり、それを社会が包摂することが必要ではないでしょうか。そしてそれを率先しているのが名古屋ネットの皆さんです。

発足からしばらく経って久々に名古屋に行ったとき、冒頭のTさんがとても明るくなられていたのが驚きました。また、今も頑張っておられる販売者のSさんとお話したとき、「路上生活でもビッグイシューの販売者としてなら誇りが持てる」と仰っていました。

人が明るくなったり、「誇りが持てる」と言えたりするのは、ただお金を渡すだけではできません。そして「いい社会」とはそんな明るく誇りを持った人達がたくさんいる社会のことではないでしょうか。

名古屋ネットの5年の歩みは、やはり素晴らしいです。

私がホームレス状態にある方々と親しく接するようになったきっかけは、ホームレス支援を始めたいと思ったからではなく、むしろ反対に、ホームレスの方々から支援を受けるためでした。

2001年に、「テロとの戦い」と「世界の平和」を掲げ、米軍がアフガニスタンの攻撃をはじめました。当時大学院生だった私は、翌2002年のワールドカップ開催からめて、世界中に、爆弾ではなくサッカーボールの雨を降らせようと、ボールを贈る活動をはじめました。ところが、協力を求めたあるNGOの事務所で「あなたの活動は金持ちの傲慢です」と激しい批判を受けました。当時、奨学金で貧しい学生暮らしをしていた私が「金持ち」と言われたことも意外でしたが、それにも増して、「何かを贈るという行為は金持ちだけの特権だろうか」という疑問がわきました。そこで早速、インターネットで市内の炊き出し現場を探し出し、ホームレスの方々に対して、アフガニスタンに贈るボールの募金活動をはじめました。最初は「ふざけるな」という言葉を浴びたりもしましたが、毎週炊き出しのお手伝いをしながら通い続けていると、あるおじさんが「来週、空き缶をつぶして100円持ってきてやるよ」と仰って下さいました。その後、次々と募金をして下さいの方が増え、首からかけたポシェットは、ひもが食い込んで痛く感じるほど小銭で重くなっていきました。その頃、炊き出しのボランティアをしておられた教会の初老の方にその話をすると、聖書の一文を教えてください、その言葉が今でも私の“活動”の大きな支えとなっています。それは、「与えるは受くるよりも幸いなり」という言葉です。

2006年のビッグイシュー名古屋ネットの立ち上げから今日まで、私は自他ともに認める無責任な付き合い方をしてきました。5周年を迎え、私は何をしてきたんだろうと振り返るとき、販売員さんたちの「与える喜び」を見て、私自身が喜びを感じてきたのだろうと思います。炊き出しの列に並び、伏し目がちに食事を受け取っていたあの人が、今はこんなに堂々とお客さんにサービスを提供している、笑顔を贈っている。その姿は、まさに、受けるよりも与えることが幸せなんだと教えてくれます。

ビッグイシュー名古屋ネットの5年間は、一歩ずつ着実に活動を発展させてきた、と言えるようなものではなく、常に崩壊と背中合わせの状況だったように思います。販売支援に関わっていると、ときとして販売員さんたちに「この人は支援者に対して少しは感謝の気持ちがあるのだろうか」と思わされる場面に出会うこともありました。

逆に、販売員さんが支援者に対して、「この人は本気で販売の支援をする気があるのだろうか」と思うこともあったかと思います。しかし、メンバー間でのこうしたずれ違いがある一方で、販売員さんたちのお客さんに対する気配りには驚かされることが多々ありました。生きるために仕方なく「雑誌とお金を交換している」、という本の売り方ではありません。多くの皆さんが、雑誌を売ることでお客さんの役に立ちたい、お客さんに喜んでもらいたい、という姿勢を持っていることがヒシヒシと伝わってくるのです。「社会人としての自立」、ということを考えるとき、どんな大企業に勤めていても、「贈る喜び」を感じることなく日々暮らしている人は、社会に生きる人、つまり社会人として未熟なのではないかと思うようになりました。

ビッグイシュー名古屋ネットは5周年を迎えましたが、残念ながらこれまでにこの会を抜けて行った方々も多くおられます。無責任ではなく、むしろ責任感の強い方々がなぜこの会を離れていったのか、もう一度考え直してみる機会だと思っています。なぜ彼らの「贈る喜び」が喜びでなくなったのか。ビッグイシュー名古屋ネットという社会の中でそれぞれが自立して、関わっている一人ひとりの「贈る喜び」に敬意を払って互いを思いやることができるよう、微力ながら、そうしたネットワークづくりの力になればと考えています。ビッグイシュー名古屋ネットの5周年にあたり、無責任な付き合い方をしている私は、その部分に関しては自分自身に責任を持って、ゆっくりと問い直していきたいと考えています。



立ち上げ当初の  
パンク・オブ・チキン  
コンサートでの試験販売にて



ある日、新聞で“日本でもビッグイシュー始まる”という記事を目にしたことが私とビッグイシューとの出会いとなりました。敗者復活戦としてどんな状況になっても誇りを持って立ち向かう販売者の姿勢と困難を承知の上でそのバックアップ体制を整えられたスタッフの皆さんにとっても感動しました。そして、名古屋ではまだ始まらないのかなあ、と残念に思っていました。

たまたま横浜に用事があって出かけた時、横浜スタジアムの最寄り駅、管内でその雑誌を売ってみえたのに出くわしました。バックナンバーも並べられていたのでいろいろ見せてもらい、とても内容の充実した冊子であることに感心しました。“ここで買わないと名古屋で買えない”と思ったので「これまでの全号を下さい。」と思わず言っていました。それは特集記事が一般マスコミでは扱わないような社会問題を扱っていること、ホームレスの人との本音が綴られたコーナーなど興味深かったからです。相手の方も半信半疑な様子でしたが、「ここにはないもののあるけど。」と言われたので「その分はついでに送ってもらえればいいです。」と全号買いました。

横浜からの新幹線の中、読み読み帰りました。そして感じたことは、ちょっとした歯車の違いから簡単にホームレスになられるケースの多さです。“その気持ちを誰かに相談できたらよかったのに”とか“何で家族に心が開けなかったんだろう”とか“親子関係の心の傷がこういう結果につながったのかな”とかそんなことを一杯感じました。

私は万博のボランティアをやっていたのですがその仲間にネットの古澤さんがみえて、たまたま飲み会の時にビッグイシューの話が出たことがきっかけとなり、私も参加することになりました。名古屋だけでなく大阪での設立記念会の周年イベントや東京にビッグイシュー設立者のジョン・バードさんがみえた時も思い切って参加しました。一般人にはなかなか入る機会の無い、イギリス大使館が会場でした。その点でも行ってたかった事もありましたがとても有意義なお話が伺え、参加できてよかったと思いました。

ジョン・バードさんのお話のなかとりわけ印象的であったのは、“クリスマスツリーの灯りではなく、灯台の明かりをめざした活動を”ということでした。ホームレスの方を取りまく様々な問題は多岐に渡り、一筋縄ではいきません。本質の問題が何であるかを考えつつ、活動していくことが大切であることを改めて考えさせられました。

例えば、一般的にはホームレスの方には対して“部屋に入れば”、“仕事につけば”

いいような感じがしてしまうでしょうが、そこからのフォローがとても重要であることでもわかると思います。私自身、ホームレスの方のお話を伺っていて、環境やおいたちから深く心が傷つけられ、そのことが大きく影響していることを感じることは少なくありません。そうしたメンタリティの問題も重要です。部屋に入っても仕事についてもその人自身が自分の内面と立ち向かい、戦い、勝ち取っていく“誇り”がとても大切だし、価値あるものであることと確信します。

また、活動のあり方として言うまでもないことですが、販売者と支援者のそ相互信頼がとても求められます。どちらも互いに相手に遠慮したり、こびること無く信頼関係を築いていくことは実際にはなかなか大変ではないでしょうか？ビッグイシューの本来のあり方からすれば、自立をめざし頑張る販売者をフォローするのが支援者の役割であり、ビッグイシューの活動を純粋に応援してくれている一般市民を裏切らないよう、常に意識している必要があるのではないのでしょうか？少しでも貧困問題、ホームレス問題に関心を持って下さる幅広い市民の皆さんと共に真に豊かな社会創りを目指せるような活動こそ、ジョン・バードさんが言われる“クリスマスツリーの灯り”ではない“灯台の灯り”を目指す活動ではないかと思うのです。

ホームレスの方が「ホームレスになるのは自己責任」と言われることをよく耳にします。確かに希望を見い出せず、自暴自棄になってしまったり自堕落な生活になってしまうこともあるかと思います。でも、そこへ至る過程をじっくり考えてみれば、この社会のあり様が貧困問題には凝縮されています。その社会が人間を大切に考えるか、否か？

先頃、来日されたブータン国王夫妻のことが大きな話題となりました。その国民の多くが日々、幸せを実感していることによるものです。私達が日々、幸せを実感するには経済的問題もさることながら、いかに豊かな精神的つながりを自分の周りに築けているかがバロメーターになることでしょう。そしてそのことが“灯台の灯り”にも継がるのです。

僕と野宿者とのかかわりはうすく、長い。主に大学生以降、東京で、乗り換え駅の野宿者と話したり、時にはカイロを渡したりしてきた。支援団体にも少し参加したけれども、その中で積極的に活動したわけではなく、通常は個人としてかかわり、ごく稀に支援団体に繋がったりという感じだった。生活保護同行も2名だけ。うち1名の方は生活保護を取れなかった。当時、不勉強で、「支援者」が本人同意を得れば面接室に入れることを知らず、その時知っていればひょっとしたら結果も違っていただかもしれず、申し訳ないことをした。その方は別の支援団体に繋がったが、かかわりきれなかった。

名古屋で就職して少し生活も落ち着いてから、とりあえず団体を通じて野宿者にかかわろうと思い、当時名古屋にいたジョン・ホンギュさんー渋谷の宮下公園で知り合ったーに挨拶がてらメールを送ってみた。当初僕は夜回り等を考えていたのだが、「名古屋ネット」を手伝ってみたいかということになり、時々「受渡」に入るようになった。2006年の8月のことだ。それが名古屋ネットとの関係の始まり。もともとビッグイシューは日本で発売された当時からそれなりに注目していた。ビッグイシューを売り買いするとはどういうことか、とか商品としてのビッグイシューの魅力とは?ということに関心を寄せつつ、時折買っていた。名古屋の販売開始時期に丁度名古屋に来た僕は、48号(名古屋販売開始号)をトミちゃんから買ったことを覚えている。それから6年。

「名古屋ネット」とのかかわりは決して濃くはないのに、いつしか中心メンバーのひとりともみなされるまでになってしまった。僕は「名古屋ネット」のボランティアメンバーとして積極的に課題を引き受けてきたわけではない。むしろ巻き込まれてきた、と言いたいところだが、おそらくはそこまでは言えない。確かに一時期はweb広報とメール連絡、ワンコインサポーターの方々への通知等、事務作業をある程度集中的に引き受けていた。他地域の団体にインタビュー調査に行き一周年で報告したりーでもきちんとやりきれなくて諸方にご迷惑をかけたー、ミッドランドスクエアでの写真展について差配したりもした。そして、次から次へ生じる「難題」の幾つかに対処したりもした。軽口で話題にできることで言えば、某さんのお部屋を片付けたり…。その意味では全く自分が何もしてこなかったわけではなく、何かの局面で時折役割を果たしてきたと思う。

とはいえ、特に近年、日々の「受渡」の回数や販売者との相対が少なくなったーこれは私に限らず指摘されることであるけれどーために、僕はいろんなことを脇に置き、おろそかにしてきた(できた)と思う。「ホームレス問題」についてほとんど知識がなかったと思われるメンバーが、この団体を通じて日々販売者と向かい合い、さらに問題意識を広げて積極的に活動していくさまを見ると、自分のか

かわりの薄さを実感せざるを得ない。

しかし、実のところ「名古屋ネット」のメンバーとして積極的に課題を引き受けてきていないこと自体は（誤解を恐れずにいえば）一番の問題ではない。僕自身は「名古屋ネット」のメンバーという形でいつも野宿者とかかかわっているわけではない。先ほど述べたように、東京ではほぼ個人の資格でかかっていたが、名古屋でも（前職場では）駐輪場にいる野宿者と喋ったりしていた。通路で寝ていた病気でほとんど動けない野宿者には食べ物を渡していたこともある。昨年度末は、どうしても気になる女性野宿者に話しかけてホテルに泊まってもらい他団体に繋げた。同時期に若年野宿者の支援をし始めたが、いつしか姿が見えなくなってしまった。こうした活動に際しては「名古屋ネット」のメンバーの助けをどんどん得るほか、「名古屋ネット」の名前を出したりしてきたけれども、そういう場合も、メンバーとしての活動というよりは、個人が「名古屋ネット」を手段として利用してきたという感覚の方が強い。そのような活動もありだと思う。

そうした活動の可能性を述べた上で、今一番問題だと感じるのは、僕がどういう活動を行うにせよ、僕がどのように野宿者と、また野宿者にかかわる社会運動とかかかわっていくことを望んでいるのか、望みたいのか、自分でも分からなくなっていることだ。状況に否応なしに巻き込まれる、あるいは否応なしに巻き込まれるように自分を積極的に差し出す、ということが現在の僕にはできない（あるいはできないことが可能な状況にいる）。時折、巻き込まれたり、なんらかの局面で体が動くそんな瞬間があったりするだけである。今までは、自分が何をしたいか先送りにできていたが、そうした中でのかかわりには限界があるように思える。そこを詰めることが今後、僕が野宿者、そして「名古屋ネット」の活動や販売者とかかわる上で重要な鍵となる筈である。

今もそういう見方も変わりつつあると思うけど。

自分ひとりでは対処できないと思って、名古屋ネットメンバー（兼夜回りメンバー）に声をかけたりしていたが、結局、タイミングが合わず、その野宿者は姿を消してしまった。その後、別の野宿者が姿を目撃したというが、結局私自身は目撃しないままである。

## ■「ビッグイシュー」に出会う

2006年のある日、仕事の昼休憩中に大須商店街を歩いていた私は、雑誌を片手に掲げて立つ男性に出会いました。

画家の"奈良美智さん"の絵が印象的だったのですが、道端でよくあるフリーペーパーでも配っているのかと思いながら近づいて行きました。しかし聞けばその雑誌は"ホームレス状態の人たちだけが路上で販売する雑誌"?!とにかく素敵そうな本だったので、200円で購入してその場を離れました。

## ■ビビッと来た

雑誌の内容はおもしろくて満足。しかし内容以上に私が心惹かれたのは、路上での雑誌販売という仕事を創出するという仕組みにでした。なんてクリエイティブなんだろうと思いました。名古屋にもそういう活動をしている人たちがいたなんて・・・!路上生活をする方と接点を持つのも初めてでしたが、ビッグイシューに一目惚れした私はその日のうちに「ビッグイシュー名古屋ネット通信」のボランティア募集に応募するメールを送っていました(ボランティアの経験も無いのに!)

## ■とにかく手伝ってみたかった

その頃の名古屋ネットは、10人弱の支援者で運営していたでしょうか。何より日々の受け渡しを手伝ってほしいと言われ、何でもいからやってみたかった私は週に一日から数日、会社帰りに名古屋の事務所に寄って行くようになりました。

当時の私は20代で、仕事はぼちぼちやれるけどやっている内容がなんだか世の中にとって本当に必要なことなのだろうかとか悶々としていて、また私生活でもなんとなく孤独……。ニュースを見たりすればなぜか世の中にムカついてしまうような精神状態でした。今より若かった。未来が明るく無いような感じばかりしていた。自分が生きづらいと思っている社会の中で、とにかく手伝ってみたいと思ったのがビッグイシューの活動でした。

## ■名古屋ネットに参加してみた・・・

販売者さんたちと接するのがとても楽しかった。無意識に、自分より上の世代

の方たちと接することを求めていたのかもしれない。誰かと繋がりがかったのかもしれない。そしてだんだん他の支援者とも知り合って行きました。それぞれの人がそれぞれの哲学(美学?)で正しいと思うことをやろうとしているようなもので、名古屋ネットの規則的なこともそれぞれだし、悩んだり困ったりすることも多かった。でも人との繋がりが嬉しいし、やったことない経験をするのが楽しくて、名古屋ネットへの参加は続けていました。

そうして2年ほど活動に参加していましたが、今思えば貴重な体験の連続でした。何より、色々な出会いができたことを有り難く思います。みなさんから優しい気持ちをもらうばかりでしたが、今の生活がもう少し落ち着いたら、なにかまたおもしろいつながり方ができるといいなと思います。

販売者さん、みなさん、お疲れさまです。みんなみんな明日もぼちぼちいきましょ★

私がビッグイシュー名古屋ネット（以下名古屋ネット）でのボランティア活動に参加し始めて5年が過ぎました。現在活動の中では主に会計を担当しております。前任者から引き継いで約4年になりますが、名古屋ネットのみなさんに助けられながら何とかやっております。今回、名古屋ネットの5周年を記念したこの冊子を作るため、私が活動に参加した当初からこれまでを振り返ってみました。

2006年の冬、当時名古屋駅で販売していたHさんから初めてビッグイシューを購入しました。売場の前を通るたびにHさんはいつも腕を高くのぼし雑誌を掲げ販売していました。その実直でとてもひたむきな姿に強く心を打たれ、いつしか自分にも何かお手伝い出来る事はないかと思い始めました。そんな時、雑誌に挟み込まれていた通信（ニューズレター）でボランティア募集の記事を見つけ応募したのがこの活動を始めるきっかけでした。それまでは内戦後のアフリカ（特にルワンダ）の復興を支援している団体の活動を応援していましたが、国内の野宿者支援はもちろんのこと、実際の活動に参加するようなボランティアの経験はありませんでした。そんな私がビッグイシューのボランティアを選んだもう一つの理由は、その“しくみ”と雑誌そのものの面白さにありました。雑誌を買う事が直接目の前の販売者さんを支援することに繋がるという理解りやすさと、そして何よりも、一方的な支援ではなく、売り手と買い手という双方が尊重し合う関係にとっても興味を引かれたのです。

気軽な気持ちでボランティアに応募したものの、いったい私に何が出来るのだろうと、最初は不安な気持ちでいっぱいでした。しかし販売者さんへの雑誌の卸しや街頭での新人販売者さんの応援、イベント活動などに参加して行くにつれて、ボランティアとして参加する事の楽しさをおぼえていきました。特に雑誌の卸しのお手伝いは、販売者さん達との楽しいコミュニケーションの場です。みんながひっくり返りそうになるようなダジャレでその場を和やかにしてくれる販売者さん達との会話は、時間が経つのを忘れるくらいに楽しいひとときです。雑誌を買いに来てくださったお客さんからの嬉しい一言や、思いがけない差し入れを頂いた話などは、聞いている私まで心が温まる思いがしました。また、新人の販売者さんが初めて売り場に立つ日には、先輩の販売者さん達が販売を休んで応援に駆けつけてくれるなど、仲間として常に助け合っている姿にはいつも感動させられます。イベントのための準備・設営・後片付けなど、販売者さんと一緒に作業する時間や日頃顔を合わせる事の少ないボランティア同士が集う定例の毎月の会議も楽しい時間の一つです。花冷えのする鶴舞公園でのお花見、イベントの後の打ち上げなどの楽しい思い出もたくさんあります。

そんな活動の中で、当初からいつも感じるがあります。それは販売者さんの表情の変化です。どの販売者さんも、販売を始める前はとても警戒心の強い目をしているのですが、販売を続けるうちに少しずつ顔つきが明るくなり、会話も増えて行くのです。ビッグイシューを販売する事は、単に収入を得るだけでなく、接客を通して失った社会とのつながりを取り戻す機会にもなっているからだろうと思っています。一旦社会とのかかわりが途切れてしまうと、その関係を取り戻すのは今の日本のシステムではとても困難な事です。人は他者との関係の中でこそアイデンティティーを保つ事ができるそうですが、ビッグイシューはまさに販売者さん自身の社会的存在を取り戻す役割を持っているのだと考えます。そういう意味でも、ビッグイシューが担うその役割の重要性を、この活動に参加しながら深く考えるようになりました。

さて、私が名古屋ネットのボランティア活動に参加している5年の間に、販売者さんやボランティアの顔ぶれも、就職、転勤、留学、家族構成・生活パターンの変化などで随分変わってきました。5年前には全員ホームレスの状態だった販売者さん達ですが、今では6名中5名がアパート入居を果たすことができました。そのほか事務所の移転、販売者さんの突然の失踪や入院、仲間同士の考えのすれ違い等々、振り返れば悲しい事辛い事もいろいろありました。でも、問題を共に乗り越えて来た事で、ある種の信頼関係も生まれたように思います。今では一緒に活動する皆さんやこの活動がきっかけで出会った方々との繋がりがかけがえの無いものとなりました。

紛争、貧困、温暖化・・・と、地球上では常にさまざまな問題が起きています。海水温の上昇で氷が融け、珊瑚の白化が進み、熱帯雨林の違法伐採や紛争で緑が失われています。とりわけ紛争は平和を奪った上に多くの貧困を生んでいます。日本では昨年、東北地方で大地震が発生し、多くの方が犠牲になりました。同時に原発事故をも引き起こし、この国の将来に多大な影響を及ぼしています。もはや自分一人の力では成す術が無いような大きな問題が山積していますが、そんな状況の中で大切な事は、一人一人が考え、支え合い、必要な時にはともに行動を興す事ではないかと思っています。

2011年の今年の漢字にもなった「絆」。困難な状況にある時、人がもっとも必要とするのは人と人との繋がりであり絆だと、今あらためて感じます。

現在、名古屋ネットの活動にもまだまだたくさんの課題がありますが、ビッグイシューを応援して下さっている方々との繋がりを大切に、これからも新たな希望を抱いていろいろな事に挑戦していきたいと思っています。



最後に、これまで5年間応援して来て下さった皆さん、お世話になった方々に、あらためてお礼を申し上げたいと思います。

まずは、名古屋ネットを資金面で支えて下さっているワンコインサポーターの皆さんと定期的にカンパを寄せてくださる方々にお礼申し上げます。これまで活動を続けて来られたのはその皆様のお陰だと思っております。時には温かい励ましのお手紙をいただきとても勇気づけられました。

毎回雑誌を買いに来て下さっている方々には、販売者さんと共にこの紙面をお借りしてお礼申し上げます。売場でのお客さんとの会話は、販売者さん達にとってもっとも楽しみな事であり希望でもあるように思います。これからも売場に足を運んでくださいますようお願いいたします。

各イベントでもいろいろな方にお世話になりました。東海高校教諭の久田光政先生と東海高校・中学校の生徒の皆さんには年2回、貴校で開催される市民講座「サタデープログラム」に出張販売や講師として毎年参加させていただき大変お世話になって参りました。また、毎年夏に開催される雑誌「DAYS JAPAN」の写真展でそのサポーターの方々には、期間中のお出張販売に毎回お声かけいただき、販売にもご協力いただきました。本当にありがとうございました。

2008年4月の2周年記念集会にお越し頂いたコミュニティ・ユース・バンク momo の代表・木村真樹さん、2009年度の助成金事業にお越しいただいた笹島診療所の藤井克彦さん、ホームレス問題の授業づくり全国ネット代表の生田武志さん、北九州ホームレス支援機構理事長の奥田知志さん、漫画「カマヤン」の著者・ありむら潜さんにはお忙しい中スケジュールの調整をしていただきました。そして講演の中では大変貴重なお話を伺う事ができました。皆さんにあらためてお礼申し上げます。

過去に名古屋ネットのボランティアにかかわって来られた全ての方にもお礼を申し上げます。特に立ち上げ当初の苦労にはとても頭が下がる思いです。時に陰となり日なたとなって支えて下さった元ボランティアの皆さんに心から感謝申し上げます。またいつか一緒に活動できる日が来る事を願っております。

そしてこの冊子の作成にあたっては、忙しい仕事の合間を縫って編集をして下さったボランティアの石原明さん、他のボランティアの皆さん、原稿をお寄せいただいた方々にも厚くお礼申し上げます。

僕が、初めてビッグイシューを知ったのは、たまたま深夜にテレビを見て知りました。その番組はビッグイシューを取り上げていて、佐野代表が、熱く語っていました。僕は、その時 佐野代表に、会いたいと、自分でも不思議に思いますが、強く思いました。このテレビ番組がビッグイシューとの最初の出会いです。

そのテレビ番組から、2～3週間後、僕は、名古屋に買い物に出かけました、場所は 栄です、偶然ほんと偶然、僕はビッグイシューの販売者さんを、見かけました、僕は直ぐに販売者さんに向けより、ビッグイシューを、買い求めました、この時初めてビッグイシューを手に入りました。

僕は直ぐに本を開き読み始めました、とても読み応えのある雑誌で、夢中になって読みました、中にビッグイシュー名古屋ネット通信なる物があり、そこには、ボランティア募集と、書かれてありました。

僕は、真剣に2ヶ月～3ヶ月 考えて、考えて、決めました。名古屋ネットのボランティアに参加しようと。僕がボランティアに参加してから、直ぐにビッグイシュー名古屋ネットの2周年記念のイベントがありました。僕は客として参加しました。そこで2枚のプリントを頂きました。それはジョン・ホンギョさんからのメッセージと書かれてありました、素晴らしい文章です一部、抜粋します。以下抜粋。

「しかもBIは、単なる社会との窓口というだけではなく、実際の販売活動を通じて収益をもたらす起業活動としての仕事の特性を持っていることが、これをより立派なものに育て上げていることだと思っています。ホームレスの人々は仕事がいやで怠けているのでも、甲斐性がないからこのような生活を送っているのでもなく、包み入れる力を失ったこの社会の中心からいやおうなしに押し出されて来た方々です。彼らは、社会のメインの仕事から使い捨てられ（彼ら・彼女らのほとんどは、日本の高度成長期の際に立派な労働者としてこの国や社会を築いてきた方々でした）、今はセイフティネットという制度からも排除されたまま、その辺境にしか住む場を求められなくなっています。したがって、問われるべきなのは、実は彼・彼女らの方ではなく、その人たちを社会の辺境へと追いやった我々の社会の方だと思っています」2008年4月13日

如何でしょう、ホンギョさんの、お人柄が、うかがえます、なにをかくそうホンギョさんが、このビッグイシュー名古屋ネットを、立ち上げた、お方です。この2周年の時に、僕は、佐野代表と初めて、会いました、とても優しい目を、しているお方だなど、僕の第一印象は、そうでした。そして握手をして、少し話をしました。それから2周年のイベントが終わり、会場を、かたずけて、そのまま打ち上げ会場へ行きました。あの日のことは今でも覚えています、実に楽しかった。

ビッグイシューを、いつも買い求めてくれる、お客様や、自分の時間を削って、ボランティアに参加された方々、平成23年の10月に名古屋ネットは5周年のイベントを開催できました、これもひとえに、ビッグイシューに関わって頂いた、

皆様の善意の賜物です心よりお礼申し上げます。

しかしこれで終わりでは有りません、まだまだ5年、10年と未来があります。

今後も、皆様のお一人、お一人のお力が必要です、お力、お貸してください。

僕は、このビッグイシューの活動を、通じて色々な、フィールドで活躍されている方々と出会いました、みなさんとても素晴らしい人たちです。北九州で活躍されている、奥田牧師、全国ネットの会員の皆様、振り付けしのアオキさん有限会社ビッグイシュー日本代表の佐野さん、販売スタッフの吉田さん、そして、名古屋ネットの、素敵な仲間たちです。僕は出会いは偶然ではなく、出会う人に、出会うべくして出会う、必然だと思っています。

また名古屋ネットの販売者さんは、明るくて、面白く、お話が好きな人ばかりです、また笑顔が素晴らしいです、皆さん天使のような笑顔です。

#### 【今後の課題】

現在MLに登録している支援者約（大阪も含む）30名のうち、実際に活動に参加しているのは10名前後と少ないため、人材の確保と育成をおこなっていく必要がある。

また、販売者と支援者の信頼関係に脆弱な面があるのは否めない。今後はこの信頼関係構築の努力とその方法が重要な課題である。支援する側の都合や先入観を出来るだけ取り除き、販売者自らが何を欲しがってるかを丁寧に聞き取り、そこに寄り添うような支援ができればと考える。

「新しい風」のために「楽しく、おいしく、アットホームな」（問わず語りに本音が言い合えるような）関係、そして「クリスマスツリーのような灯り」でなく「灯台の灯り」を目指した活動をしていきたい。

まだまだ名古屋ネットには、問題が沢山ありますが、みんなで力を合わせて頑張っていきたいと思います、自分一人の我を無理やり通そうとすると、必ず失敗しますが、みんなで、一緒になつて、すべきことをすれば、必ずうまくいきます。

「道はどんなに、険しくても笑いながら歩いてこうぜ」です。

最後に、「名古屋ネットの歩み」小冊子を出版するのに、ご尽力された、ホンギョさんと石原さんに、心から、お礼申し上げます。（Y.M）

わたしは28歳の時に名古屋で働き始めてからはや4年ほど、ビッグイシュー名古屋ネットのお手伝いをさせていただいています。

ボランティアで「ホームレス」の方と接して最初に思ったのは「なぜ、こんなにきちんとした人が、仕事がなく野宿をしているんだろう?」ということです。大雑把な性格のわたしは、書類の書き方、お金や商品である雑誌の扱いについて、何度も「ホームレス」である販売者さんから注意を受けました。彼らの仕事は細かく、わたしなどよりもずっと丁寧でした。「こんな真面目な人が、なぜ…?」と思うと同時に、自分の中にある『ホームレスは、真面目であるはずがない。仕事はいい加減に違いない。』という偏見にも気づかされ、はっとしました。

活動の中で出会った販売者さんやホームレス状態にある何人かの方に「なぜホームレスになってしまったのか」をお聞きしましたが、人生の中ですごく変わった経験をしたとか、とんでもない大失敗をしてしまって…という方は少ないと感じました。誰にでも起こるようなちょっとしたアクシデント—例えば病気や怪我、会社の倒産など—がきっかけになって、仕事や住むところをなくしてしまう…これは、本当に誰にとっても関係する、明日自分が直面してもおかしくない問題であると思いました。しかも、家や仕事がない人と、ある人との間は紙一重で、失くすのは簡単なのに、もう一度取り戻そうとするとそこには大変高い壁が立ちただかるのだなあということにも気づかされました。

わたしは今、ビッグイシューに出会ったことをきっかけに、貧困の問題や福祉の制度に興味を持ち、通信の大学で社会福祉士の資格取得を目指して勉強をはじめました。

社会福祉士の勉強をしようと考えたのは、「ホームレス」や「貧困」の問題が、労働、就労、障害者、家族、教育、高齢者、医療、住宅政策、など様々な社会問題や政策の結果としてあらわれているものではないかと考え、それらについて広く知識を得たいと考えたからです。

依然として厳しい雇用や労働環境の中で苦しむ方が多い一方で、弱い立場にある人もともに助け合い、分かち合って生きていける社会の仕組みを作っていこうという人たちの取り組みが、ビッグイシュー以外にも見られるようになってきました。

他者を蹴落として多くを得ようとするような生き方でなく、弱い立場の人もそうでないひとにも広く受け入れ、ゆったりとつながり助け合えるような「ホーム」を一人でも多くの人々が持てる社会を皆で作っていききたい、自分も小さくてもその一助になりたいと考えています。自分にこのような機会を与えてくれた「ビッグイシュー」と「ビッグイシュー名古屋ネット」に本当に感謝しています。

## 壁

私が名古屋ネットに関わるようになったきっかけは、自分が関わっていたあるイベントで販売者さんにビッグイシューを販売してもらったことです。多分 2008 年の夏のことだったと思います。元々野宿問題に関心がありまして、ビッグイシューも知っていましたが、なかなか関わる余裕がありませんでした。そんな中、ちょうど 2007 年に名古屋に移ってきて街頭でビッグイシューを買うようになってから、販売者さんにイベントに来てもらって宣伝に役立ててもらおうと企画したのでした。この時受け渡しのボランティアが足りないということを知り、軽い気持ちで手伝うことにしました。

それ以来受け渡しを中心に関わってきましたが、支援者と販売者の間にある大きな壁を感じることもしばしばです。名古屋ネットの活動はこの壁と一緒に乗り越えていくことを志向しているわけですが、それは簡単なことではないということを感じ知らされてきました。単純化を恐れずに言うと、販売者側には野宿状態に伴う困難な問題がありますが、一方で支援者側にも過酷な労働条件といったようなまた違った問題があったりします。そして、それを双方が本当に理解できるかどうかというのは、簡単な問題ではないのかもしれない。

しかし、困難なことだけではなく、当然ながら良かったこともたくさんありました。名古屋ネットの特徴は、販売者と支援者を含めた個人間の距離がかなり近いことだと思います。喧嘩が多いのはそのよい証拠です（笑）。そういったメンバーの間で交わされるちょっとしたおしゃべりなどは、大きな楽しみです。また、自分が活動をしている間に、何人かの販売者さんがアパートに移ることができました。少しでもそのことに関われたのが、これまで活動してきた中で一番の喜びです。

問題の大きさから考えると今後もいろいろな困難が予想されますが、様々な人、団体と繋がりながら、みんなで一緒にこの高い壁を乗り越えていけたらと思います。

この原稿を書くにあたり改めて名古屋ネット内での自分の役割を考えさせられました。他の支援団体の人と関わると何故か私も販売者だと思われがちなのはご愛嬌で、実はフリーのグラフィックデザイナーを生業としているため毎月の「ビッグイシュー名古屋ネット通信」とイベント用のチラシの発行を担当しています。その他の仕事として強いて言うなら「火付け役」でしょうか。

私が名古屋ネットに参加したのはちょうど3年前、吹けば飛ぶようなフリーの私はリーマンショックでこりゃ暇になるぞ！と思っていた所、以前から買っていたビッグイシューのボランティア募集の「支援する側、される側ではなく…」が目にとまり参加。全くホームレス問題や貧困問題に知識がなく、申し訳ないくらい暇つぶしのつもりでした。

参加してみると慢性的な人手不足の極地で、ボランティアは皆かけずり回るように仕事をこなしていました。ホームレス問題に知識が豊富でありながら私達を温かく見守ってくれる人、母親のように販売者さんの話しに耳を傾ける人、いつも淡々と自分の時間を割いて受け渡しに入る人、何かあると遠方から車を飛ばして駆けつけてくれる人、名古屋ネットの支援者はすごいと感心させられるばかりでした。

しかし、本当にすごいのは支援者だけでなく販売者さんたちもすごい！自分で言うのも変ですが、火付け役の私は名古屋ネットの中でも何かと問題を起こしてばかりです。気のいいトミさんに些細な事で怒っては「ごめんね。」と謝らせてしまい、心配した木下さんやまささんが私をなだめすかして、トミさんに言い過ぎたと謝ると3倍返して優しい言葉をかけてくれます。トミさんはこんな私でも何かあるといつも心配してメールや電話をくれます。

また、おしゃべりのセンス抜群のまささんとの掛け合いは非常に楽しく、二人できつい冗談で笑い飛ばしながらのおしゃべりはとっておきのストレス解消法です。

いつぞやの会議では私がマジギレした事がありました。私が議事録を取るつもりで膝の上においていたノートパソコンを叩き壊して立ち上がった瞬間、腰の治療を続けている木下さんが反射的に立ち上がり私を止めようとした行動は、さすが兄貴！男性支援者も慌てて止めようとしてカニ歩き状態。怒った矛先の販売者はあまりの恐ろしさに椅子の背もたれに張り付いたまま顔を引きつらせていました。それでもその修羅場会議の後、当事者の販売者も支援者もそれまで以上に熱心に関わってくれるから不思議です。当の私はというと、その会議の様子を録画してyoutubeに流せば良かったとひたすら後悔。

こんな私なので名古屋ネットに役に立っているとは思えませんが、それでも販売者さんたちが居てもいいよと言ってくれるうちは存分に名古屋ネットを楽しませてもらおうと思っています。

僕がビッグイシューに出会ったのは、今から5年前の5月ぐらいでした。ちょうど名古屋ネットが発足した時期と同じです。それから読み始めてきました。

いろんな特集や記事があり、楽しい雑誌だと思い、なかには貧困問題もあり、深く考えさせられました。

意見のコーナーにも投稿しましたが、講読者だけではなく、ビッグイシューの何かに携わっていきたいと思いはじめました。3周年記念イベントで、ボランティアを募集しているのを知り、参加することにしました。

雑誌の受け渡しと、イベントでのスタッフなど、楽しみながら、販売者と同じ支援者と力を合わせてやっていくことに魅力を感じます。さらに貧困問題に関心を持ち、その関連の本を読んだり、反貧困のイベントにも参加したりしました。それまで知らなかった社会の現実を目の当たりにして、身を引き締める思いがします。

名古屋ネットは昨年5周年を迎えましたが、まだ認知していないこともあり、いろんな人たちに関心を持ってもらいたいと思っています。販売者と同じ支援者の支えになっていきたいです。

私がBINに参加し始めたのが2010年11月頃でした。

BINに参加する以前からビッグイシューの購読者だったわけではなく、街中で販売者の方を数回見かけたことがあるくらいで、そのときは怪しい雑誌を売っていると思っていました。また、ビッグイシュー自体ほとんど知りませんでした。そんな私がBINの活動に参加するようになったきっかけは、数年前、自分の知り合いが生活保護を受給しているということを知り、普通に生活していても何か1つでも不運なことが起こると180度その後の生活が一変していくのを目の当たりにしたからです。この知り合いの経験から生活保護制度に関心を持ち、それから色々調べていくうちに貧困やホームレス問題にも少し関心を持ちました。ただそこからすぐにBINの存在を知ったわけではありません。その時は、少し関心を持ったくらいで、何か行動に移すこともなく、自分には何もできないと思いながら、心の中でもやもやした気持ちだけが残っていました。そして、このもやもや感が薄らぎ、忘れかけていた頃にインターネット上でBINのことを知り、ボランティアとして参加させていただくことになりました。そこで初めて、ビッグイシューがホームレスに仕事を提供し自立を支援していて、私が見かけた街中で売っているあの雑誌は決して怪しい雑誌ではないということを知りました。

BINに参加する前まで、ホームレス経験者の方と直に話したこともなかったので、ボランティア活動の見学で、はじめてBINの事務所を訪問した時はとても緊張していました。また、色々質問したいことはあったのですが、どう話していいのかわからず、販売者の方にとってタブーな質問だったらどうしようか等、とにかく最初は探りながらお話していたと思います。しかし、販売者の方々はとてもフレンドリーに色々お話をしてくれました。

販売者の方々はお話好きだったり、シャイだったり、個性が強かったりなど、みなさんそれぞれ特徴があり魅力的な人ばかりです。それに身だしなみにも気を使っているしやるので、当初私が想像していたのとは違い、本当にホームレス経験者なのかと疑問に思うくらいでした。

そして、そんな販売者の方々との出会いから月日が経ち、受け渡し作業（販売者への雑誌の卸）やイベントへの出張販売を何度かお手伝いさせていただきました。イベントにもよるのですが、販売者さんと同じ売り場側に立って同じ目線で、通り過ぎる人



を見てみると、まだまだビッグイシューの認知度は低いのかと感じることがあります。私自身も BIN に参加する前は怪しい雑誌だと思っていましたので、その場をちら見程度で過ぎ去ってしまう人、こちらを不思議そうに見ている人、買うのを躊躇している人たちの気持ちが少なからず理解できます。もちろん温かいお客様もいらっしゃるのですが、実際に販売者さん側に立つと、そういった通り過ぎる人々の視線がとても気になるなど感じ、ビッグイシューの販売は自分がホームレス経験者であることを明かすとても勇気がいることだと思いました。そのような勇気あることを暑い日も寒い日も売り場に立ち続ける忍耐力、そしてお客様とのつながりを大事にされている姿勢など、販売者の方々から学ぶことはとても多いです。

私が BIN にボランティアとして参加して 1 年余りが過ぎました。

最初はビッグイシューやホームレス問題等について知識や経験がない私でも大丈夫かなという不安がありました。こんな私でも BIN のみなさんから多くを教えていただきボランティアさせていただいています。

この 1 年余りの間に日々の受け渡しや各イベントに加えて BIN の 5 周年イベントがあり、またその中で販売者と支援者の意見が折り合わず、ぎくしゃくした関係性やこちらからはららするようないかに発展してしまうなど、素晴らしいことだけでなく今後の課題や反省すべきことも多く見受けられました。それと、ビッグイシューの販売は雨や雪の日など悪天候時は販売を中止せざるを得ないので、悪天候時の対策など今後考えていかなければいけないことが山積みです。

私が貢献できることは微々たるもので、ベテラン支援ボランティアの方々とは比べると、まだまだ知識や経験など足りないことばかりですが、今後も微力ながら BIN の活動に携わっていきたいと思っています。

ビッグイシューを知ったきっかけは、炊き出しの時に、友達（ボランティアの人）からの紹介でアルバイトを、進められたのが切っ掛けです。

ボランティアの人でも、悪い人がいるから気をつけてと、言われました。

本の受け渡しの時に入って感じたことは、色々な考えの人がいる、と感じました。

又、問題点は、受け渡しに入ってくれる人が少ない、受け渡し表が埋まらない。

受け渡しに入って、良かったことは、みんなが、話してくれる、こちらからも話して話が盛り上がり楽しい会話ができる。

いままで色々な仕事を、して来ましたが、みんなと一緒に飲みに行くのが一番楽しい。

三重県出身で15歳で名古屋に出てきました、仕事で色々な所に行きましたが今は名古屋で、住んでいます、過去には路上で寝たこともありました。

これからも、ビッグイシューの受け渡しを、していきたいです。

私は、ビッグイシューについて何も知りませんでした。雑誌だということも、ホームレスの人しか売れないということも。何も知らないまま、この団体に入ってきました。

ビッグイシューの活動を始めたのは、偶然インターネットの Web サイトで見つけたからです。大学の単位取得のためにさまざまなボランティア活動をしており、ビッグイシューもその中の1つでした。ビッグイシューの紹介文を読んだとき、野宿やホームレスという言葉を目にしても、不思議と抵抗感がありませんでした。かといってホームレスに好印象を抱いていたわけではありません。しかし、すごく気軽な気持ちで活動に参加しようと思ひ立ちました。

初めて事務所に向かう道のりで、私はすごくディープな世界に足を踏み入れようとしているのではないかと感じていました。なぜなら事務所のすぐそばには繁華街があったからです。その繁華街が私にとってはディープな印象で、この街を抜けると、やばい世界が広がっているのではないかと想像してしまいました。実際は、繁華街を抜けるとひっそりとした住宅街で、拍子抜けしました。

事務所に入ってから第一印象は、どなたがホームレスですか?でした。事務所には、3人の支援者と販売者が1人いましたが、私の想像のホームレス姿に合致する人がいなかったのが、衝撃でした。においがきつくて、服もぼろぼろで、髪の毛もぼさぼさ、を想像していたので呆気にとられてしまいました。たまたまその野宿者は違っただけかもしれませんが、ホームレスに対する意識が変わったきっかけでした。ビッグイシューを一から説明してくれたのが、その販売者でした。とても分かりやすく説明してくれ、大変しっかりされていたので、本当はこの人支援者なんじゃないの?と思った記憶があります。

活動当初は、先輩支援者に、どうしてこのボランティアを始めたの?と聞かれるたびに、気まずさと申し訳ない思いでいっぱいでした。みなさん、ホームレス問題に対して自分なりの熱い思いがあり、そんな方に大学の単位のために・・・などというのは、恥ずかしい思いでした。

現在は、単位とは関係なく活動しています。なぜ活動を続けているのか。単純に楽しいからです。支援とかよく分かりません。何が支援なのか、自分が行っていることは支援なのか。楽しいことばかりではありませんが、販売者との会話や事務所から見える景色は日々考えさせられます。私は受け渡し業務をメインでやっていますが、もうこれは私の趣味になってきています。

シモリンこと下平さんはまだ名古屋ネットのスタッフとして参加して1ヶ月程度。いきなりの冊子の発行にあたり1ページ分何かを書けと言われて、困り果てた様子だったので、友人でもあり名古屋ネットに引き込んだ私（石原明）がいろいろ加減な聞き取りをして簡単にまとめてみました。

●ビツイシューを知ったのは？

以前は東京で暮らしていて、街のあちこちで販売者さんを見かけていました。ただ路上で雑誌を売っている人とはしか見ていなくて、本を読むのは好きなので特集の内容に興味があっても何となく近寄りがたい気がして買った事はなかったです。その頃はこの人から買わなくてもどうせ本屋で売っていると思っちゃってましたね。ビッグイシューがホームレス経験のある人しか売れない雑誌で、本屋には売っていないと知ったのは名古屋に来てからでしたが、どこに行けば売っているのかも知らずにいました。

●受け渡しに入って、苦労や楽しみは？

最初に受け渡し練習3回をやってみました。意外にやる事や細かい決まり事が多くて戸惑うばかりでした。慣れるまでにベテラン支援者さんに教えてもらってばかりで今でも分からない事があります。できる事なら仕事を終えて仕入れに来てくれる販売者さんのためにもくつろいでもらいたいとか、一緒におしゃべりを楽しみたいと思うのですが、その余裕がまだ無いような気がしています。まだ、受け渡しでは会っていない販売者さんもありますが、販売者さんとのおしゃべりがとても有意義です。

●これからやっていきたいと思う事は？

自分もそうでしたが、ビッグイシューを知っている人たちだけでなく、ビッグイシューって何？と全く知らない人たちへのPRを考えていきたいと思います。例えば看板に大きく「本屋では売っていない雑誌」とか、アピールをして雑誌の付加価値を通りすがりの人たちにも知ってほしいと思います。

シモリンは既に販売者さんにもスタッフの間でも人気者なので、無理をしないで細く長く続けてもらえるとありがたいです。

ビッグイシュー名古屋ネットの市民ボランティアと販売員の皆様、毎日の販売活動お疲れ様です。2006年4月15日にJR名古屋駅前での販売が始まってらまもなく6周年ですね。本当におめでとうございませう。販売開始から今日に至る名古屋ネットの皆様様の街頭での販売と支援活動に心から感謝と敬意を表します。

私は新聞社の報道カメラマンとして、2003年9月に大阪での創刊時からビッグイシューの取材を続けていました。05年秋に赴任した名古屋も大阪、東京、神奈川に次ぐ全国有数にホームレスが多い地域であり、ホームレスの人たちが仕事をしてアパートで生活し、経済的に自立するためにも、早くビッグイシューが名古屋で販売されないかと切望しておりました。それから半年後、名古屋での販売が開始され、微力ながら販売開始や販売開始後1年の現状などを報道させていただきました。

ビッグイシュー名古屋ネットの最も素晴らしい特色は、販売員を支援する組織として全国で初めてスタッフが全て主婦や会社員、学生などの市民個人のボランティアによって運営されている点です。ビッグイシューは2012年2月現在、全国14都道府県で販売されていますが、他の支援組織は有給の専門職員を置いたり、既存の野宿者支援団体などに販売支援を委託したりしているケースがほとんどですが、野宿者支援の経験もない市民個人が互いに仕事や家事で忙しい中、連絡を取り合い、できるだけ毎日誰かが事務所に詰めようとスケジュール調整をして販売員に雑誌を卸したり、6年間も様々な支援を行い続けてきたビッグイシュー名古屋ネットの皆様には本当に頭が下がります。社会的弱者や地域社会を市民の力だけで支える市民ボランティアの理想の姿がここにあると思います。

トミさん、林さん、マサヤンさんから販売員の方々もお元氣でしょうか？河合さんは病氣が治られましたでしょうか。月2回送られてくるビッグイシューの最後のページにある販売場所一覧を見るたびに、皆さんが元氣に販売されているかどうか心配になります。

昨年5月、都合で残念ながら名古屋を離れ、神奈川県川崎市に移り住み、東京で仕事をしております。名古屋を去る際、仕事と引っ越しで忙しく、きちんと名古屋ネットの皆様にもご挨拶できませんでした。それにも関わらず、今だ皆様と関わりを持たせていただいていることに感謝いたします。今後何か会合などがございましたら、是非参加させていただきたいと思ひます。また何か名古屋ネットに関することで私にお役に立てることがございましたら遠慮なくご連絡ください。今後とも何とぞよろしくお願ひいたします。

ボランティアのメンバーとしてビッグイシュー名古屋ネット（BINN）に関わりはじめて一カ月。ビッグイシューの魅力をキーワードで表すとすれば、「つながり」と「笑顔」ではないでしょうか。

人は様々なつながりの中で生きています。親族、友人、地域、職場、趣味のコミュニティなど様々なグループに属し他者とつながり、「居場所」を持っています。また、住居と住民票があれば、公的な社会サービスとつながり、サポートが受けられます。しかし、ホームレス状態になると他者や社会とのつながりが切れ排除されていくことが一般的です。

その中で、ビッグイシューは仕事を媒介につなぎをつくる（再接続する）役割を担っています。もちろん、この事業は「ホームレスの仕事をつくり自立を支援する」ことが目的ですが、仕事の提供以上のものを含んでいます。まず、路上から販売者になる段階で、BINNのボランティアメンバーとのつながりを持ち、住居を借り生活保護を申請することにより社会とのつながりが復活します。そして、ビッグイシューの販売を始めると、お客さんとのつながり、販売者同士のつながり、ボランティアメンバーとのつながりが深まっていきます。それが販売者の居場所をつくり、生活の活力を生み出すと思っています。他方、ボランティアメンバーも、販売者とのつながり、ボランティアメンバー間のつながりを深めることにより、一つの居場所ができ、人生が豊かになるのではないかと考えています。

そして、このつながりを深める潤滑油として笑顔があると思います。ボランティアのメインのタスクである仕入雑誌の受け渡しに入ると、販売者の方々は寒い中外で販売して疲れているはずですが、必ず笑顔を見せてくれます。その笑顔にボランティアである私も元気をもらっています。また、出張販売に参加して確信したのですが、その笑顔の裏側には、ビッグイシュー販売者としての誇り・自信、事務所が居場所のひとつとして認識されていることなどが垣間見れます。このような裏付けのある笑顔がさらにつながりを広げ深めていくのだと思います。

笑顔でつながる BINN にこれからも仲間として参加していきます。どうぞよろしくお願いたします。

名古屋にビッグイシューが紹介された新聞記事をご紹介します。

# 路上生活にピリオド



商品の出稼業をやるビッグイシューの元販売員 東京品川区で

今年1月、2人の元ホームレスが「社会復帰」を果たした。ホームレスの自立を支援する雑誌「ビッグイシュー・ジャパン」の販売員だ。路上生活からの脱出を目指すという理念を掲げて創刊されて3年。ようやく実現した「再就職」は、厳しい現実にとさらされながら就職活動に苦戦する路上生活者たちの光明となっている。(中山 洋子)

## 自立支援雑誌 創刊3年

五代男性と女性に二月に採用された。午前九時から午後六時まで、倉庫での商品管理が仕事だ。就職から一月以上、無差別無欠勤を続けている。月10万円の販売収入。元販売員は「ビッグイシュー」の信頼を損なうほどではない」と自信満々だ。二十一年にわたる活動が首都圏の企業を退職したのは、二〇〇三年六月ごろ。キャンセルと飲

「最初は横文字の商品名を覚えられなくて迷子に暮らした。品川区勝沼にある倉庫で、ビッグイシューの元販売員男性がアロマオイルなどを販売する話めながら就職した。再就職先は、全国で英国式リフレクソロジー(足裏マッサージ)のサロンなどを運営するR.A.J.A. (本社・東京都中央区)。首都圏では初の再就職で、やはり販売員だった

## 元ホームレスの再就職実現



元販売員が再就職が決まった。東京品川区の新しい宿舎で

み食いが過ぎて借金がかさみ退職金を返済した。一技も術無かったが、すぐに再就職できると思っていた。今かかへる元は随分目かいたと振り返る。会社員当時「月に来いよ」と再三誘われた会社は見放された。家賃を払えなくなり、同年十一月「路上」に逃げた。J.R.新宿西口で路上生活を始めてすぐに全財産三万円は尽きた。寒さと腫れた

「日記に「死」の文字が増えた。明日死のこの覚悟を決めた。明日「ビッグイシュー」に出かけた。最初の出先は西口公園で、販売開始に向けた説明会があった。ギリギリのタイミングで、ビッグイシューに助けられた。最初の約二ヶ月間は新宿J.R.渋谷駅前での雑誌販売だった。通年午前十一時から夕方まで、毎月二日と十五日の発行日は午前六時から取組に立った。二百万のうち百十が収入。月に平均十万円を稼いだ。

「仲間」に希望を与える。初め「社会復帰」は、就職活動をする現役販売員らにも勧めた。「ホームレスに対し「なまけ者じゃないか」という偏見は根強い。実際社会復帰を定めたホームレスも少なくない。路上生活が長いほど一般社会で探すための不安は大きくなる。それでも、頑張っ

「仲間」に希望を与える。初め「社会復帰」は、就職活動をする現役販売員らにも勧めた。「ホームレスに対し「なまけ者じゃないか」という偏見は根強い。実際社会復帰を定めたホームレスも少なくない。路上生活が長いほど一般社会で探すための不安は大きくなる。それでも、頑張っ

「仲間」に希望を与える。初め「社会復帰」は、就職活動をする現役販売員らにも勧めた。「ホームレスに対し「なまけ者じゃないか」という偏見は根強い。実際社会復帰を定めたホームレスも少なくない。路上生活が長いほど一般社会で探すための不安は大きくなる。それでも、頑張っ

## TOKYO発

「ビッグイシュー」1991年に英国で始まったホームレス自立支援を促す雑誌「日本版」は2003年9月に大阪で創刊され、同月号から東京でも販売開始。現在、全国で展開され、英国版から毎月発行。日本では4万部。購読者の7割が20代を中心とした女性という。

再就職は、はからずもあきらめていた。社会から身を離した。大阪にあって、身元を告白しなければならぬ就職活動は、心理的なハードルが高かったからだ。だが、ビッグイシューを通して、元路上生活者の数人に仕事を提供しようというR.A.J.A.の話し合いで再就職が決まった。元販売員が再就職が決まると、元路上生活者も「頑張ったかい」と喜ばれた。「ほんどが名前も知らない人ばかりで、でも買って買ってくれた」と振り返る。

ら、路上生活をつづる真色の販売員だ。週二日、新宿の高齢者職業紹介所に通い、かつて携わっていた土木費を中心に再就職先を探している。「やれやれな仕事がないか」と探している。ビッグイシュー・日本・東京事務所には、東京周辺の販売員は約五十人。このうち二十人前後が現在、都の支援策などを利用して住宅を確保し就職活動を行っているという。だが大半が五十代以上で、それも求人はいまも少ない。それに、販売員らの再就職に、同誌広報担当の山崎千加子さんは「頑張る社会も認めてくれる」と希望になる」と期待を込めながら続けた。

「ホームレスに対し「なまけ者じゃないか」という偏見は根強い。実際社会復帰を定めたホームレスも少なくない。路上生活が長いほど一般社会で探すための不安は大きくなる。それでも、頑張っ

「ホームレスは昨年6月現在、1036人で、大阪、東京に多い。

### ホームレス自立支援の英雑誌 名古屋でも路上販売

15日から

万部超が販売された。販売するのは、ホームレスの阪口仁範さん57から3人。1冊200円で、ホームレスが販売員収入となる。J.R.名古屋駅前と、中央区松坂屋本店前の路上で販売するが、阪口さんは「売上の人が続けば、頑張りたいと話している。市見グループ「ビッグイシュー」名古屋ネットが支援する。市によれば、市内の

「ビッグイシュー」1991年に英国で始まったホームレス自立支援を促す雑誌「日本版」は2003年9月に大阪で創刊され、同月号から東京でも販売開始。現在、全国で展開され、英国版から毎月発行。日本では4万部。購読者の7割が20代を中心とした女性という。

「ビッグイシュー」1991年に英国で始まったホームレス自立支援を促す雑誌「日本版」は2003年9月に大阪で創刊され、同月号から東京でも販売開始。現在、全国で展開され、英国版から毎月発行。日本では4万部。購読者の7割が20代を中心とした女性という。

2006年4月3日 (中日新聞)

2006年4月3日 (読売新聞)

### 英国で創刊 ホームレス自立支援オピニオン誌

## 「ビッグイシュー日本版」名古屋で発売へ

路上生活者（ホームレス）の自立支援のため、10都市の約80人の版者が販売されているオピニオン誌「ビッグイシュー」が15日から名古屋で販売される。同誌は、路上生活者自身が販売し、収入を得る仕組みで、当面3人でスタートする。12日、路上生活者の男性（57）が、同誌の男性（57）が、同社役員で会いし、「後に続く人現れて」自身で販売3人でスタート15日から

「後に続く人現れて」  
自身で販売  
3人でスタート  
15日から

路上生活者（ホームレス）の自立支援のため、10都市の約80人の版者が販売されているオピニオン誌「ビッグイシュー」が15日から名古屋で販売される。同誌は、路上生活者自身が販売し、収入を得る仕組みで、当面3人でスタートする。12日、路上生活者の男性（57）が、同社役員で会いし、「後に続く人現れて」自身で販売3人でスタート15日から



2006年4月3日（毎日新聞）

## ホームレス自立を後押し

### 「雑誌販売」の仕事を提供

「ビッグイシュー」15日デビュー  
路上生活者（ホームレス）の自立支援のため、10都市の約80人の版者が販売されているオピニオン誌「ビッグイシュー」が15日から名古屋で販売される。同誌は、路上生活者自身が販売し、収入を得る仕組みで、当面3人でスタートする。12日、路上生活者の男性（57）が、同社役員で会いし、「後に続く人現れて」自身で販売3人でスタート15日から



そば店開業の65歳も

### 名駅、栄の路上で

路上生活者（ホームレス）の自立支援のため、10都市の約80人の版者が販売されているオピニオン誌「ビッグイシュー」が15日から名古屋で販売される。同誌は、路上生活者自身が販売し、収入を得る仕組みで、当面3人でスタートする。12日、路上生活者の男性（57）が、同社役員で会いし、「後に続く人現れて」自身で販売3人でスタート15日から

2006年4月10日（名古屋タイムズ）



定価200円、うち110円が収入に

# ホームレス支援誌 「名古屋でも」

ホームレスの自立を支援する雑誌「ビッグイシュー」。ホームレスだけが販売でき、定価200円のうち110円が収入になる。03年9月に大阪で日本語版が創刊され、その後、東京、横浜、仙台などへ販売の輪が広がっている。その雑誌を名古屋でも定着させようという取り組みが始まった。3日には名古屋市内で説明会が開かれた。  
(宮沢崇志)

## 日本語版「輪」広がり期待

カラーの表紙を正面へ「ですか」って言うんで、売員たちが編み出したと向け、その手を高く上へす。ビッグイシューという雑誌の売り方を紹介する。大きな声で、本の代表の佐野章二さん「ビッグイシューいかが（64）が、ホームレスの販す。でも、なしみのお客



さんが付けば励みになるものですよ」

ビッグイシューは91年、英国で生まれた。ホームレスの人たちに収入の道をめぐり、自立を支援する。03年には大阪で日本語版が創刊された。

販売員に登録できるのはホームレスだけ。販売員は1冊90円で仕入れ、雑誌を街頭で定価200円で売る。差額の110円が収入になる。

現在までに特号が発行され、佐野さんによると、合計で約1,300万冊が売れたという。1億4

「高く掲げ、大きな声で」。雑誌の売り方を紹介する佐野章二さん（名古屋市中区の名やポラ）「ナイ

千円ほどだがホームレスの人たちの収入になった計算だ。名古屋での説明会を企画したのはホームレスの安全を守る後回りの活動などをしている「野宿労働者の人権を守る会」。メンバーの大竹良平さん（33）は「仲間たちが食べていく道を積極的に考え、てみようという気持ちが高まった。保守的な名古屋の地で売れるのだろうか」という心配もあるが、雑誌の認知度が上がった今なら、と佐野さんに来ていただいた。

この日、説明会に参加したのは十数人。ホームレスの男性2人も熱心に話を聞いた。57歳の男性は「アルミ缶集めもしんどい。だから半分は乗り

気。心配なのは人見知りなので、買ってもらって「ありがとう」と言えるか。嫌がらせがないなら、僕としてはやりた

い」と話す。実際に販売を始めるには、雑誌の仕入れの窓口や販売員の支援など、名古屋での体制づくりも必要だ。大竹さんたちは、ビッグイシューを支える会の設立を検討しているという。

ビッグイシューの収支は赤字が出ているのが現状だ。佐野さんは「専門家に100%失敗すると言われながら、5年5カ月

続けてきた。名古屋でも発売できることになれば、活動もようやく地に足がく」と期待を込めて話している。

2006年4月(?)





# 野宿生活脱出「次は仲間のために」

名古屋・栄の交差点。買い物客らが行き交う雑踏で、橋本高志(55)は毎日、雑誌「ビッグイシュー」を販売する。音楽、ファッションなどの話題を集めた情報誌だ。

「ホームレスに仕事を」と英国で創刊され、3年前に日本語版が発刊された。1冊200円で、販売員は全員ホームレス。売れば110円が手に入る。橋本も今月初めまでは、公園で寝泊まりする一人だった。

仙台で生まれ、高校を出てアルミ加工会社に就職した。19歳で結婚、3人の子供をもうけて25歳で独立。軌道に乗ると、飲食店経営にも手を広げた。

事業は順調だったが、気の弱い性格が災いして、人につけ込まれるなど人間関係のトラブルが絶えなかった。我慢を重ねた妻は、やがて愛想を尽かして出ていった。

48歳で単身東京、事務の仕事に就いたが、ここでも人間関係のトラブルに見舞われた。人が信じられなくなり、身も心も疲れ果てて仙台に戻った。

だが、54歳の橋本に仕事はなく、住む家もなかった。サウナや漫画

喫茶を泊まり歩く金も底を突き、気づいた時には公園がねぐらになっていた。

ある朝、公園のトイレの鏡で自分の顔を見た。そこに映った情けない顔を見て決心した。「このままではいけない、やり直そう」必死に仕事を探した。住居も資格もない橋本でも、できる仕事の一つだけあった。それがビッグイシューの販売だった。

物を売るのは初めてだったが、なにより構わず働いた。毎日街頭に立つと、徐々に常連客ができた。月平均1000冊を売ることがになり、10人いる仙台の販売員の中でトップになった。昔の自分を取り戻したようで、誇らしかった。

今年4月、名古屋でもビッグイシューの販売が始まると、橋本は仙台を離れる決意をした。名古屋は「未知の土地」だったが、響気が良く、何のしがらみもない土地の方が、人生をやり直すのに好都合と、下した結論だった。

ホームレスが街頭に立つことを、快く思わない人がある。避けるように歩く人もいる。橋本は特に身なりに気を使い、売れるたびに「ありがとうございます」と大

きな声で礼を言う。

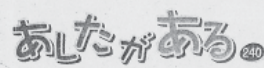
次第に常連客がついて、月に約700冊を売ることがようになった。「友達の間も」といって、数冊をまとめ買ってもらえる人もできた。

この仕事で稼いだ金で、名古屋市内にアパートを借り入れた。1ルームでお風呂はないが、野宿生活と比べると比較的に快適さと安心感を手に入れた。

「自分が変われば生き方も変わる。生き方が変われば人生も変わる」が橋本のモットー。ホームレスからの脱出を果たした次の目標は、仲間を支援するための活動を続けることだ。(敬称略、天野雄介)



路上のビッグイシューを販売する橋本高志



2006年(?)11月19日(読売新聞)

## 雑誌「ビッグイシュー」販売1年

# ホームレス自立

# 支援の輪広がれ



街頭に立ち、ビッグイシューを掲げて販売するホームレス=中区で

ホームレスの人たちの自立支援を目的とした雑誌「ビッグイシュー」の販売が市内で始まってから、十五日で二年を迎える。ホームレスの販売員も支援者も増えつつあるが、他都市に比べて市民の認知度はまだ低く、軌道に乗りに乗るにはまださらなる努力が必要だ。十四日には支援の輪を広げようとする周年記念のイベントが開かれる。(斎藤健太郎)

一九九一年に英国で生まれたビッグイシューは、国内では〇〇三年に大阪で研究する日本福祉大COEを設立。昨年四月に販売員日本版が創刊。世界各版の主任研究員の兼査査(シラ)三入、支援者十人の連携で著名人インタビューや社会・ホンキョウ(シラ)さん、スタートした。問題掲載し、一冊二百円が夜回り活動をしてきた会、販売員のホームレスは現在六人に増え、支援者も十

### あす記念イベント

五ほどに、販売場所も当初の栄や名駅から、大須や伏見に広がった。街頭販売のお得意さんをつかみ、アルバイトに入居、職に就いたバックナンバーの販売イベントが当たる抽選会、交流の売り上げには、上流会を予定している。問い合わせは、電話090-0340308、034030877へ。

### 販売員の認知度向上へ試行錯誤

たのが多かった。これも身なりがきれいにするように心がけていたが、男性は温かかった。この分野は今では、支援する側に回っていた。日々雑誌の受け渡しをする支援側の人手確保や、雑誌を保管する事務所や、費用負担といった課題も多い。名古屋ネットでは独自に通信販売を発行して販売員の声を紹介したり、全スタッフが講演会などに出掛けたり、認知度アップの試みをする。ビッグイシューは、単なるホームレス支援だけではなく、既存制度では対応しきれない社会問題、市民の力で解決する新しい手法であることを多くの人に知ってほしいと、三入は言う。イベントは午後三時から、中区千代田の日本福祉大名古屋キャンパス北館八階で、参加無料。ビッグイシュー日本の佐野重代表の講演や販売員の体験談の講演や販売員の体験談の講演など予定している。

2007年4月13日(中日新聞)

街頭でビッグイシューを販売する河合淳次さん(名古屋市中区)



# ホームレス支援雑誌

# 「ビッグイシュー」販売定着道半ば

## 名古屋でスタート1年

# 知名度アップ急ぐ

ホームレスが路上で販売し、その収入を元手に自立を目指す雑誌「ビッグイシュー 日本版」の販売が名古屋でスタートして十日で二年。新しい仕事につき、路上生活からの卒業生を送り出す一方で、販売量増やす路、生活者も少なない。ボランティアの支援団体は一周年を機にイベントを開催、販売場も拡大する知名度アップに力を入れている。

「ビッグイシュー」を前面に打ち出す一方、ホームレスの自立支援を目的とした「ビッグイシュー」の興味が高い社会問題も、〇〇年九月に創刊された。二十三年の創刊がターゲットで、国内外の有名映画俳優やアーティストを表紙に採用し、エンターテインメント色

「ビッグイシュー」は、約二年前、長年勤めた東京のビル管理会社を辞めて故郷の仙石に戻り、だが仕事は見つからず、貯金はすぐに底をついた。後ろめたさから実家にも帰れず、路上生活を

「ビッグイシュー」は、約二年前、長年勤めた東京のビル管理会社を辞めて故郷の仙石に戻り、だが仕事は見つからず、貯金はすぐに底をついた。後ろめたさから実家にも帰れず、路上生活を

「ビッグイシュー」は、約二年前、長年勤めた東京のビル管理会社を辞めて故郷の仙石に戻り、だが仕事は見つからず、貯金はすぐに底をついた。後ろめたさから実家にも帰れず、路上生活を

「ビッグイシュー」は、約二年前、長年勤めた東京のビル管理会社を辞めて故郷の仙石に戻り、だが仕事は見つからず、貯金はすぐに底をついた。後ろめたさから実家にも帰れず、路上生活を

「ビッグイシュー」は、約二年前、長年勤めた東京のビル管理会社を辞めて故郷の仙石に戻り、だが仕事は見つからず、貯金はすぐに底をついた。後ろめたさから実家にも帰れず、路上生活を

「ビッグイシュー」は、約二年前、長年勤めた東京のビル管理会社を辞めて故郷の仙石に戻り、だが仕事は見つからず、貯金はすぐに底をついた。後ろめたさから実家にも帰れず、路上生活を

ホームレス問題で専門家の講演聞く  
愛知部落解放人権研  
NPO法人愛知部落解放人権研究会の定例の研究会が二十六日、名古屋市中区新栄の文化センターであった。会員ら約二十人が参加し、ホームレス問題について専門家の話に耳を傾けた。日本福祉大COE主任研究員の全敬香さんが講演役となり、「名古屋のホームレス運動のかかわり」と題して講演。ホームレスの人たちが経済的自立を目指して販すした。

2007年3月27日 (中日新聞)

無職 清水 悦子  
(名古屋市中区 2区)  
ホームレスの自立を支援する雑誌「ビッグイシュー」日本版の売れ行きが芳しくないという聞き、残念でならない。  
1冊200円、1冊売ると100円が販売費のものになる。1999年、ロンドンでホームレスに収入の機会を提供する事業として始めた。  
映画、音楽、本の紹介と多分野にわたる豊富な誌面  
「ビッグイシュー」が、福祉の援助もあり、ホームレスから脱却してアルバイトに移れることができたのは本誌がきっかけだった。買うという行為が、自立の第一歩だった。事務所確保のため、フロンティアサポーターにも登録した。  
名古屋で販売を開始して1年、自立への道はついになるよう定着を願っている。  
そのためには、名駅や栄などの繁華街で販売を見かけたら、声をかける人が広がりまわらなければならない。

2007年5月10日 (朝日新聞)

「ビッグイシュー」日本版の販売部数は、月約二千部前後。一冊二百円で、一冊売ると販売費に百円が入る仕組み。自立生活には一日五十冊程度の販売が必要とされるが、一日二十冊程度の販売が多いという。「知名度が不足し、売り上げが伸び悩んでいる」という理由だ。

「ビッグイシュー」は、約二年前、長年勤めた東京のビル管理会社を辞めて故郷の仙石に戻り、だが仕事は見つからず、貯金はすぐに底をついた。後ろめたさから実家にも帰れず、路上生活を

「ビッグイシュー」は、約二年前、長年勤めた東京のビル管理会社を辞めて故郷の仙石に戻り、だが仕事は見つからず、貯金はすぐに底をついた。後ろめたさから実家にも帰れず、路上生活を

「ビッグイシュー」は、約二年前、長年勤めた東京のビル管理会社を辞めて故郷の仙石に戻り、だが仕事は見つからず、貯金はすぐに底をついた。後ろめたさから実家にも帰れず、路上生活を

「ビッグイシュー」は、約二年前、長年勤めた東京のビル管理会社を辞めて故郷の仙石に戻り、だが仕事は見つからず、貯金はすぐに底をついた。後ろめたさから実家にも帰れず、路上生活を

2007年4月14日 (日本経済新聞)

# 「ビッグイシュー」 自立伸び悩み

## 名古屋で1年 販売低迷



名古屋に新聞販売の仕事、日誌冊を売って生活するホームレスの人たちが街頭で販売する雑誌「ビッグイシュー」1年間の販売が伸び悩んでいる。4月で1年が経ち、販売は全体的に低迷し、自立したホームレスの数が、多くの販売員は継続の恐れを抱き、野宿生活から引き退いた。販売員は「ビッグイシュー」を「生活の救済」ではなく、単なる「生活の支え」の役割に留まっていると嘆息を漏らしている。（小山佳）

# 野宿生活抜け出せぬ人も

名古屋に新聞販売の仕事、日誌冊を売って生活するホームレスの人たちが街頭で販売する雑誌「ビッグイシュー」1年間の販売が伸び悩んでいる。4月で1年が経ち、販売は全体的に低迷し、自立したホームレスの数が、多くの販売員は継続の恐れを抱き、野宿生活から引き退いた。販売員は「ビッグイシュー」を「生活の救済」ではなく、単なる「生活の支え」の役割に留まっていると嘆息を漏らしている。（小山佳）

名古屋に新聞販売の仕事、日誌冊を売って生活するホームレスの人たちが街頭で販売する雑誌「ビッグイシュー」1年間の販売が伸び悩んでいる。4月で1年が経ち、販売は全体的に低迷し、自立したホームレスの数が、多くの販売員は継続の恐れを抱き、野宿生活から引き退いた。販売員は「ビッグイシュー」を「生活の救済」ではなく、単なる「生活の支え」の役割に留まっていると嘆息を漏らしている。（小山佳）

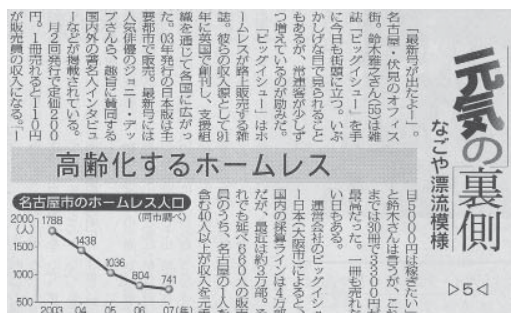
名古屋に新聞販売の仕事、日誌冊を売って生活するホームレスの人たちが街頭で販売する雑誌「ビッグイシュー」1年間の販売が伸び悩んでいる。4月で1年が経ち、販売は全体的に低迷し、自立したホームレスの数が、多くの販売員は継続の恐れを抱き、野宿生活から引き退いた。販売員は「ビッグイシュー」を「生活の救済」ではなく、単なる「生活の支え」の役割に留まっていると嘆息を漏らしている。（小山佳）

2007年4月26日（朝日新聞）

経済自立を目指すホームレスの人たちが街頭で販売する雑誌「ビッグイシュー」1年間の販売が伸び悩んでいる。4月で1年が経ち、販売は全体的に低迷し、自立したホームレスの数が、多くの販売員は継続の恐れを抱き、野宿生活から引き退いた。販売員は「ビッグイシュー」を「生活の救済」ではなく、単なる「生活の支え」の役割に留まっていると嘆息を漏らしている。（小山佳）

名古屋に新聞販売の仕事、日誌冊を売って生活するホームレスの人たちが街頭で販売する雑誌「ビッグイシュー」1年間の販売が伸び悩んでいる。4月で1年が経ち、販売は全体的に低迷し、自立したホームレスの数が、多くの販売員は継続の恐れを抱き、野宿生活から引き退いた。販売員は「ビッグイシュー」を「生活の救済」ではなく、単なる「生活の支え」の役割に留まっていると嘆息を漏らしている。（小山佳）

名古屋に新聞販売の仕事、日誌冊を売って生活するホームレスの人たちが街頭で販売する雑誌「ビッグイシュー」1年間の販売が伸び悩んでいる。4月で1年が経ち、販売は全体的に低迷し、自立したホームレスの数が、多くの販売員は継続の恐れを抱き、野宿生活から引き退いた。販売員は「ビッグイシュー」を「生活の救済」ではなく、単なる「生活の支え」の役割に留まっていると嘆息を漏らしている。（小山佳）

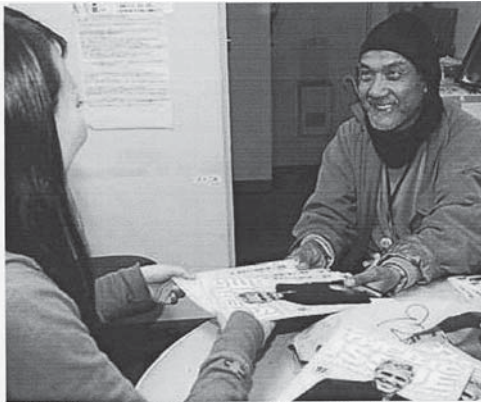


街角で「ビッグイシュー」を売る鈴木さん  
一名古巣市中區で、小林秀樹撮影

## 明日への不安尽きず

「明日への不安尽きず」という言葉が、ホームレスの人たちの生活の現実を写し出している。彼らは毎日を生き抜くために、様々な工夫を凝らしている。しかし、収入の不安定さや、住居の確保の難しさなど、明日への不安は尽きず、彼らの生活を苦しめている。多くの販売員は、雑誌の売上を生活の唯一の収入源としており、収入が減少すると生活が成り立たなくなるという不安を抱えている。また、ホームレスの人たちは、社会的な偏見や差別に直面していることも多く、精神的な負担も大きい。彼らの生活改善には、社会全体の理解と支援が必要である。

2007年6月28日（毎日新聞）



ビッグイシュー名古屋ネットのスタッフから販売する雑誌を仕入れる販売員一名古屋市中村区

## ホームレス支援誌販売2年 理解訴えイベント

きょう中区で

ホームレスが街頭で販売し、売り上げの一部が収入になる雑誌「ビッグイシュー 日本版」の名古屋での販売が15日で2年を迎える。ホームレス販売員と市民ボランティアが手を携えて販売活動を続けてきたが、最近話題性も薄れ、販売部数も伸び悩んでいる。13日には市民に理解と支援を呼びかけようとする周年記念イベントが開かれる。

2年前の販売開始当初から中区役所前で販売するトミシヤン(51)通称、以前は最新号が発売直後の1週間は30、50冊前後売れたが、最近では30冊前後しか売れない。販売員は、名古屋駅と栄に

いる3人。販売部数も毎月2000冊前後と、この2年間は横ばいで赤字が続く。支援団体「ビッグイシュー名古屋ネット」では、10人ほどの市民ボランティアらが、仕事や家事の合間に事務所で販売員に雑誌を卸すなどの支援を続けている。

イベントは13日午後1時から同4時まで名古屋市中区千代田5丁目の日本福祉大学名古屋キャンパス北館8階で。参加無料。NPOバンク代表理事の木村真樹さんが講演するほか、ビッグイシュー名古屋ネットの歴史や活動報告、質疑応答、バックナンバーの販売などがある。

またボランティアや、事務所経費を賄う1カ月500円のワンコインサポーターを募集している。詳しくは同ネット(070・69299・7800) <http://d.hatena.ne.jp/bigisuenagoya/> (小川智)

2008年4月13日 (朝日新聞)

### ビッグイシュー 写真展でPR 中村区

#### ホームレスの自立支援 英国発祥の雑誌

ホームレスの自立を支援する雑誌「ビッグイシュー」を紹介する写真展が19日、名古屋市中村区名駅4丁目のミッドランドスクエア3F「アイデアフレイムス」会場では、写真家の高松英昭さん(38)が5年以上かけて撮影した東京や大阪のホームレス販売員のポートレート27枚を展示。ホームレスのイメージからかけ離れた親しみのある顔が並んでいる。写真、小川智撮影。また名古屋の販売員の紹介コーナーもある。

ビッグイシューは、91年に英国で誕生し、日本では03年に大阪で創刊された。若者の視点から社会問題や著名人のインタビューなどを掲載。ホームレスのみが街頭で販売でき、1冊300円のうち、160円が彼らの収入となる。名古屋でも現在、栄や名駅前、金山駅など市内5カ所で販売されている。

写真展は28日まで。販売を支援する市民ボランティアなども募集している。問い合わせは同ネット(070・69299・7800) <http://d.hatena.ne.jp/bigisuenagoya/>

2009年1月20日 (朝日新聞)

文化



4

「新号 発売です！」。厳冬の大坂・梅田の歩道橋では毎日、一人のホームレスの男性が、ハリウッドスターが表紙を飾る雑誌を手に掲げ、道行く人々に声をかけている。

雑誌の名前は「ビッグイシュー日本版」。書店売りは無く、全国の主要都市の繁華街でホームレスが直接販売する。定価は三百円で、仕入れの百四十円との差額が収入となるため、男性の表情は真剣だ。

梅田から程近い「日本版」編集部が入るビルへ、雑誌の売れ行きを気にしながら運動する女性がいる。編集長の水越洋子さんだ。「六年前の創刊当時からずっとですが、雑誌を売るホームレスの生活が掛かっているので、毎号の編集は緊張の連続です」

★☆☆

水越さんは、もともと雑誌の編集経験はなかった。公務員、保育士、シンクタンクの研究員など職を変わる中、二



自ら編集したビッグイシューを手にする水越洋子さん（大坂・梅田）

「大きな問題」の意味。1991年に現英ロンドンで誕生した。日本版は1、15日の月2回発行。国際記事については世界80都市・地域のストリートペーパーと提携、相互使用している。

と敷居が高く、勇気がある」といふ側面も。活動に限界を感じた中、〇二年八月、偶然に読んだ雑誌の「ビッグイシュー・スコットランド版」を紹介する記事が目にとまった。ホームレスがビッグイシューを販売し、自立への道を開いているという内容だった。実態を自分の目で確かめようと、一カ月後、スコットランドに飛んだ。



ビッグイシュー視察のためスコットランドを訪れた水越さん（左）と〇〇二年八月、グラスゴーで

「不況で売れるわけがない」「不況で広告も取れないし、今の若い人は活字を読まない」。周囲の目は冷ややかだった。それでも「何もなかったら、大坂でホームレスが増えるばかり」と意を決した。構想に共感してくれた仲間三人

市民団体事務局長から雑誌編集者へ

水越洋子さん(55)

あきらめない人 応援

事務局長に就いた時、ホームレス問題に興味を持った。四十七歳だった。ホームレスを支援する人たちと交流する中で、炊き出しや毛布の配布など直接的な支援だけでは、住所を持たないホームレスはいつまでも就職できず、本当の自立につながらないと気づいた。

〇〇一年、貧困や環境な社会問題に取り組む市民団体の

問題にかかわるのは、ちょっと

と数百万円の資金を出し合

「編集の仕事なら、高校時代にあこがれた文筆と福祉の両方の仕事ができる。仲間から推されて編集長を引き受けた」

★☆☆

どうすれば、売れる雑誌を作れるのか、一年をかけて検討を重ねた。就職で悩んで

る若者やフリーターの力に頼る雑誌をコンセプトの一つにした。将来に不安を感じている若者なら、ホームレス問題に関心を持ってもらえと考えたからだ。読者層の中心を二十、三十代に絞った。

雑誌の表紙には、人を引くように映画スターや世相を映す人の顔写真を採用。海外版と共通の記事やエンターテインメント情報のほか、二、三と引きこもり、生命倫理、環境など国内の問題を独自取材した記事を盛り込み、若者の意見も多く載せると決めた。

★☆☆

昨年まで全国で販売登録をしたホームレスは延べ約八百人。うち約八十人が路上生活を続ける仕事に就き、生き方を変えられた。

創刊から二年間は赤字続きだったが、発売箇所が大坂から中部、関東、東北、九州など各地に広がる、実売部数が三万部まで伸び、四年目から黒字に転じた。しかし、さらに部数を伸ばすためには課題もある。

捨てられた雑誌を拾い、低価格で販売している人まだまだ多い。ホームレスに近づくことは「こわい」「きたくない」と、購入に抵抗感のある人も

だから、一般の人とホームレスとの間にある心理的な距離を縮めたいと願う。「ビッグイシューの存在を理解してもらったために、多くの人がホームレス問題を知らずともうたいたい。そのために地道から社会の問題を考える雑誌を作りたい」

水越さん自身、職というレールを何度も変え、人生をあきらめない人を応援する雑誌の仕事と出会えた。「ビッグイシューだけでホームレス問題が解決するわけではない。ただ、雑誌の販売で元金を取り戻し、再就職した人が訪ねてきてくれた時が一番うれしい。私もそんな人たちからエネルギーをもらっている」（紙山直泰）



ホームレス13の個性



ホームレスを撮影した写真展が、大阪市中央区玉造1丁目のカフェ「magatama」で開かれている＝写真。写っているのはいずれも彼らの自立を支援する雑誌「ビッグイシュー」を販売する人たちで、一見、モデルのような格好良さ。撮影した写真家は「とかく社会問題としてクローズアップされがちなホームレスだけど、彼らの個性を是非見て欲しい」。17日まで。（関根和弘）

社会問題や著名人のインタビューなどを掲載するビッグイシューは91年に英国で誕生し、日本でも03年に大阪で創刊。路上販売を担当するホームレスが1冊300円のうち160円を受け取る仕組みだ。展示されているのは、20代から70代までの販売員13人。「100円ショップ」で買ったサングラスや、ビッグイシューに寄付された洋服を身につけるなどして「できる限りのおしゃれ」を演出した。撮影場所も、東京・表参道ヒルズや若者向けショップのディスプレイ前などで、カメラ目線でポーズを決めるなどグラビア写真のような仕上がりがた。

撮影したのは埼玉県川口市在住の写真家高松英昭さん(38)。マイノリティーをテーマに活動し、国内ではホームレス問題に関心を持って、5年前からビッグイシューの販売員に密着。「路上生活者の個性や人生を写したいと思った。日常を

示すのもいいが、彼らを1人のモデルとして展示することで、逆に問題についての関心を引き起こしたい」と話す。

大阪城近くで出会った元社長を名乗るホームレスに「明日どうなるかわからへんし、金がすべてではない」と励まされた経験もあるという、カフェの田中慶彦さん(41)も「注意してみたら実はホームレスだったという方がお客さんの印象に残ると思う」。

ランチを食べにカフェを訪れた大阪市中央区の主婦長井育世さん(40)は「最初ホームレスとは全く気づかなかった。どこかの偉い社長さんかと思った」と話していた。

17日午後6時半から、高松さんと、路上生活者自身の視点から写真を撮っている販売員との「カメラマン談話」がある。問い合わせはmagatama(06・6765・8911)。

ビッグイシュー販売員 大阪で写真展

2009年5月14日 (朝日新聞)

●第4回ビッグイシュー名古屋ネット市民講座「漫画家ありむら講演会」 13日午後6時〜8時、名古屋市中区千代田5丁目日本福祉大学名古屋キャンパス北館7階。大阪府西成区のあいりん地区にある西成労働福祉センターに勤務し、4コマ漫画で約30年間、日雇い労働者の姿を描いてきた作者が、日雇い仕事の今昔を語る。入場無料。問い合わせは同ネット(070・6929・7688)へ。

2010年2月12日 (朝日新聞)

モデルはホームレス 写真集 6都市路上で発売
ホームレスの人たちをおしやれに撮影した写真集「STREET PEOPLE 路上生活者80人」(大塚次郎社エディタ)が完成。1日を、写真家の高松英昭さんから、倉庫6都市の路上で先行販売が始まった。赤いのもホームレスの人たちで、「私たちの存在を見たい」と熱が入る。定価2000円のうち1300円は、販売した人の手元に渡る。自立に向けて役立ててもらいたい。

仕事した給料貰ったああ夢か
「仕事した給料貰ったああ夢か」(以下略)
ホームレスの悲喜300句、本に
「ホームレスの悲喜300句」(以下略)
くれば「アムステルダムを歩いて」(以下略)

2009年6月1日 (朝日新聞)

2011年2月11日 (朝日新聞)

# ホームレス 雑誌売る

英国生まれ「ビッグイシュー」

午前七時半。スーツ姿のサラリーマンが早足で行き交う名古屋駅前で、ホームレスの木下光誠さん（五十）は「ビッグイシュー（三百円）」の看板を頭上に掲げる。  
「声を出すと逃げちゃうお客さんいるから」。午後三時すぎまでじっと立ち続ける。三百円の代金のうち、百六十円が販売者の収入。一日二十冊売っても食費で半分が消え、部屋に住む目標はなかなか達成できない。  
ビッグイシューを売る前は、缶拾いをしてい

## 缶拾いから転身「命と会話は大切」

た。一日かけて集めた缶を盗まれたこともある。「人より一つでも多く集めようとガツガツしていた」。でも、今は笑顔で話す。「最近ほ、こっちの方が分がいい」。体に気をつけてね」なんて声かけられると本当にうれしい。「命ある限り、生き続けなければならぬ。でも、そのためには人とのつながりが何よりも大切。『命と会話』。木下さんがビッグイシューを売って二年半で気づいたことだ。

写真・文 太田朋子



サラリーマンが足早に通り過ぎる

段ボールを使って看板を自作で作り、街角に立つ販売員↓名古屋市中区栄で



ハリウッドスターが表紙を飾った号も。事務所にはバックナンバーが保存してある

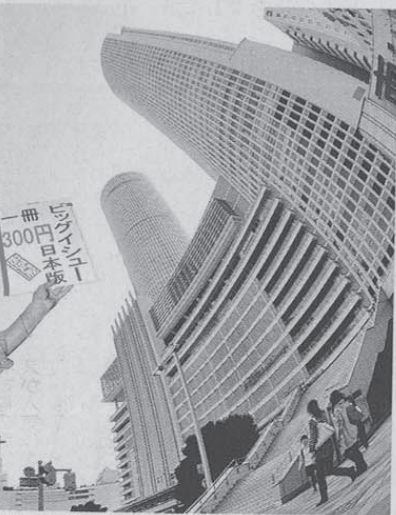


JRセントラルタワースなどの高層ビルに囲まれ、たった1人で販売を続ける（魚眼レンズ使用）

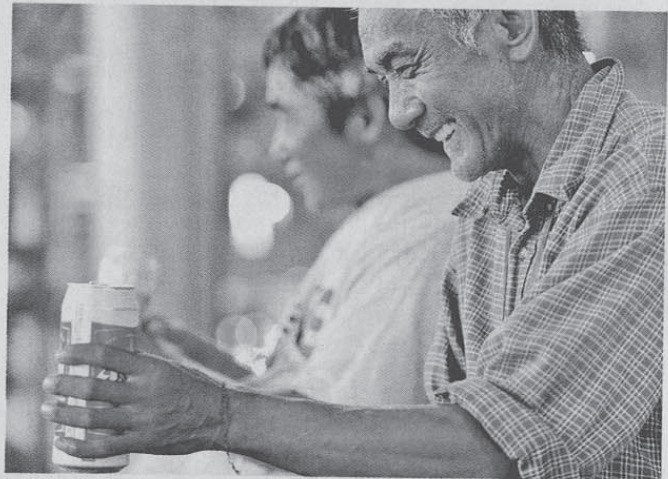
◇ビッグイシュー ホームレスの自立を目指す英国発祥の雑誌。日本版は2003年9月に創刊され、全国12都市で販売。名古屋では3年半前に始まり、名駅前や栄に3人の販売員がいる。支援者でつくる「名古屋ネット」では、10月30日午後6時から名古屋市中区の日本福祉大名古屋キャンパス北館で、ホームレス問題を考える講演会を開く。入場無料。

# グラフ

名古屋駅前で、じっと立ち続けて「ビッグイシュー」を売る木下光誠さん



左端を除き、いずれも名古屋市中村区で



たまに味わえる一杯。「やっぱり仕事の後はおいしいね」



## ビッグイシュー名古屋ネット

〒453-0014 名古屋市中村区則武2-8-13  
笹島労働者会館1F

Tel. 070-6929-7688

- Eメール =bigissue\_nagoya@yahoo.co.jp
- ブログ =<http://d.hatena.ne.jp/bigissuenagoya/>
- twitter=<http://twitter.com/bigissuenagoya>
- facebook=<https://www.facebook.com/bigissuenagoya>
- 郵便口座番号：00890-1-204792  
口座名義：ビッグイシュー名古屋ネット
- ゆうちょ銀行口座番号：当座0204792（089店）  
口座名義：ビッグイシュー名古屋ネット

発行元：大阪市立大学都市研究プラザ

〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138

TEL:06-6605-2071 FAX:06-6605-2069